

2016 年 2 月 15 日提出

ゼミナールの発言におけるフィラーの機能
ー「アノー」と「エート」に注目してー

教育科学専攻 人文・社会系領域

214M020 王茜茜

要旨

フィラーはコミュニケーションにおいて大きな役割を果たしているが、その機能について未だに明らかにされたとは言えないため、日本語教育においても日本語学習者へのフィラーの指導は、個別の場面での機能を指摘する断片的なものに留まっているということは先行研究において指摘されている。また、「アノー」と「エート」は日常生活でよく使われるが、二語の意味が似ているため、二語を使い分けることが難しいという声をよく耳にする。そこで、本研究では日本語教育に貢献するために、「アノー」と「エート」に焦点を当てて、従来のフィラー研究では分析対象とされてこなかったゼミナールというややフォーマルなスタイルの自然談話におけるフィラーの使用実態を解明し、その機能について考察した。

まず、ゼミナールの発言を「原稿説明時」と「質疑応答時」に分けて、「男女の使用差」と「日本語母語話者と中国人日本語学習者の使用差」の視点から、量的な面からフィラーの使用実態を考察した。その結果、フィラーの使用にはある程度の男女差が確認できた上、「原稿説明時」の場合は「エート型」が、「質疑応答時」の場合は「アノ系」が多用されているということが確認できた。さらに、中国人日本語学習者に多用されるフィラーは中国語にもそれらに対応するフィラーが存在するということも分かった。

次に、質的な面からフィラーについての考察において、ゼミナールの参加者の「役割」とフィラーの「出現位置」という二つの視点からフィラーの機能について分析を行った。結果として、フィラーは「役割」と「出現位置」によって機能が変わってくるということが確認できた。なお、中国人日本語学習者に多用されるフィラーの機能には、言葉や文を「ぼかす」機能があるということも確認された。

最後に、「アノー」と「エート」のそれぞれの使用環境について考察し比較した結果、「アノー」は「エート」より対人的機能が強く、独り言では使いにくいということを、量的な結果をもって示すことができた。また、「①『アノー』は『形式検索』の時に、『エート』は『内容検索』の時に多用される」、「②『エート』は難しさを感じた場合、その主張を受け手に示す機能を持っているが、『アノー』にはその機能を持っていない」という二点は従来の研究で指摘されていたが、本研究では実際の用例を用いて考察した結果、それらを裏付ける結果が確認された。

目次

序章.....	1
1. はじめに.....	1
第一章 フィラーの定義、認定基準および表記方法.....	3
1.1 フィラーの定義.....	3
1.2 フィラーの認定基準.....	3
1.3 フィラーの表記について.....	4
第二章 先行研究.....	5
2.1 フィラーに関する先行研究.....	5
2.1.1 フィラー研究へのアプローチ.....	5
2.1.2 フィラー研究の歴史について.....	5
2.1.3 フィラーに関する研究.....	6
2.1.3.1 山根（2002）.....	6
2.1.3.2 呉（2006）.....	6
2.1.3.3 中島（2008）.....	7
2.1.3.4 石川（2009）.....	7
2.1.3.5 小林(2011).....	7
2.1.4 フィラーに関する先行研究の問題点.....	8
2.2 日本語教育におけるフィラーの研究.....	8
2.2.1 梅林（1993）.....	8
2.2.2 野村（1996）.....	9
2.2.3 高村(2012).....	9
2.2.4 日本語教育におけるフィラーの研究の問題点.....	9
2.3 「アノー」と「エート」に関する研究.....	10
2.3.1 田窪・金水（1997）.....	10
2.3.2 小出（2006）.....	10
2.3.3 小出（2009）.....	11
2.3.4 高木・森田（2015）.....	13
2.3.5 松浦（1996）.....	13
2.3.6 「アノー」と「エート」に関する研究の問題点.....	14

2.4 本研究の位置づけ.....	14
第三章 研究方法.....	15
3.1 会話の分析方法.....	15
3.2 分析資料について.....	15
3.2.1 文字化資料について.....	17
3.2.2 文字化ルール.....	17
第四章 ゼミナールの発話におけるフィラー.....	20
4.1 日本語と中国語のフィラーの種類.....	20
4.1.1 原稿説明時の場合.....	22
4.1.1.1 フィラーの種類.....	22
4.1.1.2 日本語母語話者と中国人日本語学習者におけるフィラーの使用差（原稿説明時）.....	25
4.1.1.3 フィラーの性差（原稿説明時）.....	27
4.1.2 質疑応答時の場合.....	29
4.1.2.1 フィラーの種類.....	29
4.1.2.2 発話者ごとに使用されるフィラーの種類（質疑応答時）.....	31
4.1.2.3 日本語母語話者と中国人日本語学習者におけるフィラーの使用差（質疑応答時）.....	35
4.1.2.4 フィラーの性差（質疑応答時）.....	38
4.2 「原稿説明時」と「質疑応答時」の比較.....	40
4.3 本章のまとめ.....	43
第五章 ゼミナールの発話におけるフィラーの機能.....	45
5.1 役割によるフィラーの分類（質疑応答時）.....	45
5.1.1 日本語母語話者の結果の考察.....	46
5.1.2 中国人日本語学習者の結果の考察.....	52
5.1.3 役割によるフィラーの分類のまとめ.....	54
5.2 出現位置によるフィラーの機能に関する考察.....	54
5.2.1 フィラーの出現位置による分類結果の考察（日本語母語話者の場合）.....	56
5.2.2 フィラーの出現位置による分類結果の考察のまとめ（日本語母語話者の場合）.....	62
5.2.3 フィラーの出現位置による分類結果の考察（中国人日本語学習者の場合）...	63

5.2.4 出現位置による分類のまとめ	65
5.3 本章のまとめ	66
第六章 「アノー」と「エート」について	67
6.1 「エート」の使用の性差について	67
6.2 原稿説明時の「エート型」と質疑応答時の「アノ系」について	69
6.2.1 原稿説明時の「エート型」について	69
6.2.2 質疑応答時の「アノ系」について	72
終章 研究の成果と今後の課題	79
参考引用文献	81
添付資料1：各種類のフィラーの使用例	83
添付資料2：総発話数の内訳	97
添付資料3：役割によるフィラーの使用実態	98
添付資料4：出現位置による分類	100

序章

1. はじめに

『ACTFL-OPI 試験官養成要マニュアル』では、中級上、上級の口頭能力の判定要素の一つとして、「フィラー」が取り上げられている。会話教育においてコミュニケーション能力が求められ、フィラーの必要性が重用視されているのである。「エート」、「アノー」、「シー」のようなフィラーは一見した印象とは裏なり、実はかなり明確な使い分けがあり、コミュニケーションにおいて大きな役割を果たす（呉 2006）。また、日本語教育の立場からも、学習者を生きた話しことばの正しい理解・発話へと導く必要性を考えると、今後こういった要素を無視することはできない（野村 1996）。しかし、その機能について未だ十分に明らかにされたとは言えないため、日本語学習者への指導は、個別の場面での機能を指摘する断片的なものに留まっている（宮永他 2011）。従って、フィラーの機能の解明に向けた更なる研究は求められるが、本研究はゼミナール^①発話におけるフィラーの使用実態及びその機能の解明を試みるものである。

なお、渡辺他（2006）によると、「講演のような独話、対話のどちらにおいても、『アノー（一）』、『エ（一）』、『エート』、『マ（一）』が高頻度フィラーとして挙げられている」。その四語の内、「アノー」と「エート」の二語は機能において共通する面はあり、明確に二語の違いを説明するのは難しい。日本語母語話者はネイティブならではの語学感覚により無意識的に二語を使い分けることができるが、外国人日本語学習者はその語学感覚がないため、二語を正確に使い分けることが難しいという声をよく耳にする。本研究で、フィラーの中でも、特に「アノー」と「エート」の二語に焦点を当てるのはその理由による。

本研究の目的は次の3点に集約できる。

- ① 今までのフィラーの研究の分析対象とされなかったゼミナールというややフォーマルなスタイルの自然談話において、フィラーの使用実態を解明すると同時に、発話者の役割とフィラーの出現位置によりフィラー機能を探求する。
- ② 中国人日本語学習者の使用しているフィラーと日本語母語話者の使用しているフィラーを比較することにより、中国人日本語学習者のフィラーの使用実態と特徴を探る。
- ③ 「アノー」と「エート」の二語に焦点を当てて、二語の使用実態に基づき、それぞれの機能を明らかにする。

なお、本研究が分析対象としているゼミナールは日本語学ゼミナールである。同日本語学ゼミナールでは社会言語学分野の題材（日本各地の方言や日中の敬語等の対照研究など）

^① 本研究での「ゼミナール」とは、「一方的に教員の講釈を聞く講義ではなく、参加者がテーマに関する報告・議論を行うことを基本としている内容」を指す。

を取り扱っており、発表者によりテーマは様々であるため、参加者は発表者の発表内容を共有しにくいと考えられる。そのため、参加者が互いの共有感を得るためにフィラーが使用されるのではないかと考え、それに焦点を当てた。また、同ゼミナールの進め方として、前半では発表者による発表原稿についての説明（独話）、後半では参加者と発表者による質疑応答（対話）を行うため、独話と対話の二つの異なる談話形式におけるフィラーの比較ができることもゼミナールを研究対象とした決め手の一つである。さらに、参加者は日本語母語話者と中国人日本語学習者がいるため、双方の発話が同時に収集できるということも理由の一つである。

第一章 フィラーの定義、認定基準および表記方法

1.1 フィラーの定義

フィラーの研究が注目され始めたのはごく最近であり、その定義も研究者によって異なる（上田 2004）。『音声学大辞典』では「言い淀み」、大森(1991)では「ヘジテーション」、松浦（1996）では“filler”、野村（1996）、山根（1997b）では「フィラー」と命名し、それぞれ定義付けられている。さらに、山根(2002)は、フィラーを扱った先行研究の認定基準を整理した上で、フィラーを以下のように定義している。

それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係になり、発話の一部分を埋める音声現象。

その研究はフィラーに関する研究において比較的に新しいため、本研究ではその定義を採用する。さらに、その定義について、小出(2007)は、『それ自身命題内容を持たず』というのは、命題内の要素にならないということであろう。『他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にならない』というのは、応答詞、接続詞、副詞などのように、発話内、談話内の要素と、いかなる関係も結ばないというものと思われる」と解釈している。本研究でもこの点について同様に考える。

1.2 フィラーの認定基準

小出（2009）によると、フィラーの出自に関しては二つのタイプがある。派生系と専用系である。派生系とは副詞「まあ」や指示詞「あのー」などから派生したものを指し、専用系とは「えー」、「えーと」などのフィラーのみに使われるものである。それゆえ、派生系のフィラーに関して、フィラーである認定基準が必要であると思われる。小出（2009）では、山根(2002)のフィラーの定義に基づき、フィラーの認定基準について検討したところ、以下のような結論に辿り着いた。同認定基準は従来の研究のフィラーの認定基準の中において、最も具体的に記述しているため、本研究でもそれに従う。

フィラーの認定基準

- a. 実時間的に発話やその他の行動に伴って現れる音声である。
- b. それ自身は命題的な内容を持たないし命題との関わりも持たない。
- c. 文のモダリティ要素でもないしモダリティ要素との関わりを持たない。
- d. 談話標識（談話の組織を形成する要素）でもない。
- e. 単独では文としての価値を持たない。

- f. 当該の言語の中で、一定の音声形式を持つ。
- g. 出力時に、出力を支えるために（内容形成、調整、対人的な配慮と調整などのために）発せられる音声である。

1.3 フィラーの表記について

前述の 1.2 でも述べた通り、フィラーには、派生系と専用系がある。そのため、派生系の「まあ」や「なんか」などはフィラーとして使われる場合とそうでない場合がある。フィラーとして使われるものとフィラーではないものを区別して表記するために、本研究ではフィラーだと認定されるものを「カタカナ」で表記する。ただし、先行研究などの他の文献から引用したものは原文の表記に従う。

さらに、本文の中では「アノー」と「エート」は長音記号「-」を伴っているが、長音記号はあくまでもフィラーとして使われていることの印であり、二語とも必ずしもフィラーが長音を伴って発音されるというわけではない。しかし、本研究の文字化資料においては、発音を可能な範囲で忠実に表記するため、長音のものは長音を付けて表記し、長音ではないものは長音を付けない。なお、「あの一」の場合は、「あの一」より発音が伸ばしていることの印であり、必ずしも 4 モーラで発音されていることを表しているわけではない。

第二章 先行研究

2.1 フィラーに関する先行研究

2.1.1 フィラー研究へのアプローチ

小出（2009）によると、ここまでフィラーへのアプローチはおおむね次の4つの方向に整理することができると思われる。

I フィラー研究の4つのアプローチ

a. 心理学からのアプローチ

田中（1993、1995）に代表されると言ってもよいと思われるが、ここではフィラーは停滯現象の一つとして捉えている。そして、「停滯は、スピーチの生産過程の進行に固有の事情から停滯が生ずるとも考えられる。とすれば、停滯はその心的な過程を覗く『窓』になると期待されることになり、停滯研究が心理言語学の課題の一つになった」と述べられている。ここでは、フィラー研究の目的は、スピーチの生産過程を知るための手がかりということになる。

b. 談話論、談話管理論からのアプローチ

田窪・金水（1997）などに見られるように、対話処理に関わる心的操作のあり様、それに関わるフィラーの役割の解明、文という言語形式の形成過程の解明を目指すものである。認知的、心理的な面も含まれるが、田中らの純粋に心理的なアプローチより言語寄りのスタンスをとるものである。

c. 社会言語学的なアプローチ

塩沢（1979）、奈倉（1997）などに見られるように、年齢、性別などの社会的な要因が、どのように談話標識、フィラー使用に影響しているか、ということを経験としたものである。フィラーというものが、社会的な発達、あるいは社会的な場面との関わりが深いという性質に着目し、言語と社会的な要因との関係を解明の手がかりにしようとするものである。電話会話や講演など、談話形態とフィラーの関係を追究した山根（2002）の立場もこれに近いと言えるだろう。

d. 会話分析からのアプローチ

西坂（1999）に代表されるが、社会的相互行為の指標として、フィラーを見ようとするものである。フィラーが、相互行為の形成に際して、どのような働きをしているかという点にある。

2.1.2 フィラー研究の歴史について

山根（2002）によると、これまでのフィラーの研究は、およそ3期に分けられる。

まず第一期は1950年から1969年までである。この時期は、研究というよりもフィラーの存在を指摘したり、話し手や聞き手の心情について意見や感想を述べたりしたものが多い。桑原（1952）、国立国語研究所（1955、1960、1963）などがこれらに当たる。次に第2期は、1970年から1989年までである。この時期になると、『音声学大辞典』や『国語大辞典』等の辞典にフィラーが載り始め、フィラーのみを取り上げた研究も行われるようになる。しかし、辞典によって名称は異なり、フィラーの定義もさまざまであった。フィラーのみを扱った研究として小出（1983）等がある。また、この時期には心理学の分野でもフィラーについての研究がいくつかなされている。そして、第3期は1990年以降今日までである。1980年代後半になると会話分析が盛んになり、会話の中に現れるさまざまな言語表現が研究対象になるにつれて、数量的データを伴ったフィラー研究も行われるようになってきている。この時期の研究には山下（1990）、小林（1996）、山根（2002）などがある。

2.1.3 フィラーに関する研究

フィラーに関する研究は前述2.1.1、2.1.2に挙げたものがあるが、本論文では会話分析を用いた、比較的新しい山根（2002）、呉（2006）、中島（2008）、石川（2009）、小林（2011）の五つの研究を参考とする。

2.1.3.1 山根（2002）

山根（2002）では、講演、留守番電話、対話、電話の各談話においてフィラーのみを取り上げ、その出現種類、音声面、品詞における出現位置等を、数量的データを伴って分析している。さらに、話し手、聞き手双方における存在意義という点からアプローチし、フィラーには「①話し手の情報処理能力を表出する機能」、「②テキスト構成に関わる機能」、「③対人関係に関わる機能」との三つの機能があるという結果が得られた。

2.1.3.2 呉（2006）

呉（2006）では、『日本語話し言葉コーパス』の対話を調査対象とし、日本人母語話者によるフィラーの使用実態について、性差における違いを量的に分析した。その後、「マー」、「ネ、ヨネ、サ」及び「チョット、ダカラ、ナンダロウ（ネ）」の機能について会話管理における談話調節機能の視点から分析を行った。そして、実際の会話の中で使われるフィラーは、「間を取る」と「談話内容の価値を表す」という二つの機能を持つと結論づけた。なお、「フィラー」は文章のリズムを取ったりするために用いられるのではなく、相手の反応が気になったり、自分が言葉に詰まった時に、素直に出てくるものである。決して調子を取るために無意味に用いられたりするものではないとも述べている。

2.1.3.3 中島 (2008)

中島 (2008) では、『女性のことば 職場編』の中の自然談話を調査資料にした。その中の 6000 発話中に得られた 1680 のフィラーを分析対象とし、フィラーの出現率、出現位置とその機能を中心に考察した結果、以下のようなことが分かった。

①出現位置とフィラーの出現率の関係

- ・ 発話頭に出現する傾向が高いフィラー：ア、アー、アッ、エ、エート、デ、デー、シー、ウーン等
- ・ 発話途中に出現する傾向が高いフィラー：アノ、アノー、ソノ、ソノー、コノ、コー、ソー、ナンカ、エー、マ、マー、モー、ホラ等
- ・ ハイ、ハイッ、エエ、ウンは発話頭と発話末に出現する傾向が高い。ただし、エー、エ、アノー、アノ、ソノ、ナンカ、モー等のフィラーは発話頭にも発話途中にも、発話末にも出現する。

②出現位置と機能の関係

- ・ 発話頭：談話進行を管理する機能、すなわち発話境界の明示、発話の切り出し、発話の維持、前の発話の補正、話者の心的態度の表出等の機能を持つ。
- ・ 発話中：発話展開に関する機能、すなわち間つなぎ語、聞き手への注意喚起、話者の心的態度の表出等の機能を持つ。
- ・ 発話末：言いよどみ、言いさし、発話の終了という機能を持つ。

2.1.3.4 石川 (2009)

石川 (2009) では、日常会話 4406 発話（大学院生の雑談：20 代男性・女性）、テレビ放送 3717 発話（『はなまるマーケット』と『徹子の部屋』：司会者 1～3 名及びゲスト 1 名による対談、談話資料としての使用未承諾）を談話資料とし、あいづちの機能とフィラーの機能の比較を中心に行った。そして、あいづちは「相手の事情を考慮」して表出されるものであり、あいづち発話が欠けると連続的な会話が成立しなくなるが、フィラーは「相手の事情を考慮せずに、発話者自身の都合によって表出する」という点において、あいづちと異なると述べた。さらに、そのため、「あの」や「えー（と）」のように、フィラーでしか用いられない形式や、相手の発話への「理解」を表明する「そう（か）」（そっか、そうですか）のように、あいづちでは頻繁に用いられるのに、フィラーにおいては用例が少ない形式も存在するのであるとも指摘している。

2.1.3.5 小林 (2011)

小林 (2011) では、中学校・高校の授業の録音を文字化した資料により、教師の授業談

話におけるフィラーの使用実態について調査した。授業談話には一般に教師から生徒への一方的な講演的な要素と、生徒と教師の交互のやり取りによる対話的な要素とが含まれる。同論文では、教師がより意識的に授業内容を生徒に「分からせる」という立場から、「聞き手の注意を喚起する」、「言いよどみを避けるなどにフィラーが意図的に用いられたり避けられること」を予想し、その点を明らかにするために、講師の発話についてのみ分析を行った。分析方法として、フィラーの量的な出現状況を調査した後、出現位置により、フィラーの機能について考察した。

2.1.4 フィラーに関する先行研究の問題点

フィラーに関する先行研究を概観すると、フィラーの研究は1990年代以後から盛んになり、心理学や会話分析などのアプローチから行われるようになったということは分かる。だが、筆者が調べた限りでは、日本語のフィラーに関する研究において、携わっている研究者の数も限られているがゆえか、それに関わる論文が少ない。フィラーの機能解明に向けて更なる研究が求められていると言えよう。

なお、会話分析を用いた五つの先行研究から、フィラーは決して無意味に使用されているものではなく、談話において一定の機能を果たしているということも分かった。だが、先行研究から浮かびあがった最も大きな問題は、談話を分析資料にする際に一発話の認定方法を決めていないということであろう。フィラーの出現位置は発話の認定方法により変わってくる。中島（2006）、石川（2009）、小林（2011）の三者はともにフィラーの出現位置（発話頭、発話中、発話末）について分析したが、一発話の認定方法について記述されてないため、結果についての捉え方が読み手により変わってくると思われる。よって、自然談話を対象にフィラーに関する研究を行う際は、「一発話の認定方法」を明確に決める必要があると考えた。

2.2 日本語教育におけるフィラーの研究

フィラーに関する研究は日本語母語話者を対象とするものがほとんどである。日本語教育におけるフィラーに関わる研究は限られているが、梅林（1993）、野村（1996）、高村（2012）などがあった。

2.2.1 梅林（1993）

梅林（1993）では、フィラーを「話し手がためらい、そのために音の流れが停滞し、淀むこと」と「言いよどみ語」と名付けた。さらに、言いよどみ語を、①「アー、イー、ウー、エー、オー」の長母音、②「①以外のもの。具体的には、「コノ（-）、ソノ（-）、アノ

(-)、ウン、ウーン、コオ (-)、ハイ、マアなど」と分類した。その分類に基づき、中級程度の留学生の談話を観察した結果、長母音のほか、「コノ、ソノ、アノ」などの言いよどみ語が多用されるということが分かった。そして、留学生が、「言葉につまった時には、言いよどみ語を用いればよい」という知識から、意識的に言いよどみ語を用いるということがかなり考えられると述べている。

2.2.2 野村 (1996)

野村 (1996) では、大学での講義のデータを用い、談話分析的な観点から独話におけるフィラーの機能を考察するとともに、日本語教育の立場から学習者よつての分かりやすさとの関連に焦点を当てて文科系の講義と理科系の講義の違いについて調査を行った。結果として以下の三点が明らかになった。

- ① フィラーのように従来の文法を中心とする研究においてなおざりにされてきた要素も談話あるいは言語活動においてそれなりの機能をもつ。
- ② 文科系の講義と理科系の講義とでは分かりやすさに関して質の違いが見られる。
- ③ 今後日本語教育では理科系学習者向けの指導法の開発が進んでいくと思われる。

2.2.3 高村 (2012)

高村 (2012) では、日本語学習者のインタビューでの発話を資料に、聴取者にマイナスの影響があるポーズ、フィラーとのマイナスの影響がないポーズ、フィラーの特徴について分析した。フィラーに関する結果については以下の2点を挙げている。①聞きやすさの評価が低い発話は、フィラーの数が非常に多い。②プラスに評価された発話は、ほとんど発話節の頭にフィラーが出現しているが、聞きやすさの評価が低い発話は、発話節中や発話節末尾にフィラーが出現する。

2.2.4 日本語教育におけるフィラーの研究の問題点

梅林 (1993) は自然談話を分析したのではなく、それまでのフィラーに関する先行研究に基づき、留学生の会話を観察することにより研究したため、結論もあくまで推測までいかないので、やや信憑性に欠けるのではないかと思った。そして、野村 (1996) は実際の談話を扱っているものの、結果としてはフィラーが言語活動においてそれなりの機能を持つ指摘に留まっているため、具体的な機能の解明が更に求められているであろう。

また、高村 (2012) に関しては、「聞きやすさ」という評価を基準にフィラーを分析している点について疑問に思った。「聞きやすいかどうか」は聞き手の主観的な判断に左右されるため、やや客観性に欠けるところがあると考えられたからである。よつて、自然談話を用

い、客観的に外国人日本語学習者のフィラーの使用実態を解明することが求められていると感じた。

2.3 「アノー」と「エート」に関する研究

2.3.1 田窪・金水（1997）

田窪・金水（1997）によると、『えーと』、『あの一』は場つなぎ語であり、話し手が自分のデータベースで検索や演算を行う間、いわば場つなぎ的に発話される談話標識とされる。また、「この標識を自分へのモニターとして使用するだけではなく、聞き手に対して『有意味な発話にはもう暫くかかるのでそれまで待機してくれ』との指示として利用することもできる。この場合はまだ発話の権利を保持させてほしいと相手に示しているともいえる」と述べている。そして、「えーと」と「あの一」の違いについて、以下のように説明している。『えーと』は基本的には、話し手が知識の検索或いは知識を用いた演算に入る時、あるいは、すでに入っている時に用いられる。つまり、演算領域を確保するために集中したり、聞き手とのインターフェースを一時的に断絶する際に用いられる。一方、「あの一」は「基本的には話し手が聞き手に向けての適切な表現形式（ものの名前等も含む）の検索／作成に入っている時に用いられる。したがって聞き手を必ず予定しひとりごとには現れない（この意味で聞き手とのインターフェースの断絶は不完全と言うこともできる）」。要するに、「えーと」は「内容検索」の言いよどみであり、「あの一」は「形式検索」の時に用いられる。（波線は筆者）さらに、「人に話しかけようとしたり、言い訳をしたりする場面で、『あの一』が多く用いられ、またその方が丁寧さが感じられるのは、相手のことを顧慮し、より適切な表現を選ぼうとしている態度が示せるからであると考えられる」と述べている。

2.3.2 小出（2006）

小出（2006）では、「アノー」の由来、機能に関して述べられている。同文によると、「アノー」の機能は、「話し手が自分の発想から発話を展開することの前触れをする。これは、それまでの談話の流れに関わりなく持ち出されることもあるので、場合によっては、それまでの談話の流れを中断することもある」ということである。さらに、その機能は何に由来するかについて、フィラーの「アノー」が、指示詞の「あの」がフィラー化してできたからと言っている。フィラーの「アノー」は指示詞の「あの」から「対人的機能」を引き受けた。

同文の「アノー」の機能について記述を詳しく引用すると、如何に通りでである。

a、発話冒頭の「あの一」

発話の冒頭の「あの一」は、「①談話ステップの移行をマークする性質（例1）」と「②談話の開始への打診をマークする性質（例2）」を持っている。

例1：

1：はい、あの、今日はわざわざ、あの、お越しいただきまして本当にありがとうございます。

2：どんでもありません。

例2：（ハンカチを落としたのに気づかず歩いていこうヒトを呼び止める）

あの一、もしもし、ハンカチ、落としましたよ。

b、冒頭位置以外（およびその性質に準じる）位置に現れる「あの一」

冒頭以外に現れる「あの一」は、同一の発話の中に複数回現れる場合のあることから、その場合の「あの一」は、談話局面の移行というような、談話の構造に関わるものではない。「あの一」は、聞き手の様子を見ながら談話を調整するときに現れる。つまり、「あの一」が、話し手自身の発想、領域、都合を基盤とした発話を行うことをマークするものである。

2.3.3 小出（2009）

小出（2009）では、「エート」の性質、機能、出現環境に関する陳述、および「アノー」と「エート」の異同について述べられている。同文によると、「エート」は心内で発話に必要な情報、あるいは、表現形式が形成されていないことに気づき、その空白を埋めるために、情報形成あるいは表現形式形成のための心的活動に入ろうとする状態にあることを示すのである。そして、「エート」の機能について、以下の二つがあると述べている。

a. 談話プランとの関わりを表示すること

「えーと」の使用の前提には、談話参加者間で暗黙のうちに形成されている談話プランがあると想定される。「えーと」は、そのプランに沿って、発話者が発話していることを示す。したがって、談話の開始部に現れてない。また、「あの一」には、このような、談話プランとの関わりを示す機能はない。

b. それまでの心内の作業内容をクリアすること

「えーと」は、話題の転換点に生じる心内の空白に対する認知と連動している。談話の転換点では、それまでの談話の流れを止め、新たな話題を導入するわけであるが、その切り替えに伴って、心内に生じた空白の認知を「えーと」がマークするとともに、また、その切り替えのために「えーと」によってそれまでの談話の流れを止め、意識的に空白を形成することもある。

そして、「エート」の出現環境に関して、「①応答」、「②誤解に基づく質問などに対応する際」、「③知悉していることがらについて聞かれた場合」、「④質問の冒頭」、「⑤話題の切り替えに利用される」の五つの状況に現れると言っている。

さらに、「アノー」と「エート」の異同点について以下の三点があると述べている。

a. 談話（あるいはコミュニケーション）の開始に使えるか

「あの一」によってコミュニケーションを開始することはできるが、「えーと」はできない。

b. 談話の暗黙のプランとのかかわりはあるか

「えーと」は、談話プランへの整合性が高く、その分、「えーと」の後ろに持ち出される話題についての制約が強い。新しい話題は、当該の談話に関係のある話題という認識が保持される範囲になければならない。

c. 「えーと」を使うことのできる参加者はだれか

「えーと」は、参加者で了解された談話のプランにしたがって進行しているときに発話権を持つ参加者によって使われる。「あの一」には、そのような制約はないと思われる。「あの一」は割り込みにも使われる。

ここまでの小出（2006）と小出（2009）により、「アノー」と「エート」の二語の性質について明らかになったことを、以下の表1のようにまとめることができる。

表1 「アノー」と「エート」の性質のまとめ

	由来	出現環境	談話機能
ア ノ ー	派生系：指示詞の「あの一」がフィルター化してきた	発話の冒頭	①談話ステップの移行をマークする ②談話の開始への打診をマークする
		冒頭以外	話し手自身の発想、領域、都合を基盤とした発話を行うことをマークする
エ ー ト	専用系：もともとフィルターである。	①応答	a. 談話プランとの関わりを表示すること b. それまでの心内の作業内容をクリアすること
		②誤解に基づく質問などに対する対応する際	
		③知悉していることがらについて聞かれた場合	
		④質問の冒頭	
		⑤話題の切り替えに利用される	

2.3.4 高木・森田 (2015)

高木・森田 (2015) では、質問に対する反応の開始部分に現れる「ええと」が、相互行為を組織する上でどのような働きを担っているのかを明らかにする。同論文は具体的にどのような環境において、質問に対する反応が「ええと」で開始されるかを精査することにより、上述の位置における「ええと」が、単なる「時間稼ぎ」や発話産出過程の認知的プロセスの反映ではなく、質問に対する反応を産出する上での「応答者」としてのスタンスを標示していることを明らかにする。結果として、日本語話者は、質問を向けられた時、まずは「ええと」を産出することにより、「今自分に宛てられたその質問に応答するには、ある難しさを伴うが、それでも、応答の産出に最大限に務める」という主張を受け手（質問者）に示すことができるということが挙げられている。さらに、その働きは「あの (-)」が持っていないとも述べている。同論文では、質問に対する反応の開始部分に限定して考察したため、「アノー」と「エート」が用いられるほかの状況についても考察する必要があると思われる。

2.3.5 松浦 (1996)

松浦 (1996) では、対話という形式の自然談話を用い、質的分析の面から、時間稼ぎと相手の注意を引きつける機能に着目し、「アノー」と「エート」に焦点を絞り、それぞれの談話の中における傾向について考察した。その結果以下の傾向が見られた。

(1) アノー

- ・時間稼ぎの機能として、多く文中において、話す事柄が想起された後の、発話内容の整理や適切な表現選択の際に用いられる。
- ・話者交替後の文頭において用いられた場合には、時間稼ぎの機能だけでなく、相手の注意を引きつける機能をもつこともある。
- ・話者交替が行われず、現在の事柄について述べたり、自分の意見を述べたりする場合には、「アノー」が好まれる。

(2) エート

- ・時間稼ぎの機能として、多く話者交替後の冒頭において、頭の中の整理を行い、話す事柄の想起の際に用いられる。
- ・話す事柄が想起された後にも関わらず、話者交替後に用いられた場合には、相手の注意を引きつける機能を持つ。
- ・話者交替後、数的情報が核心部分になっている場合、或は未だ話すべき事柄が想起されていない場合には、「エート」が好まれる。

松浦 (1996) は、「時間稼ぎ」と「相手の注意を引きつける」という二つの機能に限定して、

「アノー」と「エート」について分析を行ったが、「アノー」と「エート」にはその二つ以外の機能を持っていると思われるため、より包括的に二語について考察する必要があると考えられる。

2.3.6 「アノー」と「エート」に関する研究の問題点

田窪・金水（1997）では、談話論、談話管理論というアプローチから、「アノー」は「形式検索」の時、「エート」は「内容検索」の時に多用されるという結論に導いた。しかし実際このような心的操作が行われているかどうか客観的な根拠を示すのは難しいのではないだろうか。そして、小出（2006）と小出（2009）に関しては、別々の談話資料により、「アノー」と「エート」について考察したがゆえに、出現環境と談話機能がはっきり分かれるものではないと感じた。具体的には、「アノー」の出現環境の「発話の冒頭」と「エート」の出現環境の「質問の冒頭」が同じ場合であることも考えられるので、表1の出現環境と談話機能から「アノー」と「エート」の違いを説明できないと考えた。さらに、高木・森田（2015）では質問に対する反応の開始部分に限定する、松浦（1996）では、「時間稼ぎ」と「相手の注意を引きつける」という二つの機能に限定するというように、局面的に「アノー」と「エート」について分析を行っている。よって、二語の違いを解明するには、より包括的に考察する必要があると考えた。

2.4 本研究の位置づけ

本研究では、従来のフィラーの研究において対象とされてこなかったややフォーマルなゼミナール発話という自然談話を分析資料とする。具体的な研究方法として、まずゼミナールの前半の「原稿説明時」と後半の「質疑応答時」に分けて、それぞれの時間に現れるフィラーを種類、出現率、日本語母語話者と中国人日本語学習者との各使用差、性差について量的に分析し、ゼミナール発表におけるフィラーの使用実態を明らかにする。

次に、質的な面から「質疑応答時」のフィラーを対象に録音データに表われた代表的な機能について分析する。従来の出現位置による考察のほかに、発話者の役割からも分析する。調査対象となったゼミナールにおける役割は、「発表者」、「それ以外の参加者（教員、学生）」に大別できる。それらの発話者の役割によって発言の機能が変わると考えられるため、先行研究では考察の視点とされてこなかったそれらの発話者の役割からフィラーの機能の解明を試みる。なお、この際においても、日本語母語話者と中国人日本語学習者とを比較し、中国人日本語学習者のフィラーの使用実態の特徴を探る。

最後に、「アノー」と「エート」には最も焦点を当てて考察する。前述の「アノー」と「エート」の使用実態に基づき、先行研究ではまだ実証されていない二語の違いを見いだす。

第三章 研究方法

3.1 会話の分析方法

Levinson(1983)によると、会話の分析には、「談話分析 (discourse analysis)」と「会話分析 (conversation analysis)」の二つのアプローチが考えられる。

「談話分析」(DA) は、言語学における技法を、文という単位を越えて応用しようとするものである。その手順は、次の通りである。(a) 基本的範疇の談話単位を取り出す(b) その範疇の適格連鎖 (co-herent discourses) と、不適格連鎖 (incoherent discourses) を区別するような一連の規則を定式化する。その手順に伴う典型的な特徴としては、適格、不適格の (または一貫性のある・ない) 談話について、直観に訴えることが挙げられる。また、一つ、ないし 2、3 のテキスト (分析者によって作られたものが多い) を取り上げ、その限られた範囲内のあらゆる興味ある特徴を深く分析しようとする。

一方、「会話分析」(CA) は、エスノメソドロジスト達 (ethnomethodologists)、特に、Sacks、Schegloff、Jefferson などによって確立された研究方法である。性急な理論の構築を避けるため、自然に行われた数多くの会話の記録を資料とし、そこで繰り返し起こっているパターンについて考察する経験的・帰納的なアプローチである。言い換えれば、直観による判断に訴えることをできるだけ排除し、一つのテキストのみに基づく分析を避けるために、言語現象をいくつかのテキストにまたがって検討する。

また、ザトラウスキー (1993) は、「会話の分析は、経験的な方法を必要とする。つまり、内省に基づく資料を用いた従来の言語分析ではなく、実際の観察データに基づく帰納的な方法によって分析できるのである。」本研究では、筆者の内省による考察をするのではなく、実際のデータに基づく分析を行うため、「会話分析」(CA) というアプローチをとり、ゼミナール発話におけるフィラーの機能を実証的に考察する。

3.2 分析資料について

本論文では、三重大学教育学部国語学ゼミナールでの発言を分析資料とする。同ゼミナールは方言や敬語など様々なテーマを取り扱っており、発表者が自ら興味のあるテーマを選び、そのテーマについてまとめて発表するという内容である。また、ゼミナールの参加者はゼミの指導員と日本人学生並びに中国人留学生である。一回の時間は 90 分であるが、調査では 2014 年 4 月 27 日から 2015 年 11 月 2 日までの間に計 13 回録音し、その中から、中国人留学生の発表の場合と日本人留学生の発表の場合を 5 回ずつ選び、その 10 回計約 851

分の録音を文字化し、分析資料とする。

録音はすべて三重大学教育学部一号館 402 教室にて行われ、事前に協力者の許可を得た後に行われたものである。また、録音の内容は協力者のプライバシーに関わることもあるため、本研究では、協力者のプライバシーの保護を考慮した末、アルファベットと数字を用いて話者を示す。協力者の中には、日本語母語話者と中国人日本語学習者がいるため、日本語母語話者の発話か中国人日本語学習者の発話かが分かるように、日本語母語話者の協力者を示す記号は「J」からはじまり、中国人日本語学習者^②の協力者を示す記号は「C」からはじまる。具体的な情報を以下の表 2 をもって示す。

表 2 話者情報

話者	性別	年齢	国籍	出身地	役割
J1	男	46	日本	福井県勝山市	ゼミの指導者
J2	男	23	日本	三重県津市	学生
J3	男	23	日本	三重県四日市市	学生
J4	男	23	日本	奈良県桜井市	学生
J5	女	23	日本	広島県海田町	学生
J6	女	23	日本	愛知県常滑市	学生
J7	女	22	日本	三重県伊勢市	学生
J8	女	21	日本	三重県松坂市山室町	学生
J9	女	22	日本	三重県津市一身田	学生
J10	女	22	日本	三重県多気郡多気町	学生
J11	女	22	日本	愛知県愛西市	学生
J12	女	23	日本	奈良県大和高田市	学生
J13	女	21	日本	三重県鈴鹿市	学生
J14	男	21	日本	三重県員弁郡	学生
J15	女	21	日本	愛知県海部郡蟹江町	学生
J16	女	21	日本	三重県三重郡	学生
J17	女	21	日本	三重県津市川方町	学生
J18	男	67	日本	石川県	ゼミの指導者（見学のため一回のみの参加）
C1	女	28	中国	山東省	学生
C2	女	25	中国	浙江省	学生
C3	男	25	中国	江西省	学生
C4	女	22	中国	天津市	学生
C5	女	23	中国	広西省	学生

^② 中国人日本語学習者の日本語学習暦（調査時点）：C1（9年目）、C2（7年目）、C3（5年目）、C4（3年目）、C5（5年目）

3.2.1 文字化資料について

文字化資料とは、前述の日本語学ゼミナールの10回の録音を文字化させたものである。同ゼミナールでは、一回90分の時間に一人の発表者による発表を行う。そして、司会者は一人いて、全体の流れをコントロールし、他の参加者は質問や意見などがある時に発言するという形になっている。ゼミナールの全体の流れとして、まずは発表者による原稿の説明を行い、その後は発表者と他の人との質疑応答になる。その二つの時間の談話の形式が明らかに違うため、本研究では「発表者による原稿を説明する時」を「原稿説明時」、その後の「質疑応答の時間」を「質疑応答時」と呼び、その二つの時間に分けて分析することにした。さらに、後にデータから用例を引用する際、データの出どころが分かるように、各データに①～⑩の番号を付けた。文字化資料の詳細は以下の表3をもって示す。

表3 文字化資料の詳細

録音 番号	発表者	司 会	全長(分)	原稿説明時 (分)	質疑応答時 (分)	録音が行われた日
①	J2	J4	約85分	約27分	約58分	2014年12月1日
②	J4	J7	約90分	約20分	約70分	2014年12月8日
③	J5	C2	約72分	約17分	約55分	2015年10月19日
④	J6	J2	約84分	約22分	約62分	2014年7月12日
⑤	J13	J14	約85分	約13分	約72分	2015年7月6日
⑥	C2	C5	約87分	約23分	約64分	2015年10月15日
⑦	C3	J12	約88分	約30分	約58分	2014年5月25日
⑧	C3	J8	約80分	約13分	約67分	2015年11月2日
⑨	C5	C3	約90分	約31分	約59分	2014年5月18日
⑩	C5	C3	約90分	約29分	約61分	2015年10月26日
合計			約851分	約225分	約626分	

3.2.2 文字化ルール

文字化データの表記は、読みやすさを考慮し、漢字かな混じり形式にした。可能な範囲で音声を忠実に再現させるため、筆者の一貫した判断基準で、促音や長音だと思ったものを、促音や長音符号をつけて表記する。また、フィラーだと判断するものは、フィラーでないものと区別するために、カタカナで表記する。なお、非言語の状況などを説明するために、表記記号を用いて表記する場合がある。その表記記号を以下の表4に示す。

表 4 文字化に用いた表記記号

()	相手の発話途中に発せられた相づち的な発話のうち、発話権を取得していないもの
[]	非言語行動（笑い、沈黙など）
↑	イントネーションが上昇することを示す
↓	イントネーションが下降することを示す
< >	重なって発話されたん部分は< >で括る
[>]	後ろの< >で括った部分と重なっていることを示す
[<]	前の< >で括った部分と重なっていること
#	聞き取れないものを表す。（#は一モーラを表す）

なお、文字化する際、「原稿説明時」と「質疑応答時」との二つの時間において、異なる規則に従った。

まず、「原稿説明時」に関しては、発表者が原稿を見ながら読むのがほとんどであるため、すべての発話を文字化するのではなく、フィラーが用いられている文のみ文字化する。フィラーが使われない、原稿を読んでいるところは、[原稿を何秒・分読む]で示す。文字化資料のエクセルへの入力時は、見やすさを考慮して適宜改行した。詳しくは例 1 をもって示す。

例 1：録音番号③

J5：3 推量確認の機能、エー、4 情報の伝達機能、5 相互了解の形成確認の機能、条件について、エー、3、4 の条件について、[原稿 24 秒読む]。で、大台町方言のがんにいきます。ウン、ろ、録音調査の中で [原稿 12 秒]。

そして、「質疑応答時」に関しては、すべての発話を文字化する。さらに、李（2000）を参考に、「一人が話し始めてから話し続けることをやめるまで」を「一発話」と認定し、発話ごとに改行する。「質疑応答時」での発話は、例として使われる際に一連の談話データの出どころが分かるように番号を付けて示す。例えば、②-100 で示される発話は、録音番号（表 3 の内）の 2 番の発話番号 100 番目の発話であることを示している。

李(2000)によると、ここで言う「話し続けることをやめる」とは、具体的に、次の三つの状況として観察される。なお、この三つの状況は「発話」が終了する型でもある。

1) 話す機会を他の会話参加者に譲るために、話し続けることをやめる。

(他の会話参加者に情報や同調を求めること)

2) 話がもう終わったので、話し続けることをやめる

(情報提供行動を終えること)

3) 話がまだ終わってない時、他の会話参加者の発話による遮りで、話し続けることをやむを得ずにやめる

具体的状況を以下の例 2 をもって説明する。

例 2 :

[①-101] J3: エトー、例えば、例えば、マー、ピンクいが、ピンクいが言うだろうと実際に思ってた、で、実際に言うっていう結果が出たとして、それがいいじゃないんですか。

(はい)、それで、言わない、絶対若い方が言うだろうと思ったのに、<老年層の方が>[>]

[①-102] J2: <その理由を>[<]を追求するまで行かないっていうことですか。

[①-103] J3: そう。

①-101 の発話は J3 がまだ話が終わってない時に、J2 の発話による遮りで、話し続けることをやむを得ずにやめたため、上記の 3) の状況に相当する。そして、①-102 は質問して話す機会を他の人に譲る状況なので、上記の 1) に相当する。①-103 は話が終わって話し続けることをやめたため、上記の 2) の状況に相当する。

一方、話す機会を他の会話参加者に譲ったり、話がもう終わったという理由で話しづけることをやめたりしても他の会話参加者は何も話さないことがある。この場合、元の話し手が話し続けても、別の発話の開始として扱う。以下の例 3 はこのような場合である。

例 3 :

[⑥-217] J1: ア一、説明する側としては、アノ、そういうあり得るかもしれません。アノ一、みなさんの、アノ一、教採の面接の時には、話してました。マー、別のコースの子なんですけど、その人、エー、だから、あの一とえーと多発、多発してたんで、(はい)、あれ 1 分間、基本的にひとり 1 分間でやってるから、1 分間の中であんまりやっぱり、アノ一、あの一えーとが多いと、ほとんど分からないん、マー、実際そうだったので、ウン、C2 さんの発表をですね、活かしてもらえると思うんですけど、[笑い]、ウン。[沈黙 23 秒]

[⑥-218] J1: みなさん教育実習ですけど、そういう意識とかってありましたか。教育実習する時に、あの一とかえーとか、コノ一。

第四章 ゼミナールの発話におけるフィラー

4.1 日本語と中国語のフィラーの種類

まず、日本語のフィラーの種類についてである。本研究では、第一章 1.2 節のフィラーの定義と同じく、フィラーの種類の分類も山根（2002）を参照する。具体的には以下のよう
に分類する。各フィラーの実際の用例を添付資料 1 として本文の末に掲載する。

- (1) 母音型：母音「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」と、それらの母音が伸びた「アー」「イー」「ウー」「エー」「オー」。ただし、「あ そう」のような相づちの「あ」は含めない。
- (2) あいまい母音型：「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」のいずれの母音にも分類できないあいまいな母音。多くは「ア」と「エ」の間のような音。長短 2 種類ある。
- (3) エート型：「エート」「エートー」「エット」「エットネ」など、「エト」の間に長音・促音が挿入されたり、助詞が付加されたりしたもの。
- (4) コーソー型：「コ（ー）」「コーネ」「ソ（ー）」「ソーネ」など、「コ」「ソ」の長短、「コー」「ソー」の後に助詞が付加されたもの。「こう 友だちがいつも担いで」のように、話し手が動作などでその状態を示す時に使用される「こう」は含めない。また、応答の冒頭に來た「ソーデスネ」は、相づちととらえ含めない。
- (5) コソア型：人や物、直前の発話で述べられたことを指示する以外に用いられる「コノ（ー）」「ソノ（ー）」「アノ（ー）」。
- (6) ナンカ型：「ナニ」「ナンカ（ー）」「ナンチューノ」「ドューカ」など、疑問詞を含むもの。「ナンカネ」のように助詞が付加されたものも含む。「ナニ」「ナンチューノ」などについては、聞き手へ問いかけているのではなく、自問しているもののみを含め、また「ナンカ」については、「なんか食べたい」のような「なにか」が不特定な物やことを表している場合は含めない。
- (7) ネー型：「ネ」「イヤ」「ハイ」など、話し手が聞き手の注目を集めようとして用いるもの。長短 2 種類がある。否定や話し手の感情表出の「いや（あ）」は含めない。
- (8) ハイ型：「ハイ」「ウン」「ホン」「フン」など、相づちと同じ言語形式だが、相手に対して打たれるのではなく、納得したり理解したりした時に自分めあてに打つもの。「ウ」と「ン」、「ホ」と「ン」、「フ」と「ン」の間に長音が挿入されるものも含む。
- (9) マー型：「マ（ー）」「マーネ」など、「マ」の長短、「マー」の後に助詞が付加されたもの。「まあ きれい」のように感動や驚きを表す「まあ」は含めない。
- (10) モー型：「モ（ー）」「モーネ」など、「モ」の長短、「モー」の後に助詞が付加さ

れたもの。「もう5時だ」のように「じきに」の意味を持つもの、「もう一つどうぞ」のように「さらに」の意味を持つ「もう」は含めない。

- (11) ンー型:「ン (一)」「ンートネ」「ウン」「ウント」など、「ン」の長短および「ウン」と、それらの後ろに「ト」や「ト」の助詞が付加されたもの。

次に中国語のフィラーの種類についてである。中国語のフィラーに関しては、黄 (2004) を参考する。

黄 (2004) によると、中国語フィラーを大きく Pause Filler と Verbal Filler の二つに大別する。Pause Filler は有声休止であり、音声現象に近い、「啊」「嗯」「喔」(「A」「EN」「O」) といった言葉を指す。音声に対応した漢字のある型と対応した漢字のない型の二つに分類できる。このようなことばは元来一定の意味を持たず、フィラーとして適用される範囲は広く、主に話し手の躊躇、不確定という心理状態を表すことが多い。Verbal Filler とは元々意味を持っているが、フィラーとして発話に使われるとき、元来の意味よりも発話を構成する機能を果たす語句である。元来意味を持っているため、フィラーとして使用する際に、使い分けが Pause Filler より限定され、より正確に相手に捉えられるのである。また、元来の語意によって大きく指示詞型、肯定・否定詞型、解釈型、自問自答型の四つに分類できる。そして、上記の二種類のフィラーを表5の通りにまとめているので、それを引用する。

表5 種類による中国語フィラーの分類

類別	分類	代表例
Pause Filler	1. 対応した漢字のある型	1. A(啊)、EN(嗯)、O(喔)、E(呃)
	2. 対応した漢字のない型	2. EI
Verbal Filler	1. 指示詞型	1. 那(あ)、這(こ)、那個(あれ)、這個(これ)
	2. 肯定・否定詞型	2. 對(そう)、不(いえ)、好(よい)
	3. 自問自答型	3. 什麼(なんか)、怎麼说呢(なんと言うの)、該怎麼講呀(なんと言うの)
	4. 解釈型	4. 就(これこそ、強調の意味)、就是(これこそ・・・だ、強調の意味)

注:「Verbal Filler」の代表例の中国語の日本語訳は筆者が付けたものである。

4.1.1 原稿説明時の場合

4.1.1.1 フィラーの種類

上記 4.1 のフィラーの分類に従い、原稿説明時の出現フィラーの種類を表 6 に挙げる。
原稿説明時の発話には発表者の発話の他に、司会者の発話もあるが、たとえ司会者の発話にフィラーがあっても、そのフィラーを取り扱わない。フィラーの使用者が特定できるように、発表者が使っているフィラーのみを対象とする。

表 6 フィラーの種類（原稿説明時）

型	フィラー	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	合計	出現率(%)
		J2 男	J4 男	J5 女	J6 女	J13 女	C2 女	C3 男	C3 男	C5 女	C5 女		
型母音	アー		1									1	0.18
	エー	217	7	15	2	8		1				250	45.7
コソア型	コノ		1									1	0.18
	コノー	1			5				9	1		16	2.93
	ソノ		1								1	2	0.37
	ソノー	2					1			3	4	10	1.83
	アノ				1					1		2	0.37
	アノー	1	3		1					23		28	5.12
エート型	エト			2	12		6				6	26	4.75
	エトー					1	1				4	6	1.1
	エート			37	4	1	6			2	56	106	19.38
	エートー										1	1	0.18
型マ	マー	27	56	11								94	17.18
ン型	ト	1										1	0.18
	ウント			1								1	0.18
	ウン			1							1	2	0.37
	合計	249	69	67	25	10	14	1	9	30	73	547	100
	フィラーの種類	6	6	6	6	4	4	1	1	5	7		

さらに、表 6 のフィラーのバリエーションを型別にまとめると、以下の表 7 になる。

表 7 型別のフィラーの種類（原稿説明時）

型	フィラー	① J2 男	② J4 男	③ J5 女	④ J6 女	⑤ J13 女	⑥ C2 女	⑦ C3 男	⑧ C3 男	⑨ C5 女	⑩ C5 女	合計	出現率 (%) フィラーの	率 (%) 型別の出現
母音型	ア系		1									1	0.18	45.88
	エ系	217	7	15	2	8		1				250	45.70	
コソア型	コノ系	1	1		5				9	1		17	3.11	10.78
	ソノ系	2	1				1			3	5	12	2.19	
	アノ系	1	3		2					24		30	5.48	
エート型				39	16	2	13			2	67	139	25.41	25.41
マー型		27	56	11								94	17.18	17.18
ンー型		1		2							1	4	0.73	0.73
合計		249	69	67	25	10	14	1	9	30	73	547	99.98	99.98

原稿説明時におけるフィラーは、全 16 種類、合計 547 例に上る。しかし、それらが同じ頻度で現われるのではなく、いくつかのフィラーが頻繁に現れる傾向にある。まず、表 7 の型別の出現率をみると、「母音型」（45.88%）が最も高く、全体の 5 割ぐらいを占めている。次に多いのは、「エート型」（25.41%）と「マー型」（17.18%）である。さらに、表 6 の結果と合わせて見ると、出現率が「エ系」250 例（45.70%）、「エート型」139 例（25.41%）、「マー型」94 例（17.18%）という順番になっていることが分かる。その三種のフィラーが全体の約 90%を占めている。また「エート型」においては、「エト」、「エトー」、「エート」、「エートー」との四つのバリエーションもあり、バラエティに富んでいるという特徴が見られた。一方、「ア系」と「ン系」は極めて少ないことである。また、「コソア型」においても、1 割強しかなかった。なお、発話者ごとに見ると、多種類のフィラーを多用する人もいれば、一種類のフィラーしか使わない人もいるため、個人差が顕著であった。特に、C3 が録音番号⑦と録音番号⑧の録音データ（表 3）両方においても、フィラーの使用が極めて少ないという結果になった。実際文字化資料を確認したところ、C3 は日本語のフィラーをあまり使用しない一方で、中国語のフィラーを多く使用していることが分かった（例 4 参照）。例 4 にある「en」は中国語のフィラーを表している（表 5 参照）。「en」の「e」^③の

③ 「e」は日本語の母音体系には存在せず、中国語の母音体系に存在する。「ɤ」の発音を指す音を指す。

実際の発音は、「日本語のエの口をして、オと発音した時の音」に近い発音である。

次に、一番多かった「エ系」について実際の用例を参考に考察していきたい。「エ系」は録音番号①から⑤までの談話データにおける日本語母語話者のどの発話にも出現するが、特に録音番号①の談話データにおける J2 の発話に集中している。実際 J2 の発話を確認したところ、「エー」で文を区切っているという傾向が見られた。(例 5 参照)そして、J5 も「エー」を多数使っているが、「難しい読み方の前 (例 6)」、「言い直し (例 7)」、「補足説明 (例 8)」といった状況に使われている。上田 (2004) では、「エー」は「話題・考え・表現模索のための時間稼ぎ」の機能を持っていると述べており、J5 の使っている「エー」の状況はいずれも「時間を稼ぐ」ためだと考えられ、上田 (2004) の結果と一致するものだと言えよう。一方、J2 による「エー」を用いて、文を区切る使い方は、山根 (2002) の留守番電話におけるフィラーの中の結果にあったように、「エー」は「境界を示す役割」の代表であるという結果と合致していると考えられる。

例 4: 録音番号⑦

C3: 今のおと、いまのおと、今のところ、en、中、en、日中敬語の分類だけ書き終わって、後ろの文法とか対訳、使用意識準備不足で、以下の内容は、en、ほとんど、en、に、日中敬語の分類について、はい。1、研究方法、[原稿 55 秒読む]

例 5: 録音番号①

J2: エー、私はエー、生まれも育ちも愛知県の尾張旭市というところです。エー、そのため、エー、ほかの都道府県の方言について、マー、触れる機会が少なく、あまり自己の方言というものを意識せずに生きてきました。エー、しかし、三重大学に入学して、多くの他県出身者と、エー、関わって行く中で、エー、自分の出身地である愛知県の方言を、マー、強く意識するようになってきました。

実際の発表原稿:

筆者は、生まれ育ちも愛知県尾張旭市である。そのため、他の都道府県の方言について触れる機会が少なく、自己の方言というものを意識することがなかった。しかし、三重大学に入学し、多くの他県出身者と関わっていく中で筆者の出身地である愛知県の方言というものを強く意識するようになった。

例 6:録音番号③

J2:エート、女鬼峠、エー、さん、さん、みせず、ウント、三瀬の渡しなどの難所が多く、宿泊する旅人は少なかったそうです。

実際の発表原稿：

女鬼峠、三瀬の渡しなどの難所が多く、宿泊する旅人は少なかったそうです。

例 7：録音番号③

J2：行政区分では大台町は三重、エー、三重県北中部とされていますが、天気予報、警報、注意報の発表区分は南部になっています。

実際の発表原稿

行政区分では大台町は三重県北中部とされていますが、天気予報、警報、注意報の発表区分は南部になっています

例 8:録音番号③

エート、話者ですね、エー、話が抜けました、すみません。[原稿 30 秒読む]

4.1.1.2 日本語母語話者と中国人日本語学習者におけるフィラーの使用差（原稿説明時）

前述の 4.1.1.1 でもフィラーの使用には個人差が顕著に見られた。その中、日本語母語話者と中国人日本語学習者が、使用するフィラーの種類と数の両者においても、差があることは表 6 と表 7 から確認された。具体的にどのような差があるかを見るために、それぞれ 5 回ずつの文字化資料^④において使われているフィラーを表 8(次のページに掲載)にまとめた。

表 8 の分析対象である文字化資料の原稿説明時の時間に関して、日本語母語話者は合計約 99 分であり、中国人日本語学習者は合計約 126 分である。表 8 を見ると、合計のフィラー数においては、日本語母語話者は中国人日本語学習者の 3.3 倍もあった。1 分間で使われているフィラー数を計算してみたところ、日本語母語話者は約 4.24 個であるが、中国人日本語学習者は 1.01 個である。要するに、日本語母語話者は中国人日本語学習者よりフィラーの使用頻度が高いと言えよう。

^④表 3 の談話資料は、発表者が日本語母語話者と中国人日本語学習者のものが、それぞれ 5 回ずつである。

表 8 日本語母語話者と中国人日本語学習者におけるフィラーの使用実態（原稿説明時）

型	フィラー	日本語母語話者		中国人日本語学習者	
		数	出現率(%)	数	出現率(%)
母音型	ア系	1	0.24		
	エ系	249	59.29	1	0.78
コソア型	コノ系	7	1.67	10	7.87
	ソノ系	3	0.71	9	7.09
	アノ系	6	1.43	24	18.90
エート型		57	13.57	82	64.57
マー型		94	22.38		
ンー型		3	0.71	1	0.78
合計		420	100	127	99.99

また、使われているフィラーの種類に関しても、中国人日本語学習者の場合は「ア型」と「マ型」の数が両方ともゼロであることから、日本語母語話者は中国人日本語学習者より使用するフィラーの種類が多いという結果になった。そして、出現率を比較したところ、日本語母語話者の場合は、「エ系」(59.29%)、「マー型」(22.38%)、「エート型」(13.57%)の三種類が多かった。その三種のフィラーが全体の9割以上を占めている。一方、中国人日本語学習者の場合は、「エート型」(64.57%)の使用が断然多く、全体の6割強を占めている。しかも、日本語母語話者の4倍以上もあるということになっている。続いては「アノ系」(18.90%)、「コノ系」(7.87%)、「ソノ系」(7.09%)のコソア型が多かった。その内、「アノ系」は日本語母語話者の約13倍、「ソノ系」は日本語母語話者の約10倍、「コノ系」は日本語母語話者の約5倍という結果になっている。「コソア型」において、日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に大きな差が確認できたと言えよう。また、「コソア」の指示詞に関しては、日中両言語では異なっている。日本語の指示詞は「あの」、「その」、「この」の3系統があるが、中国語の指示詞は「那个」(「あの」、「その」に対応する)と「这个」(「この」に対応する)の2系統しかない。中国語では「あの」と「その」の区別がないが、中国人日本語学習者がフィラーの「アノ系」と「ソノ系」の使用において、「ソノ系」より「アノ系」のほうを多用しているという結果となっている。なぜそのような結果になったのか、現段階ではまだ明確になっていない。なお、中国人日本語学習者の多用している上位3位までのフィラーに関して、中国語のフィラーにはそれらに対応するものがあるかどうかを

確認したところ、三つともそれらに対応するフィラーが中国語にもあるものであるということが分かった（表 5 参照：「エート型」は「呃」、「アノ系」は「那个」、「コノ系」は「这个」に対応する）。そこで、日本語母語話者と中国人日本語学習者とが多用するフィラーが異なっているのは、中国人日本語学習者に母語による干渉があったためとも考えられるだろう。

以上の結果からは、日本語母語話者は中国人日本語学習者より、フィラーの使用頻度が高い上、使用するフィラーの種類も多いということが伺える。また、同じ状況においても、二者が多用しているフィラーに差があったということが分かった。さらに、中国人日本語学習者は日本語母語話者より「エート型」を多用していることも確認できた。2.3.4 の高木・森田（2015）では、「エート」は「自分に当てられていた質問に応答する難しさを伴うが、それでも応答の産出に最大限に務める」という主張を示すことができると述べられているということから、表 8 の結果は原稿説明時の結果であり、質問に答える場合ではないが、「エート」は「難しい」と感じた時に使われるのではないかという推測ができるのではないかと思った。中国人日本語学習者は日本語母語話者より日本語の文章を読む時に「難しい」と感じる人が多いと考えられ、「エート」が中国人日本語学習者に多用されている結果になっているのかもしれない。また、中国語のフィラーにも、「エート」に対応する「呃」が存在するため、中国人日本語学習者による「エート」の多用には、母語の干渉もあったということも考えられるだろう。

4.1.1.3 フィラーの性差（原稿説明時）

次に、男女別にフィラーの使用に差があるか分析する。日本語母語話者と中国人日本語学習者において、それぞれ使用しているフィラーを男女別に分け、その結果を以下の表 9 にまとめた。

表 9 を見ると、日本語母語話者において、男性に使われているフィラーは「エ系」(70.44%)、「マー型」(26.10%) が最も多く、その二つのフィラーが全体の約 96.54% を占めている。一方、女性の場合は「エート型」(55.88%) が一番多く、続いて「エ系」(24.51%) と「マー型」(10.78%) が上位 2 位と 3 位になっている。その三つのフィラーが全体の約 91.17% を占めている。結果から、日本語母語話者の場合は、男性は「エ系」と「マー型」を、女性が「エート型」と「コノ系」を多用しているということが分かった。

表9 フィラーの性差（原稿説明時）

型	フィラー	日本語母語話者				中国人日本語学習者			
		男性（J2、J4）		女性（J5、J6、J13）		男性（C3）		女性（C2、C5）	
		数	出現率（%）	数	出現率（%）	数	出現率（%）	数	出現率（%）
母音型	ア系	1	0.31						
	エ系	224	70.44	25	24.51	2	16.67		
コソア型	コノ系	2	0.63	5	4.90	9	75.00	1	0.85
	ソノ系	3	0.94					9	7.69
	アノ系	4	1.26	2	1.96			24	20.51
エート型				57	55.88	1	8.33	82	70.09
マー型		83	26.10	11	10.78				
ンー型		1	0.31	2	1.96			1	0.85
合計		318	99.99	102	99.99	12	100	117	99.14

次に、中国人日本語学習者の結果を見ると、女性は「エート型」（70.09%）を、男性は「コノ系」（75.00%）を最も多く使用しているということが確認できた。また、出現率の上位2位と3位に関して、女性の場合はそれぞれ「アノ系」（20.51%）、「ソノ系」（7.69%）となっており、男性の場合は「エ系」（16.67%）と「エート」（8.33%）となっている。中国人日本語学習者の場合は、男性は「コノ系」と「エ系」を、女性は「エート型」と「アノ系」、「ソノ系」を多く使用していることが分かった。その結果を日本語母語話者の場合と照らし合わせて見ると、両者が共通しているのは、男性は「エ系」を、女性は「エート型」を多用しているということが分かった。今回の調査では、調査の協力者の男女の人数が少ないため、フィラーの使用には個人差によるところもあると考えられ、男性は「エ系」を、女性は「エート型」を多用しているという結果が確認できたが、男女のフィラーの使用には必ずしもそのような傾向があるとは現段階ではまだ明確に言いきれない。しかし、上田（2004）でも、男女差の結果として「男性が『ア』系と『エ』系に対して、女性は『アノ』系を多用する」ということが挙げられていて、男性による「エ系」の多用、ならびに女性による「アノ系」の多用は本研究と一致している。

4.1.2 質疑応答時の場合

4.1.2.1 フィラーの種類

質疑応答においても、原稿説明時と同様に 4.1 の分類基準に従い、フィラーの種類をまとめた。質疑応答時では、発表者の発話に現れるフィラーのみ扱うのではなく、ゼミナールに参加しているすべての人の発話に出現するフィラーを対象とする。以下の表 10 と表 11 がその結果である。

表 10 フィラーの種類（質疑応答時）

型	録音番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	合計	出現率 (%)
母音型	ア	1	2	1	1	1		1	4	2	3	16	0.77
	アッ	6	2	11	1	18	7	3	3	11	6	68	3.26
	アー	7	9	14	3	15	24	9	17	6	18	122	5.84
	アーー										1	1	0.05
	エッ			2				1	1	2		6	0.29
	エー	42	23	1	20	2	7	6	5	11	6	123	5.89
	オー					5			2			7	0.34
コソア型	コノ				4							4	0.19
	コノー	2	11	1	20	2	1	3	55	17	10	122	5.84
	ソノ				3			1				4	0.19
	ソノー	29	40	5	15	7	4	9	16	35	13	173	8.28
	ソノーー				1							1	0.05
	アノ		3	1	5	2	2			2		15	0.72
	アノー	95	53	24	74	28	29	38	43	83	36	503	24.07
	アノーー										2	2	0.1
	アノネ								1			1	0.05
	アノーデスネ						1					1	0.05
型ソコ	コー	2			4			1	2	6	2	17	0.81
	ソー				2							2	0.1
エート型	エト	1	4	3	1	10	3		1			23	1.1
	エット				6	8		1				15	0.72
	エトー	1	1	1	1	15		2	4	4	2	31	1.48
	エート	16	13	4	6	13	13	7	7	13	41	133	6.37
	エートネ	1										1	0.05
型マ	マー	66	110	21	66	22	23	16	20	39	56	439	21.01
ン型	ト		1						1			2	0.1
	トー				1		1				4	6	0.29
	ウント		1		3							4	0.19
	ウーント		1	1								2	0.1
	ウーン			3	10	7	6	2	1	2	2	33	1.58
型ハイ	ウン	8	13	6	34	10	6	2	4	13	26	122	5.84
	ハイ				1							1	0.05
型ナンカ	ナンカ	1	4	4		17	6	4	15	13	13	77	3.69
型ネ	ネ						1				9	10	0.48
	ネー						2					2	0.1
	合計	278	291	103	282	182	136	106	202	259	250	2089	100.04

表 11 型別のフィラーの種類（質疑応答時）

型	録音番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	合計	の出現率 ファイラー	型別の出 現率（%）
母音型	ア系	14	13	26	5	34	31	13	24	19	28	207	9.91	16.43
	エ系	42	23	3	20	2	7	7	6	13	6	129	6.18	
	オ系					5			2			7	0.34	
コソア型	コノ系	2	11	1	24	2	1	3	55	17	10	126	6.03	39.54
	ソノ系	29	40	5	19	7	4	10	16	35	13	178	8.52	
	アノ系	95	56	25	79	30	32	38	44	85	38	522	24.99	
コースー型	コー系	2			4			1	2	6	2	17	0.81	0.91
	ソー系				2							2	0.10	
エート型		19	18	8	14	46	16	10	12	17	43	203	9.72	9.72
マー型		66	110	21	66	22	23	16	20	39	56	439	21.01	21.01
ンー型			3	4	14	7	7	2	2	2	6	47	2.25	2.25
ハイ型		8	13	6	35	10	6	2	4	13	26	123	5.89	5.89
ナンカ型		1	4	4		17	6	4	15	13	13	77	3.69	3.69
ネー型							3				9	12	0.57	0.57
合計		278	291	103	282	182	136	106	202	259	250	2089	100.01	100.01

表 10 を見ると、「質疑応答時におけるフィラーは、全 35 種類、全出現数は 2089 例もあった。また、すべての録音資料に現れるフィラーとして、「アッ」、「アー」、「エー」、「コー」、「ソノー」、「アノー」、「エート」、「マー」、「ウン」とが挙げられる。「アノネ」「エートネ」などの間投助詞が付加されているものもあるが、数は極めて少ない。そして、表 11 の型別の出現率を見たところ、最も高いのは「コソア型」（39.54%）である。続いて「マー型」（21.01%）と「母音型」（16.43%）が次に多い。その三つの型は全体の約 77% を占めている。以下、「エート型」（9.72%）、「ハイ型」（5.89%）、「ナンカ型」（3.69%）、「ンー型」

(2.15%)と続いている。また、「コーソー型」が0.91%、「ネー型」が0.57%であり、非常に少ないという結果になっている。

次に表10と表11とを照らし合わせてみると、「コソア型」においては、「アノ系」が一番多く、「コノ系」が最も少ないという結果が得られた。そして「アノ系」には、「アノ」、「アノー」、「アノー」、「アノネ」、「アノードスネ」とのバリエーションがあり、発音においてもバラエティに富んでいる傾向が確認できた。なお、その中では、三モーラの「アノー」が飛び切り多く、全体の96%強もある。また「アノー」はどの録音資料においても出現頻度が高いという傾向も見られた。

そして、比較的多かった「母音型」においては、「ア系」が断然に多く、「母音型」の6割以上も占めている。一方、母音の「イ系」と「ウ系」のフィラーが一例も見られなかった。さらに、「ア系」においては、長音のつく「アー」が最も出現頻度が高かった。「エート型」は、フィラーの種類は5種類もあるが、割合的には全体の約1割しかないという結果になっている。

4.1.2.2 発話者ごとに使用されるフィラーの種類（質疑応答時）

質疑応答時では、原稿説明時の時と異なり、発表者のみの発話を扱うのではなく、すべての発言者の発話を分析対象とする。それゆえ、一録音においては、複数の発言者が存在する。フィラーの使用には個人差があるため、それぞれの発話者のフィラーの使用状況を確認できるよう、10個の録音データにおいて発話者ごとに使用しているフィラーを以下の表12-①と表12-②にまとめた。さらに、表12-①と表12-②のフィラーを型別にまとめて、表13-①と表13-②に示す。

表12-①と12-②を見ると、「一発話のフィラー数の結果から、発話者によりフィラーの使用頻度にばらつきがあるということが窺える。さらに、各発話者の使っているフィラーを比較しながら詳しく見ると、フィラーの種類もまちまちであるということが分かる。その中、J1は発話数においても、フィラーの使用数においても最も多いということが分かる。特に「コソア型」の「アノ系」と「マー型」の多用が目立つ。「アノ系」は全部で522例であるが、J1は366例もあり、全体の7割以上を占めている。そして、「マー型」においては、総数の439個のうち336個がJ1に使用されているものであり、全体の約77%にも上る。小出（2007）によると、「まあ」は「単なる情報検索的な無色な停滞とは異なり、独特の色合いを持った停滞として機能する」ということで、J1はゼミの参加者の中で最も年齢が高く、ゼミの指導者であるという立場から、「マー」は独特の意味合いにより使用差が出たのではないかと思った。その点については、後文のフィラーの機能のところでも詳しく考察したい。

表 12-① 各発話者に使用されるフィラーの種類（質疑応答時）

型	発話者	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8	J9	J10	J11	J12
母音型	ア	7			1	1							1
	アッ	27	1	3	1	6		1				6	
	アー	51	4	2	3	7	2				3	3	6
	アー												1
	エッ	5											
	エー	70	15	4	13		6	1					4
	オー	1				1							
コソア型	コノ	2		2									
	コノー	44	1	6	1	2	2				10	1	1
	ソノ	3											1
	ソノー	70	20	23	7	4	1	2	2	3	1	1	4
	ソノー						1						
	アノ	8		1			1						
	アノー	355	1	17	13	18			1	6	3	1	4
	アノー	2											
	アノネ	1											
	アノデスネ												
ソー型	コー	16					1						
	ソー						2						
エート型	エト	3				3		4	2				2
	エット			3		2	2			1			
	エト	3		2		5							1
	エート	30	1	14	3	5	4				2	3	6
	エートネ	1											
型	マー	336	4	21	53	7	1	1	1			2	2
ン型	ト				1							1	
	ト	1	1	1				1			1		
	ウント				1	1	2						
	ウン			2									
	ウン	12		1		3	2						3
ハイ型	ウン	114			4		2						
	ハイ	1											
ナ型	ナンカ	16		3	1	1		2	2	1		3	2
ネ	ネ	10											
	ネ	2											
合計①		1191	48	105	102	66	29	12	8	11	20	21	38
総発話数		705	57	85	137	144	67	50	16	20	25	41	100
一発話のフィラー数		1.69	0.84	1.24	0.74	0.46	0.43	0.24	0.5	0.55	0.8	0.51	0.38

表 12-② (12-①の続き) 各発話者に使用される型別フィラーの種類 (質疑応答時)

型	発話者	J13	J14	J15	J16	J17	J18	C1	C2	C3	C4	C5	合計 ②
母音型	ア								1	3		2	16
	アッ	7	1		1	1			5			8	68
	アー	5	2	1	2	1	3		7	4		16	122
	アーー												1
	エッ									1			6
	エー	1			1				3			5	123
	オー	3								1		1	7
コソア型	コノ												4
	コノー								4	44		6	122
	ソノ												4
	ソノー	1				2	1		2	5		24	173
	ソノーー												1
	アノ	2					2					1	15
	アノー		2	1	2				23	2	3	51	503
	アノーー												2
	アノネ												1
	アノーデスネ								1				1
ソコ型	コー												17
	ソー												2
エート型	エト	3	2		2							2	23
	エット	4					3						15
	エトー	8	3		2				3			4	31
	エート	10	2						4			49	133
	エートネ												1
マー型	マー					1			2	1		7	439
ン型	ト												2
	トー											1	6
	ウント												4
	ウーント												2
	ウーシ	5			1				3	1		2	33
ハイ型	ウン				1	1							122
	ハイ												1
ナンカ型	ナンカ	5			5	3			2	5		26	77
ネ型	ネ												10
	ネー												2
合計①		54	12	2	17	9	9	0	60	67	3	205	2089
総発話数		112	45	12	34	9	25	1	232	173	8	210	2308
一発話のフィラー数		0.48	0.27	0.17	0.5	1	0.36	0	0.26	0.39	0.38	0.97	0.91

注：1、合計①は「発話者ごとのフィラーの数の和」である。

2、合計②は「フィラーの種類ごとの数の和」である。合計②は表 11-①と表 11-②のフィラーの種類ごとの合計である。

3、「一発話のフィラー数」とは、一発話における平均フィラー数のことである。

「総フィラー数」÷「総発話数」＝「一発話のフィラー数」

4、総発話数の内訳は本文の末にある添付資料2「総発話数の内訳」の通りである。総発話数の内訳とは、各録音資料における発話者の発話数の詳細である。

表 13-① 各発話者に使用されるフィラーの型別の分類

型	発話者	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8	J9	J10	J11	J12
母音型	ア系	85	5	5	5	14	2	1			3	9	8
	エ系	75	15	4	13		6	1					4
	オ系	1				1							
コソア型	コノ系	46	1	8	1	2	2				10	1	1
	ソノ系	73	20	23	7	4	2	2	2	3	1	1	5
	アノ系	366	1	18	13	18	1		1	6	3	1	4
コーソー型	コー系	16					1						
	ソー系						2						
エート型		37	1	19	3	15	6	4	2	1	2	3	9
マー型		336	4	21	53	7	1	1	1			2	2
ンー型		13	1	4	2	4	4	1			1	1	3
ハイ型		115			4		2						
ナンカ型		16		3	1	1		2	2	1		3	2
ネー型		12											
合計		1191	48	105	102	66	29	12	8	11	20	21	38

表 13-② (表 13-①の続き) 各発話者に使用されるフィラーの型別の分類

型	発話	J13	J14	J15	J16	J17	J18	C1	C2	C3	C4	C5	合 計 ②	型別の出現 率(%)
母 音 型	ア系	12	3	1	3	2	3		13	7		26	207	9.91
	エ系	1			1				3	1		5	129	6.18
	オ系	3								1		1	7	0.34
コ ソ ア 型	コノ 系								4	44		6	126	6.03
	ソノ 系	1				2	1		2	5		24	178	8.52
	アノ 系	2	2	1	2	0	2		24	2	3	52	522	24.99
コ ー ソ ー 型	コー 系												17	0.81
	ソー 系												2	0.10
エート型		25	7		4		3		7			55	203	9.72
マー型						1			2	1		7	439	21.01
ンー型		5			1				3	1		3	47	2.25
ハイ型					1	1							123	5.89
ナンカ型		5			5	3			2	5		26	77	3.69
ネー型													12	0.57
合計①		54	12	2	17	9	9	0	60	67	3	205	2089	100

注：1、合計①は「発話者ごとのフィラーの数の和」である。

2、合計②は「フィラーの種類ごとの数の和」である。合計②は表 13-①と表 13-②のフィラーの種類ごとの合計である。

4.1.2.3 日本語母語話者と中国人日本語学習者におけるフィラーの使用差（質疑応答時）

原稿説明時と同じように、日本語母語話者と中国人日本語学習者とが質疑応答時において、それぞれ使われているフィラーを以下の表 14 にまとめた。

表 14 日本語母語話者と中国人日本語学習者におけるフィラーの使用実態（質疑応答時）

型	フィラー	日本語母語話者		中国人日本語学習者	
		数	出現率(%)	数	出現率(%)
母音型	ア系	161	9.18	46	13.73
	エ系	120	6.84	9	2.69
	オ系	5	0.29	2	0.60
コンア型	コノ系	72	4.10	54	16.12
	ソノ系	147	8.38	31	9.25
	アノ系	441	25.14	81	24.18
コーソー型	コー系	17	0.97		
	ソー系	2	0.11		
エート型		141	8.04	62	18.51
マー型		429	24.45	10	2.99
ンー型		40	2.28	7	2.09
ハイ型		123	7.01		
ナンカ型		44	2.51	33	9.85
ネー型		12	0.68		
合計		1754	99.98	335	100
総発話数		1684		624	
一発話のフィラー数		1.04		0.54	

表 14 の中の「一発話のフィラー数」を見ると、日本語母語話者は中国人日本語学習者の約 2 倍使用されていることから、日本語母語話者の方が中国人日本語学習者よりフィラーの使用頻度が高いと言えよう。さらに、それぞれ使っているフィラーの種類を比べてみると、中国人日本語学習者の場合は、「コー系」、「ソー系」、「ハイ型」、「ネー型」との四種類のフィラーにおいて数がゼロであるということから、中国人日本語学習者は日本語母語話者より使用するフィラーの種類が少ないということが分かった。以上の 2 点に関しては、原稿説明時と同じ結果が出ている。そして、日本語母語話者と中国人日本語学習者のそれぞれ使っているフィラーにおいて、上位 5 位を順番に列举すると、以下の表 15 の通りである。

表 15 日本語母語話者と中国人日本語学習者の使用するフィラーの上位 5 位

	1 位 (%)	2 位 (%)	3 位 (%)	4 位 (%)	5 位 (%)
日本語母語話者	アノ系 (25.14)	マー型 (24.45)	ア系 (9.18)	ソノ系 (8.38)	エート型 (8.04)
中国人日本語学習者	アノ系 (24.18)	エート型 (18.51)	コノ系 (16.12)	ア系 (13.73)	ナンカ系 (9.85)

表 15 のそれぞれの上位 5 位までを比較したところ、「アノ系」に関しては、日本語母語話者において中国人日本語学習者においても最も多く使われ、全体のおおよそ 4 分の一を占めている。それは、「アノー」は「発話内容の整理や適切な表現選択の際に用いられる」こと、および「相手の注意を引きつける機能を持つ」（松浦 1996）という「アノー」の機能と関わっているかもしれない。

さらに、日本語母語話者は「マー型」と「ソノ系」の方を、中国人日本語学習者は「エート型」、「コノ系」及び「ナンカ型」の方を多用しているという違いも確認された。「アノ系」と「コノ系」は中国語にもそれに対応するフィラーがあると前述の 4.1.1.2 も述べたが、「ナンカ型」も中国語に対応するフィラーがある（表 5 参照：「ナンカ」は「什麼（シェンマ）」に相当する）。そこで、原稿説明時でも質疑応答時でも、中国人日本語学習者に多用されているフィラーは中国語にもそれらに対応するフィラーが存在するということが分かった。なお、「ソノ系」に関しては、質疑応答時の場合は、日本語母語話者は第 4 位を占めているが、中国人日本語学習者は上位 5 位に入っておらず、日本語母語話者は中国人日本語学習者より多用しているということが確認できた。しかし、原稿説明時の場合はそれと矛盾する結果となっている。つまり、中国人日本語学習者は日本語母語話者より多く使用しているという結果が得られた（表 8 参照）。前述の 4.1.1.2 でも述べたが、中国語には「ソノ系」に対応するフィラーがない。質疑応答の結果に関しては、中国語には「ソノ系」がないため、中国人日本語学習者はあまり「ソノ系」を使用しないとも考えられる。しかし、前述の 4.1.1.2 では、中国語では「アノ」と「ソノ」が同じ語になるため、「アノ」と「ソノ」が混用されるが故に、「ソノ」が中国人日本語学習者に多用されていると述べたが、その二つとも考えられないことはないと思った。いずれにせよ、中国人日本語学習者の使用するフィラーには母語による干渉があるということが言えよう。

なお、フィラーの使用における偏りがあるかどうかを見るために、日本語母語話者と中国人日本語学習者のそれぞれの上位 1 位から上位 5 位までのフィラーの出現率を合わせると、日本語母語話者の場合は 75% 強、中国人日本語学習者の場合は 80% 強もあるという

ことで、両者とも上位 5 位のフィラーが全体の 4 分の 3 以上を占めているという結果が得られた。

4.1.2.4 フィラーの性差（質疑応答時）

次に、質疑応答時における男女別の使用差があるかを考察する。日本語母語話者と中国人日本語学習者と、それぞれ男女に使用されているフィラーを別々にまとめて、以下の表 16 の通りの結果が得られた。

表 16 フィラーの性差（質疑応答時）

型	フィラー	日本語母語話者				中国人日本語学習者			
		男性		女性		男性		女性	
		数	出現率 (%)	数	出現率 (%)	数	出現率 (%)	数	出現率 (%)
母音型	ア系	106	7.23	55	19.16	7	10.45	39	14.55
	エ系	107	7.29	13	4.53	1	1.49	8	2.99
	オ系	1	0.07	4	1.39	1	1.49	1	0.37
コソア型	コノ系	56	3.82	16	5.57	44	65.67	10	3.73
	ソノ系	124	8.45	23	8.01	5	7.46	26	9.70
	アノ系	402	27.40	39	13.59	2	2.99	79	29.48
コーソー型	コー系	16	1.09	1	0.35				
	ソー系			2	0.70				
エート型		70	4.77	71	24.74			62	23.13
マー型		414	28.22	15	5.23	1	1.49	9	3.36
ンー型		20	1.36	20	6.97	1	1.49	6	2.24
ハイ型		119	8.11	4	1.39				
ナンカ型		20	1.36	24	8.36	5	7.46	28	10.45
ネー型		12	0.82						
合計		1467	100	287	100	67	100	268	100
総発話数		1054		630		173		450	
一発話のフィラー数		1.39		0.46		0.39		0.60	

表 16 の「一発話のフィラー数」を見ると、日本語母語話者の場合は男性の方が女性の約 3 倍であるのに対して、中国人日本語学習者の場合は女性の方がやや高いという結果になっている。それゆえ、男女の使用頻度に関しては男性か女性かどちらが高いというような傾向が見られなかった。さらに、日本語母語話者と中国人日本語学習者の男女それぞれ使用しているフィラーを上位 5 位を列挙すると、以下の表 17 の通りである。

表 17 フィラーの性差の結果の上位 5 位（質疑応答時）

	日本語母語話者				中国人日本語学習者			
	男性		女性		男性		女性	
	フィラー	出現率 (%)	フィラー	出現率 (%)	フィラー	出現率 (%)	フィラー	出現率 (%)
1 位	マー型	28.22	エート型	24.74	コノ系	65.67	アノ系	29.48
2 位	アノ系	27.40	ア系	19.16	ア系	10.45	エート型	23.13
3 位	ソノ系	8.45	アノ系	13.59	ソノ系、ナンカ型	7.46	ア系	14.55
4 位	ハイ型	8.11	ナンカ型	8.36	アノ系	2.99	ナンカ型	10.45
5 位	エ系	7.29	ソノ系	8.01	エ系、オ系、マー型、ンー型	1.49	ソノ系	9.70

まず、表 17 の日本語母語話者の男女の上位 5 位を照らし合わせると、男性のみの上位 5 位に入っているフィラーは「マー型」、「ハイ型」、「エ系」であり、女性のみの上位 5 位に入っているフィラーは「エート型」、「ア系」、「ナンカ型」であるという結果が得られた。日本語母語話者の質疑応答時において、男女が使用しているフィラーはかなり異なっていると考えられる。女性に最も多く使われている「エート型」は男性の上位 5 位に入っていないことは一つの目立った特徴と言えよう。なお、表 9 の原稿説明時における男女差による分類の結果においても、「エート」は日本人母語話者の女性の最も多く使っているフィラーであるが、日本人母語話者の男性における使用例は一つもなかった。要するに、原稿説明時においても、質疑応答時においても、女性は男性より「エート」を多用していること

が分かる。その点については、後文の 6.1 において深く考察する。

そして、中国人日本語学習者においては、男性の場合のフィラーの使用例が少ないためか、第 5 位のフィラーは使用例 1 例しかないものであり、すべてのフィラーが上位 5 位に入っている。なお、中国人日本語学習者の女性の使用しているフィラーと比較したところ、「コノ系」のみが男性の出現率が高いということが分かった。中国人日本語学習者の男性は原稿説明時においても、「コノ系」は最も多く使われているという結果が得られているが、中国人日本語学習者の男性の被調査者が C3 一人のみであるため、C3 が「コノ系」をよく使うが故にそのような結果になったとも考えられるので、一概に中国人日本語学習者の場合は、男性が女性より「コノ系」を使うとは言えないだろう。

4.2 「原稿説明時」と「質疑応答時」の比較

まず、「原稿説明時」と「質疑応答時」と、それぞれの「フィラー種類」、「日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較」、「性差」の結果を比較するために、それぞれの結果を以下の表 18、表 19、表 20 にまとめた。

表 18 「原稿説明時」と「質疑応答時」とのフィラーの種類における比較

	原稿説明時	質疑応答時
フィラーの種類	上位 5 位（出現率%） ①「エー」（45.70）、 ②「エート」（19.38）、 ③「マー」（17.18）、 ④「アノー」（5.12）、 ⑤「エト」（4.75）	上位 5 位（出現率%） ①「アノー」（24.07）、 ②「マー」（21.01）、 ③「ソノー」（8.28）、 ④「エート」（6.37）、 ⑤「エー」（5.89）
	型別上位 5 位（出現率%） ①「母音型」（45.88）、 ②「エート型」（25.41）、 ③「マー型」（17.18）、 ④「コソア型」（10.78）、 ⑤「ンー型」（0.73）	型別上位 5 位（出現率%） ①「コソア型」（39.54）、 ②「マー型」（21.01）、 ③「母音型」（16.43）、 ④「エート型」（9.72）、 ⑤「ハイ型」（5.89）

表 18 から見ると、「原稿説明時」は「質疑応答時」より、「エー」と「エート」が多用されており、「質疑応答時」は「原稿説明時」より、「アノー」、「マー」と「ソノー」が多用

されているという結果が得られた。さらに、型別の結果を確認すると、「原稿説明時」は「質疑応答時」より、「母音型」と「エート型」が多く使用されており、「質疑応答時」は「原稿説明時」より、「コソア型」、「マー型」と「ハイ型」が多用されていることが分かった。

次の表 19 は、日本語母語話者と中国人日本語学習者との、「原稿説明時」と「質疑応答時」に使用されるフィラーの上位 5 位をまとめたものである。

表 19 日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較

	原稿説明時	質疑応答時
日本語母語話者	上位 5 位 (出現率%) ①「エ系」(59.29)、 ②「マー型」(22.38)、 ③「エート型」(13.57)、 ④「コノ系」(1.67)、 ⑤「アノ系」(1.43)	上位 5 位 (出現率%) ①「マー型」(28.22)、 ②「アノ系」(27.4)、 ③「ソノ系」(8.45)、 ④「ハイ型」(8.11)、 ⑤「エ系」(7.29)
中国人日本語学習者	上位 5 位 (出現率%) ①「エート型」(64.57)、 ②「アノ系」(18.90)、 ③「コノ系」(7.87)、 ④「ソノ系」(7.09)、 ⑤「エ系」(0.78) と「ンー型」(0.78)	上位 5 位 (出現率%) ①「アノ系」(24.18)、 ②「エート型」(18.51)、 ③「コノ系」(16.12)、 ④「ア系」(13.73)、 ⑤「ナンカ型」(9.85)

表 19 の日本語母語話者の結果を見ると、「原稿説明時」においては、「エ系」と「エート型」の使用が多いのに対して、「質疑応答時」においては、「アノ系」、「ソノ系」、「ハイ型」が多く用いられるという結果が得られた。そして、中国人日本語学習者の場合は、「原稿説明時」と「質疑応答時」の上位 3 位が両方とも「エート型」、「アノ系」と「コノ系」であるため、種類における大差が見られなかったが、出現率における差が確認できた。「エート型」は原稿説明時での出現率 (64.57%) は質疑応答時 (18.51%) の約 3.5 倍もある。一方、「アノ系」と「コノ系」は質疑応答での出現率は原稿説明時より高い。よって、日本語母語話者と中国人日本語話者が共通している結果として、「原稿説明時」は「エート型」を、「質疑応答時」は「アノ系」を多用しているということが挙げられる。

次に、原稿説明時と質疑応答時との二つの場面における日本語母語話者と中国人日本語学習者のそれぞれの男女に多用されているフィラーの上位 5 位を表 20 にまとめた。

表 20 日本語母語話者の男女におけるフィラーの使用の比較

		原稿説明時	質疑応答時
日本語母語話者	男性	上位 5 位（出現率%） ①「エ系」（70.44）、 ②「マー型」（26.10）、 ③「アノ系」（1.26）、 ④「ソノ系」（0.94）、 ⑤「コノ系」（0.63）	上位 5 位（出現率%） ①「アノ系」（25.14）、 ②「マー型」（24.45）、 ③「ア系」（9.18）、 ④「ソノ系」（8.38）、 ⑤「エート型」（8.04）
	女性	上位 5 位（出現率%） ①「エート型」（55.88）、 ②「エ系」（24.51）、 ③「マー型」（10.78）、 ④「コノ系」（4.90）、 ⑤「アノ系」（1.96）と「ンー型」（1.96）	上位 5 位（出現率%） ①「エート型」（24.74）、 ②「ア系」（19.16）、 ③「アノ系」（13.59）、 ④「ナンカ型」（8.36）、 ⑤「ソノ系」（8.01）
中国人日本語学習者	男性	上位 5 位（出現率%） ①「コノ系」（75.00）、 ②「エ系」（16.67）、 ③「エート型」（8.33）、	上位 5 位（出現率%） ①「コノ系」（65.67）、 ②「ア系」（10.45）、 ③「ソノ系」と「ナンカ型」（7.46） ④「アノ系」（2.99）、 ⑤「エ系」、「オ系」、 「マー型」、「ンー型」（1.49）
	女性	上位 5 位（出現率%） ①「エート型」（70.09）、 ②「アノ系」（20.51）、 ③「ソノ系」（7.69）、 ④「コノ系」と「ンー型」（0.85）	上位 5 位（出現率%） ①「アノ系」（29.48）、 ②「エート型」（23.13）、 ③「ア系」（14.55）、 ④「ナンカ型」（10.45）、 ⑤「ソノ系」（9.70）

まず、日本語母語話者の男性の場合を見ると、「原稿説明時」では「エ系」が多く使われるのに対して、「質疑応答時」では「アノ系」が多用されていることが確認できた。そして、女性の場合では、「エート型」は「原稿説明時」においても「質疑応答時」において 1 位を占めているが、出現率においては「原稿説明時」は「質疑応答時」の約 2.3 倍もあるとい

う結果になっている。さらに、「ア系」と「アノ系」に関しても、「質疑応答時」の場合が「原稿説明時」より多く用いられたという傾向が見られた。よって、日本語母語話者において男女の結果に言える共通しているとしては、「質疑応答時」の場合は「アノ系」が多用されるということが挙げられる。

そして、中国人日本語学習者の場合は、男性の結果を見ると、出現率においては、「原稿説明時」は「質疑応答時」より、「コノ系」、「エ系」、「エート型」が高くなっている一方、「質疑応答時」は「ア系」、「ソノ系」、「ナンカ型」、「アノ系」が高くなっている。そして、女性の結果を見ると、「原稿説明時」では「エート型」を、「質疑応答時」では「アノ系」を多用しているという傾向が確認できた。よって、中国人日本語学習者が男女に共通して言えるのは、「原稿説明時」では「エート型」を、「質疑応答時」では「アノ系」を多用されているということである。さらに、前節の日本語母語話者の考察と照らし合わせると、日本語母語話者と中国人日本語学習者の結果において共通して言えるのは、「質疑応答時」の場合は「アノ系」が多用されるということが挙げられる。

そして、表 18、19、20 の結果を総合的に見るために、それぞれの結果を表 21 にまとめた。

表 21 「原稿説明時」と「質疑応答時」の比較結果のまとめ

	原稿説明時	質疑応答時
表 18	「エー」と「エート」が多い	「アノー」、「マー」と「ソノー」が多い
表 19	日本語母語話者と中国人日本語学習者とが「エート型」の多用に共通している。	日本語母語話者と中国人日本語学習者とが「アノ系」の多用に共通している。
表 20		日本語母語話者と中国人日本語学習者の男女に共通して「アノ系」が多い

表 21 の結果を見ると、表 18、表 19、表 20 の結果の共通点は、「原稿説明時」の場合は「エート型」が、「質疑応答時」の場合は「アノ系」が多いということである（表 21 では分かりやすいように、波線のアンダーラインを付けた）。本章では、量的な面からの考察に留まっているが、その背景にフィラーの機能と何か関わりがあるか、後文の 6.2 にて詳しく考察する。

4.3 本章のまとめ

本章では、主に量的な面からゼミナールの発言におけるフィラーの使用実態について調

査した。結果として以下のような3点が分かった。

①フィラーの使用には個人差がある（表 13-①、表 13-②）。そして、性差に関しては、原稿説明時の場合は、日本語母語話者と中国人日本語学習者が共通しているのは、男性は「エ系」を、女性は「エート型」を多用しているということが明らかになった。質疑応答時では、日本語母語話者の男性は「マー型」、「ハイ型」、「エ系」を、女性は「エート型」、「ア系」、「ナンカ型」を多く使用していることが確認できた。中国人日本語学習者の場合は、男性が一人しかいなかったため、明確な結果が得られなかった。

②ゼミナールの発言において、場面によるフィラーの使用差が見られた。日本語母語話者も中国人日本語学習者も、男女問わず、「原稿説明時」の場合は「エート型」を、「質疑応答時」の場合は「アノ系」を多用しているということである。（表 21）

③中国人日本語学習者は日本語母語話者より、「フィラーの使用頻度が低い」、「使用するフィラーの種類が少ない」という二つの特徴が見られた。さらに、日本語母語話者は「マー型」のフィラーを、中国人日本語学習者は「エート型」、「コノ系」と「ナンカ型」を多用しているという傾向も見られた。なお、中国人日本語学習者に多用されている「エート型」、「コノ系」と「ナンカ型」のフィラーは中国語にもそれらに対応するフィラーが存在するということが確認された^⑤。中国人日本語学習者のフィラー使用には母語干渉があるということが窺い知れる。

^⑤ 「エート型」は「呃」、「コノ系」は「这个」、「ナンカ型」は「什麼」に対応する。

第五章 ゼミナールの発話におけるフィラーの機能

本章では、まずゼミナールの参加者の役割の違いによるフィラーの使用実態を調査し、その結果をもとにフィラーの機能について考察する。次に、フィラーの出現位置の視点から、フィラーの機能について考察する。

5.1 役割によるフィラーの分類（質疑応答時）

ゼミナールには、司会者、発表者、司会者と発表者以外の参加者といった役割がある。話者の役割によって、使用するフィラーの機能に違いがあると思われ、役割によるフィラーの使用実態を調査した。本来中国人日本語学習者はまだ日本語を習得中であるために、フィラーの使用には不足しているところもあると考えられ。そのため、より正確的にフィラーの機能を考察するためには、日本語母語話者の発言のみ（つまり、日本語母語話者に使われているフィラーのみ）を分析対象にした方がいいと考えられるが、今回はあえて中国人日本語母語話者の発言も分析対象とした。というのは、中国人日本語学習者は日本語母語話者に比べ、言葉というハンディキャップがあるからこそ、中国人日本語学習者に使われているフィラーと日本語母語話者に使われているフィラーとを較することで、より明確に日本語母語話者のフィラーの特徴を掴むことができるのではないかと考えた。また、中国人日本語学習者に使われているフィラーに、特徴が見られるとしたら、中国人日本語学習者の言葉というハンディキャップがあるという観点から、フィラーの機能について考察も可能であると考えたことも理由の一つである。なお、役割から分類すると、「発表者」、「司会者」、「参加者」があるが、実際「司会者」の用例を概観すると、フィラーが出現する発話文の大部分が質疑応答を活性化するためのものではなく、司会者が質疑応答の会話の流れの中でなされた発言に確認されたため、「司会者」も「参加者」に入れることにした。しかし、「参加者」の中で、は「学生」と「教員」というような明らかに社会的立場が異なる要素が存在するため、「参加者」の発言を「教員」の発言と「学生」の発言に分けた。よって、役割によるフィラーの分類は以下のようになっている。

- ・日本語母語話者：発表者 1、参加者 1（ゼミの指導員、J1 の発言）、参加者 2（発表者以外の学生）
- ・中国人日本語学習者：発表者 2、参加者 3（発表者以外の学生）

以上の役割の分け方に従い、分類した全体の結果である添付資料 3 を本文の末に掲載している。添付資料 3 の、各フィラーの種類、および型別のフィラーの結果から、各役割のそれぞれの上位 5 位まで取り上げ、以下の表 22 と表 23 に示す。

表 22 役割によるフィラーの分類（上位 5 位）

	日本語母語話者			中国人日本語学習者	
	発表者 1	参加者 1	参加者 2	発表者 2	参加者 3
1 位	マー	アノー	ソノー	アノー	アノー
2 位	エー	マー	アノー	コノー	エート、ナンカ
3 位	アノー	ウン	アー	エート	コノー、ソノー
4 位	ソノー	エー、ソノー	エート	アー	エトー、アー
5 位	エート	アー	マー	ナンカ	エー

注：①発表者 1（日本語母語話者）、発表者 2（中国人日本語学習者）、参加者 1（教員：J1 のみを扱う）参加者 2（発表者以外の日本語を母語とする学生）、参加者 3（発表者以外の中国人日本語学習者）

②以下の「表 23、役割によるフィラーの使用実態（型別の上位 5 位）」の中の情報も表 22 と同じ意味をしている。

表 23 役割によるフィラーの分類（型別の上位 5 位）

	日本語母語話者			中国人日本語学習者	
	発表者 1	参加者 1	参加者 2	発表者 2	参加者 3
1 位	マー型	アノ系	エート型	アノ系	アノ系
2 位	エ系、エート型	マー型	ア系	コノ系	エート型
3 位	ソノ系	ハイ型	ソノ系	エート型	ナンカ型
4 位	ア系	ア系	アノ系	ア系	ソノ系
5 位	ン型	エ系	マー型	ナンカ型	コノ系

表 22 と表 23 の全体を見ると、日本語母語話者の場合においても、中国人日本語学習者の場合においても、「発表者」と「参加者」の間に上位 5 位に入っているフィラーは異なるということが分かった。それらの結果についてフィラーの機能とどのように関わっているか、「発表者」と「参加者」の実際の用例を参考にし、考察する。

5.1.1 日本語母語話者の結果の考察

まず、日本語母語話者の場合についてである。表 22 と表 23 の発表者 1（日本語母語話者の発表者）の結果を見ると、「マー型（マー）」、「エ系（エー）」がそれぞれ 1 位と 2 位を占

めている。そして、「エート」単独の場合は5位だったが、「エート型」が2位になっているのは、「エート」以外の形式のものも使われているということが窺える。

次に、発表者1に使われているフィラーにどのような特徴があるか、実際の用例を用いながら、それらの機能について考察する。なお、用例の中の対象とするフィラーはアンダーラインを引いて示す（以下断りがない限り、同じルールに従う）。

マー

例9、(⑤-257、女性J13)

J18: 最初は意見は言わないと言っていたんですけど、質問。[みんな笑い]お母さんだけは違うでしょう。お母さんが特殊と言っていましたよね、言い方が。

J13: そう、いや。

J18: 他の人があんまり言わない。

J13: マー、でも、鈴鹿のそのおばさん年代の人とか、お母さん年代の人はお母さんしか知り合いがないんですけど、もう一人うちの同期にもう一人お母さんぐらいの年齢の人もいるんですけど、その人も使うって言ってるので。

例9では、J18の「他の人があんまり言わない」という発言に対して、「少ないけどせめて同期のお母さんも使っている」という反論をスムーズに伝えるように、「マー」が使用されたものと考えられる。例9の「マー」は「それまでの話線から転換されることを予告し、後続内容の導入をスムーズにするもの」(川上1993)という機能として使われるものだと考えられるだろう。また、「マー」が「後続内容の導入をスムーズにする」機能を持っているからこそ、参加者への質問に答えるために、多くの説明をしなければならない「発表者」に多用されるのだろう。それゆえ、「発表者」に使用される「フィラー」において、「マー」が1位になっているのかもしれない。

マー、エー、ソノー

例10、(①-31、男性J2)

J2: そう、これは平均差、平均値の有意差です。

J3: エート、使っている数が、の有意差ですよ。

J2: はい、ソノー、エー、難しい、簡単に、例えば、7ページ見てもらいますかね。(はい)、で、ソノー、いろいろ標準誤差とかがあって、ただの平均値の数値の差だけではないんですよ、有意差が出る出ないっていうのは、エー、ちょっと複雑なんですけど、エー、基本は、マー、平均差、平均値による差ですね、すみません、何言ってるか分からないですよ。[笑い]

例10の「マー」の使い方としては、「日本語特有の『ぼかし』を行う」(川上、1993)ものであると考えられるだろう。J2さんは、「ちょっと複雑なんですけど、簡単に言うと、マ

一」というふうに表示し、「マー」の後ろに「自分が簡単に言うために、ひとまずそれを伝えればいい」というふうには、「いろいろな問題があるにしても、ここではひとまずおおまかに引きくくって述べる」(川上、1993) という心理が窺える。

次に、例 10 の「ソノー」についてである。「ソノー」は先行発話にある「有意差」について説明しようとする時に用い、「有意差」を意識しながら、言葉を考えている時に使われると考えられる。「①先行発話内容に関連した事象を指示する用法、②境界を示す用法」があると小出(2006)で述べられているが、例 10 の「ソノー」はその二つの機能を伴っていることが考えられるだろう。ゼミナールの質疑応答の時間において、発表者の発言は、質問に答えるためのものがほとんどであるため、発表者が「先行する質問の内容を意識しながら、言葉を考えて答えなければならない」がゆえに、「ソノー」が多く使用されているのではないかと考えた。

最後に、「エー」の機能についてであるが、例 10 では、有意差を説明する言葉を考えながら用いられるため、「時間稼ぎ」の機能を果たしていると考えられるだろう。

ここまですとまとめると、「マー」と「ソノー」が発表者に多く使われる最も大きな原因は、「マー」は「後続内容の導入をスムーズにする」機能を、「ソノー」は「①先行発話内容に関連した事象を指示する」機能を持っているからだと考えられるだろう。というのは、「発表者」は「質問に答えなければならない」という状況にあるため、常に「質問内容を頭に置きながら、うまく答えられるように言葉を整理しながら発言しなければならない」からである。また、「エー」などの「エ系」、「ウン」などの「ン型」も多用される(本文の末にある添付資料 3 を参照) ことから、「うまく答えられるように、考えるため(または言葉を整理するため)の時間を稼ぐ」機能を持つフィラーも多く使われることは分かる。要するに、「発表者」は「スムーズに発言できるように」フィラーを使っている傾向にあるということが窺える。

ここからは、「参加者 1 (ゼミの指導教員: J1)」の結果について考察する。表 22 と表 23 の参加者 1 (J1 の発言) の結果を見ると、表 22 の上位 3 位は「アノー」、「マー」、「ウン」であり、表 23 の型別の上位 3 位は「アノ系」、「マー型」、「ハイ型」(「ウン」は「ハイ型」に属する) であり、上位 3 位の順位が全く一緒であることが分かった。J1 のみの発言であるため、決まっている形のものが使われるということが考えられる。フィラーの使用は、個人の嗜好性と関わっていることが察せられる。また、「参加者 1」のフィラーを、「発表者 1」と「参加 2」とを比較したところ、「ウン」が「参加者 1」のみに多用されていることが分かった。実際前述の表 12-①と表 12-②を確認したところ、「ウン」が全部で 122 例であり、そのうちの 114 例が J1 (参加者 1) に使われていることが分かった。では、実際の参加者 1 がどのような場合に「ウン」を使っているか、用例を見てみよう。

ウン

例 11、(③-36、男性 J1)

J5:そうですね。文末詞じゃない言葉の方がいいですか。

J1:文末詞はやっぱり、アノー、完全に「よ」とか「ね」とか「や」とか、ウン、「ま」とか、ウン。

J5:じゃあ、この括弧 9 の 79 を消しちゃった方がいいですか。がんも文末詞じゃない方がいいですか。

例 11 の最初の「ウン」は、J1 が自分の「文末詞は完全に『よ』とか『ね』とか『や』とか」という発言にもう一回考えたら、「確かに、間違っていない」という自分の発言に納得できた心理の表明だと考えてもよいだろう。この場合、山根(2002)では「自分の先行発話に対する話し手の自分の納得表明」と指摘している。そして、最後の「ウン」は、最初の「ウン」と同じ機能で、その前の「『ま』等も文末詞である」という発言に納得できた心理を表しているとも言える一方、発話末に使われているため、「私の話しは以上です」という意味を表しているとも考えられるだろう。それは、田窪・金水(1997)で指摘されるように、「(「ウン」は)文末で、こちらの出力が終わったので、そちらの処理に移りたいという信号であると考えられる。

ウン

例 12、(⑤-33、男性 J1)

J1:終止形と、これ、アノー、活用形で接続方が違うよね。「やわ」、「や」の前は、ですます系と終止形、ウン、そこにあるんですわ、です、ますの例、仮定形はこの「やわ」は入らないですよ。これを出発点としても、面白いですね。だから、J12 さんが使うってことは、だから、そういう個人語ではないんですよ。

ウン

例 13、(⑧-170、男性 J1)

J1:階級思想とか、かつてね、よく使われてた、出発点としては、ウン。この辺はあれ、ほう、彭先生、彭国躍、参考文献の最後、彭先生のからのですか。

例 12 の「ウン」も、例 13 の「ウン」も、どちらも「自分の先行発話に対する話し手の自分の納得表明」(山根、2002)の機能を果たしていると言えよう。実際 J1 の「ウン」の使用例を全体的に概観してみると、やはり例 12、例 13 の場合と同じように、発話中に使われ、「自分の先行発話に対する話し手の自分の納得表明」の機能を果たしているものと、ある

いは発話末に用いられ、「こちらの出力が終わったので、そちらの処理に移りたいという信号」の機能を果たしているものがほとんどである。なぜ J1 による「ウン」の多用が生じたのかについて考えたところ、J1 が「教員」であり、ゼミナールの参加者としては、質問する側でもあるが、それより「アドバイスする、見解を言う立場」という役割の方が求められていることと関わっているのではないかと考えた。「できるだけ適切な言葉で適宜にアドバイスできるように」、J1 は自分が話した後、すぐに言ったことを頭の中でもう一回考え直して、それに納得できたら次に話しに移すということに意識しながら発言しているが故に、「ウン」を発話中で頻繁に用いていたのだろう。そして、「発話末」の「ウン」を多用する背景には、やはり J1 がゼミナールで指導的立場の存在であることと関連しているのではないかと考えた。常識で考えると、教員が話し終わっていない前に、ほかの参加者である学生たちがその話に割り込んで話し出すことは失礼に当たるので、学生は教員が確実に話し終わっていたことを確認できないと話し始めることがなかなか難しいため、J1 は「ウン」を用いて「私の話しは以上です。次に進みなさい」ということを他の参加者に伝えようとしているのだろうと考えた。また、発話末の「ウン」と同じ機能のものとして、「ハイ」がある。「ウン」は「ハイ」より砕けたイメージがあり、学生が教員の前で「ウン」を使うと失礼に当たるとも考えられるため、J1 以外の人ほとんど使っていない結果となったのだろう。

そして、「ウン」の他に、J1 に多用されるフィラーとして、「アノー」、「マー」、「ソノー」等があるが、それらのフィラーの資料例を確認したところ、「発表者 1」と「参加者 2」が使っている場合の機能が似ていて、「参加者 1(ゼミの指導者: J1)」ならではの特徴が見当たらなかったため、その用例を挙げるのは割愛する。

次に、参加者 2(発表者以外の日本人学生)の結果を見てみよう(表 22、23)。まず、「エート」についてだが、「エート」のみの場合は第 4 位だったのに、「エート型」が 1 位になっているのは、「エート」以外の形のフィラーも数多くあるということが察せられる。また、「ア系」においても、「エート」と同じように、「アー」以外のエート系統のフィラーがあるため、「アー」の場合の 3 位から「ア系」の 2 位になったのだろう。そして、「参加者 2」の上位 5 位のフィラーを、「発表者 1」と「参加者 2」のものを比較したところ、「参加者 2」が「ソノー」を多用しているということが分かった。「ソノー」については、上記の「発表者 1」のところにも触れたが、「①先行発話内容に関連した事象を指示する用法、②境界を示す用法」(小出 2006)という二つの機能が見られた。実際、「参加者 2」の使用例の中にもその二つの機能を果たしているものも確認できた。以下の例 14 をその具体例として挙げる。

ソノー

例 14、(②-73、男性 J3)

J3: はい、アノー、やっぱり、いろいろ仮説を立てられてて、でも、やっぱり、実感がわ、分からないんのは、こぼつ使わないん人たちばかり、[笑い]、この現場だから使うと思うんですけど、ソノー、例えば、アノー、先ほどの親密度っていうのを計る際に、ソノー、ペットっていうのは一つの項目として立てられたんじゃないんですか。ソノー、ペットを飼ってる人の犬小屋と犬を飼ってない人の犬小屋、マー、馬を飼ってる人、なかなかいないなあって思ったりするんですけど、ソノー、馬小屋とかだったら、こぼつを使う可能性はある？

また、例 14 は、「ソノー」が「①先行発話内容に関連した事象を指示する用法、②境界を示す用法」という二つの機能を果たしている使用例として挙げているが、その二つの機能の他に、自分の話しが相手に強く当たらないように、「ソノー」を用いて、「話を和らげる」という機能も果たしているのではないかと感じた。

そして、「参加者 2」に多用されているフィラーの中で、第 2 位を示しているのは「アノー」である (表 22)。小出(2006)によると、「ソノー」も「アノー」も指示詞由来のフィラーであり、「ソノー」「アノー」は対人的な場面以外で現れることはないと言っている。そこで、「ソノー」「アノー」が「参加者 2」に取り分け多く使われているのは、二語が対人的な場面で使われているという性質と何か関わりがあるのではないかと考えた。「参加者 2」は発表者以外の学生であり、実際の発言を確認したところ、質問するための発言が多かった。そこで、質問する時は、発表者とのやり取りをスムーズに進めるために、常に発表者の言ったことを頭に置いたり、自分の発言が聞く側である発表者を傷つけないように意識しなければならないがゆえに、対人的な場面でフィラーが頻繁に使用されたのではないかと考えた。要するに、「参加者 2」が発表者とのやり取り (質疑応答) をスムーズに進められるようにフィラーを使っている傾向にあると考えられるだろう。

ここまでは、日本語母語話者である「発表者 1 (日本人学生の発表者自身)」、「参加者 1 (ゼミの指導者: J1)」、「参加者 2 (発表者 1 以外の日本人学生)」の多用されているフィラーについて、実際の用例を用いながら考察したその結果は以下の表 24 のようにまとめられる。

表 24 役割による分類の考察結果（日本語母語話者）

役割	特徴	考察結果
発表者 1	「マー」を多用	「マー」が「後続内容の導入をスムーズにする」機能があるということから考察し、「発表者 1」は「スムーズに発言できるように」フィラーを使っている傾向にある。
参加者 1	「ウン」を多用	「ウン」は「自分の先行発話に対する話し手の自分の納得表明」という機能があるということから考察し、「参加者 1」は「アドバイスする教員の立場」として、「よりスムーズに自分の意見を述べるために」フィラーを使っている傾向にある。
参加者 2	「ソノー」を多用	「ソノー」は「対人的な場面で使われる」という性質を持っているということから考察し、「参加者 2」は「発表者とのやり取り（質疑応答）がスムーズに進められるようにフィラーを使っている傾向にある。

以上の考察結果からも分かるように、発話者の役割により、使われるフィラーが異なってくるということである。「フィラー」は実質的な意味がないにもかかわらず、発話者に自分の置かれている状況により無意識的に使い分けられているということが今回の調査結果から窺い知ることができた。

5.1.2 中国人日本語学習者の結果の考察

まず、表 22 と表 23 を確認したところ、中国人日本語学習者の場合は、「発表者 2(中国人留学生の発表者自身)」と「参加者 3(発表者 2 以外の中国人留学生)」において多用されているフィラーがほとんど同じであると言えよう。それは、前章の結果として述べたように、中国人日本語学習者は日本語母語話者より「使っているフィラーの種類が少ない」、「フィラーの使用頻度^⑥も低い」ということと関わっているのであろう。上記の点から当初は、そもそもフィラーの全体の数が少ない上、種類も数種類しかないから、役割別に結果をまとめてもそんなに大差が出ないのだろうと想定された。とは言っても、「発表者 2」と「参加者 3」の上位 5 位のフィラーを一つ一つ照らし合わせた結果、「ソノー」は「発表者 2」のところにないのに対して、「参加者 3」の上位 5 位までに入っていることが確認できる。それは、日本語母語話者と同じく、中国人日本語学習者においても参加者の方が発表者より「ソノー」を多用しているという結果が出たと言えよう。

^⑥ 本文でいう「使用頻度」とは「一発話におけるフィラーの使用数」のことである。

そして、「中国人日本語学習者」と「日本語母語話者」の結果を比べてみたところ、日本語母語話者の場合は、「発表者」においても、「参加者」においても、「マー」が上位5位に入っているが、「中国人日本語学習者」の場合は、「発表者」と「参加者」の両者において「マー」が上位5位に入っていない。そのため、「中国人日本語学習者」は「マー」をあまり使用しないと言えよう。なぜそうなったのかについて、以下の2点をその要因として考えられるのではないかと考えた。

(一) 日本語学習者によるフィラーの使用状況は学習者の習得段階によって異なるからである。

なぜそれを一つの要因として挙げたのかというと、筆者自身の日本語学習経験を振り返ってみて、フィラーの使用状況は段階を踏んで変化していったように考えられるからである。最初片言しか話せなかった時は、「アノー」と「エート」は日本語の入門教科書で取り上げられていたことがあったため、「アノー」と「エート」しか使用しなかった。その後、「ナンカ」が中級の教科書に出ていたため、「ナンカ」も徐々に使いはじめた。その後、「ウント」や「ソノー」など、使うフィラーの種類も段々増えていっていたように思われる。しかし、「マー」に関しては、今年で7年間日本語勉強してきたが、あまり使ったことがないように思われる。もしかしたら、「マー」は超上級の日本語学習者にしか使われていない可能性があり、今回の調査の参加者はまだそのレベルに達していないが故に、「マー」の使用の少ない状況が確認されたのではないだろうか。

(二) 「マー」の使用には性差があるからである。

実際の今回の調査の「マー」の使用者（日本語母語話者の場合のみ）を確認したところ、「マー」の全用例が429例のうち、414例が男性であり、女性はわずか15例しかなかった（表16）。そのため、「マー」は女性より男性の方が多用するということが確認できたと言えよう。一方、今回の調査の「中国人日本語学習者」においては、男性がC3一人しかなかったため、このような結果になったのかもしれない。

ここまでをまとめると、「マー」は「中国人日本語学習者」にあまり使われない結果について考察したところ、「(一) 日本語学習者によるフィラーの使用は学習段階に従うことになっているから」、「(二) 『マー』の使用には性差があるから」、という二点を要因として挙げることができた。しかし、はたしてその2点が真に「マー」が中国人日本語学習者による使用が少ないということの中心的な要因と考えてよいのか、今回の調査結果ではまだ明言できないところである。今後の課題の一つとして考えたい。

5.1.3 役割によるフィラーの分類のまとめ

今回の役割によるフィラーを分類し考察を行った結果として、日本語母語話者の場合は機能においてある程度の傾向が確認されたが、中国人日本語学習者においては「フィラーの使用実態の指摘」に留まっている。今後中国人日本語学習者が使用しているフィラーの機能についてより深く研究していきたいと考えている。そして、今回の「日本語母語話者」の結果と「中国人日本語学習者」の結果をまとめると、以下の表 25 の通りになる。

表 25 役割による分類の考察結果

日本語母語話者			中国人日本語学習者
役割	特徴	考察結果	①日本語母語話者と同じく、「発表者」は「参加者」より、「ソノー」を多用している。 ②「発表者」も「参加者」も「マー」をあまり使わない。
発表者 1	「マー」を多用	「マー」が「後続内容の導入をスムーズにする」機能があるということから考察し、「発表者 1」は「スムーズに発言できるように」フィラーを使っている傾向にあるという点が確認された。	
参加者 1	「ウン」を多用	「ウン」は「自分の先行発話に対する話し手の自分の納得表明」という機能があるということから考察し、「参加者 1」は「アドバイスする立場」として、「よりスムーズに自分の意見を述べるために」フィラーを使っている傾向にあるという点が確認された。	
参加者 2	「ソノー」を多用	「ソノー」は「対人的な場面で使われる」という性質を持っているということから考察し、「参加者 2」は「発表者とのやり取り（質疑応答）がスムーズに進められるようにフィラーを使っている傾向にある点が確認された。	

5.2 出現位置によるフィラーの機能に関する考察

本節では出現位置によるフィラーの機能に関する考察を行う。発話における位置によって、フィラーの種類が変わってくることが、従来の研究でも明らかにされている（山根 2002^⑦、

^⑦ 山根(2002)では、講演、留守番電話、対話、電話の各談話を調査資料とし分析を行った。

中島 2008^⑧)。今回はゼミナール発話という談話の中で、フィラーは出現位置によってどのように異なっているのかを調査する。また、その調査結果に基づき、フィラーの機能について考えていくこととする。

分類にあたり、発話の位置を「発話頭」、「発話中」、「発話末」の三つに分ける。具体的なイメージについては、以下の例 15、例 16、例 17 をもって示す。

「発話頭」の場合

例 15、(エート、①-9)

J2: エート、これもそのまま引用した形なんで。

「発話中」の場合

例 16、(アノー、①-10)

J3: はい、分かりました、あと、アノー、5 ページの 70、80 代の女性 5 名の括弧がありません。

発話末の場合

例 17、(2 番目の「ウン」、③-36)

J1: 文末詞はやっぱり、アノー、完全によとかねとかやとか、ウン、まとか、ウン。

なお、実際分類を行ったところ、「アー」や「ウーン」など、一つのみまた二つ以上のフィラーが「一発話」になっているものもあったが、その場合は分類不可能なため、「その他」に入れた。

そして、出現位置による分類においても、「日本語母語話者」と「中国人日本語学習者」の両者を分析対象とした。しかし、やはり両者にはフィラーの使用に差が存在すると考えられたため、結果については別々に分類した。その分類結果は表Ⅳと表Ⅴのようにまとめ、本文の末にある添付資料Ⅳとして掲載している。なお、特徴を確認するために、添付資料Ⅳからそれぞれの上位 5 位までを抽出し、表 26 と表 27 のようにまとめた。

表 26 出現位置によるフィラーの分類 (上位 5 位の発話位置別の出現率)

	発話頭				発話中				発話末		
	日		中		日		中		日	中	
	フィラー	出現率(%)	フィラー	出現率(%)	フィラー	出現率(%)	フィラー	出現率(%)	フィラー	出現率(%)	
1 位	アー	31.27	アー	35.21	アノー	26.56	アノー	23.64	ウン	42.86	なし
2 位	マー	16.22	アノー	16.9	マー	26.02	コノー	20.54	ウーン	28.57	
3 位	アノー	13.51	アッ	14.08	ソノー	9.08	エート	17.44	ウント、 ナンカ	14.29	
4 位	アッ	9.27	エート	8.45	エー	7.13	ナンカ	12.02			
5 位	ウン	5.79	ウーン、 ナンカ	5.63	ウン	6.86	ソノー	10.85			

注：①、「日」は「日本語母語話者」を、「中」は「中国人日本語学習者」を指す。なお、

^⑧ 中島(2008)では、『女性のことば 職場編』の中の自然談話を調査資料とし分析を行った。

これは表 27 でも同様である。

表 27 出現位置によるフィラーの分類（型別の上位 5 位の発話位置別の出現率）

	発話頭				発話中				発話末		
	日		中		日		中		日	中	
	フィラー	出現率(%)	フィラー	出現率(%)	フィラー	出現率(%)	フィラー	出現率(%)	フィラー	出現率(%)	
1 位	ア系	42.86	ア系	53.52	アノ系	27.64	アノ系	24.42	シー型、ハイ型	42.86	なし
2 位	マー型	16.22	アノ系	16.9	マー型	26.03	コノ系、エート型	20.54	ナンカ型	14.29	
3 位	アノ系	13.9	エート型	8.45	アノ系	9.35	ナンカ型	12.02			
4 位	エート型	7.34	シー型、ナンカ型	5.63	エート型	8.41	ソノ系	11.24			
5 位	ハイ型	5.79	コノ系	4.23	エ系	7.2	エ系	3.88			

5.2.1 フィラーの出現位置による分類結果の考察（日本語母語話者の場合）

日本語母語話者の各位置の上位 5 位までのフィラーのランキングを比較したところ、それぞれの 1 位を占めているものが異なっているということが分かった。「発話頭」は「アー」（ア系）、「発話中」は「アノー」（アノ系）、「発話末」が「ウン」（ハイ型、シー型）が 1 位を占めている。その中、「発話中」の「アノー」（アノ系）は「発話頭」の場合でも第 3 位を占めているほど多用されていることも分かる。では、実際それぞれの位置に用いられているフィラーはどのような機能を果たしているかを考察するために、実際の用例を見てみよう。

まずは「発話頭」の「アー」の使用例である。

アー

例 18、（女性 J12:⑤-26、男性 J1:⑤-27）

J1: あれ、つかっ、例の 4 で、エトー、奈良でもこのせっかくやで、写真とったらわ。

J12: アー、言いますね。割と結構自然に、やねじゃないんですけど、結構せっかくやから写真とったらとか、傘持ってたらわとか、そんな感じで、なんかしたらっていう意味ですね、簡単に、したらどうですかとか、命令とかというよりは。

J1: アー、そうですか、大阪で 15 年いましたけれども、わだから、明日行くんですわ。

例 18 では、J1 の「奈良でもこのせっかくやで、写真とったらわ」という言い方をするという発言に対して、奈良出身の J12 が「確かに言います」という肯定評価を言う時に、「アー」が使われている。そして、J12 が「命令というより、なんかしたらという勧めの意味の方が強い」という発言に対して、J1 が「そうですか」と言って、驚きの心情が窺える言葉の前に、「アー」を使っている。J12 が使っている「アー」でも、J1 が使ってい

る「アー」でも、前の発話に反応して発言する時に使われていると言えよう。それゆえ、「アー」はゼミナールのような参加者が二人以上の対話の中で多用されるが、独話ではあまり使われないのではないかと考えた。なお、「アー」の機能について考えたところ、両方とも話者交替がスムーズにできるように使われていると言えよう。というのは、その話者交替ができたのは、「アー」を用いて自分の心的態度を表出し、「今の発言に対して私なりの見解がある」ということを他の参加者に知らせる機能を持っているからだと考えた。要するに、「発話頭」の「アー」は、対話の中での話者交替がスムーズにできるように、自分の心的態度を表出する機能を果たしていると言えよう。

次に、「発話頭」の「アノー」(アノ型)の使用例を見てみよう。

アノー

例 19、(男性 J1:⑤-10、アンダーラインが引いてあるもの)

J18:今日は、アノー、ゼミ見学に来たんで、いろんな意見を聞きませんので、安心してください。あらかじめ言っておきます、ハイ。

J1:アノー、ちょっと、教員同士で授業を見せ合うという FD 活動の一貫として、私も J18 さんの授業を、アノー、参加させていただいたので、そのかわりに、今日は J18 さんがここに来てくださっています、マー、いつもの感じで御願います。

J18 が話し終わっているところに、J1 が J18 の言ったことについてより詳しい情報を言う時に、「アノー」を使って言い出したのである。その場合「アノー」は、発話権を自分のところに来るように、他の参加者の注意を喚起している機能を果たしているのではないかと考えた。

続いて、「発話頭」の「エート」(エート型)の用例である。

エート

例 20、(女性 J13:⑤-204、アンダーラインが引いてあるもの)

C3:発表お疲れ様です。ソノー、古典文法で、その文末詞、文末でその終助詞としてのやわと、文中で、連語としてのやわはよく使われています。鈴鹿の方言で、文中でこのやわは使われますか。

J13: エート、文中、エト、普通の文中ってこと、エト、この意味じゃなくて、エト、この意味ではなくて、や、やわが使われているみたいな。

J13 は発表者であり、C3 の質問に答えなければならない状況にある。しかも、どう答えたらいいかまだ整理できていないのに、何かを言わなければならない。それで、「エート」を用いて、とりあえず発話権を維持しようとするのである。

ここまでの「発話頭」の用例に基づいての考察をまとめると、「発話頭」に使われている

フィラーは「発話権」と密接に関わっていると言えよう。中島（2006）では、「発話頭」のフィラーは「談話進行を管理する機能」を果たしていると述べている。本研究の今回の調査結果はそれを裏付けたものと言えよう。一方、中島（2008）では『女性のことば 職場編』の中の自然談話を、本研究ではゼミナールの質疑応答時の談話を調査資料として、共に対話形式の談話データを基に得られた結果であるため、互いに裏付けられた結果となっている。その一方で、独話の形式となると、また異なる結果が出るのではないかと考えた。というのは、独話の場合は、発話者は「発話権の維持」や「発話権の交替」など考えなくてもすむため、「談話進行を管理する機能」のフィラーよりは「話しの展開に関する機能」のフィラーが多用されるのではないかと考えたからである。

ここからは、「発話中」のフィラーの用例について考察する。まず、最も多く用いられている「アノー」（アノ型）の用例である。

アノー

例 21、（女性 J5:⑤-287）

J5: で、あと進めていくんでしたら、アノー、毎回、たびたび私が失敗するんですが、地図をつけて、地図をつけて [笑い出した]。アノー、そうですね、今話者の人の住んでいる地点を入れるのと、その鈴鹿の方言区分、三重県の中の方言区分だと、たぶん北部になると思うんですけど、そこに属しているのを一応示し、示さないと、また、アノー、黒板に三重県の地図を書かされなければならないになるので、気をつけてください。[笑いながら] 以上です。

最初の「アノー」は、「今度地図をつけるべき」というアドバイスを言う時に使われている。それは、「地図をつけるべき」ということが話しの重点であると考えられ、話し手が聞き手に「特にこの話を聞いてください」をアピールするために、「アノー」を使って聞き手の注意を引こうとするのであろう。よって、その場合の「アノー」は「聞き手への注意喚起」の機能を果たしているのではないかと考えられる。2番目の「アノー」は笑うのを止めてから、再度話し出す場合に使われているため、「発話権の維持」を確保するためのものであると考えられるだろう。3つ目の「アノー」は、「三重県の方言区分は北部に属しているということを地図に示めさないと」の「後ろ」に、そして「示さないと」の結果に相当する「黒板に三重県の地図を書かなければならないことになる」を言う前に使われている。J5 が話の中で「私がたびたび失敗する」ということを言っていたので、J5 自身がそういう経験があるため、「地図に示さないとどんなことになるのか」という結果を知っているものと考えられる。つまり、J5 は言おうとしていることがすでに分っているが、どのように言うかを考えるために、「アノー」が使われているものと考えられる。また、その場合の「ア

ノー」は表現の形式を検索するための「時間稼ぎ」の機能を果たしていると言えよう。

次に、2 番目に多く使われている「マー」の用例を見てみよう。

マー

例 22、(男性 J3:①-2)

J3: 発表ありがとうございました。アノー、質問ってというか、まずはもうこの、マー、文章をそのまま、卒論に使っていきますか。

例 22 では、J3 が発表原稿に書いてあることについて、他にも言い方があるが、「文章」であることには間違いないので、とりあえず「文章」だと断定する前に、「マー」が用いられている。その場合の「マー」は、断定を避けて、自分の主張を「和らげる」機能を果たしていることが窺える。また、前述の 5.1.1 の例 10 の中でも、「発話中」の「マー」が二つ使われているが、両方とも自分の主張を「和らげる」機能を果たしているものと言えよう。まず、例 10 の J3 に使われている「マー」についてであるが、J3 が J2 の調査が「比較」であるかどうか断定できないため、とりあえず自分が「比較」であると感じたので、「比較」という言葉を使おうとしたという心理が窺える。そのため、「マー」を使って、自分の断定を和らげようとしたのだろう。そして、例 10 の 2 番目の J2 に使われている「マー」についても、J2 が「ちょっと複雑なんですけど、とりあえず平均差と言っていいだろう」という自分の見解（主張）を言う前に現れている。その場合の「マー」も、「和らげる」機能を果たしているものと言えよう。

要するに、「マー」は断定を避けて、自分の主張を和らげる機能を果たしているということが用例から確認できた。次にもう一步踏み込んで考えてみると、「マー」が使われる場合は、その前の文で「断定」して言わないと、話しを進めることができない状況にあると言えよう。つまり、「マー」を使うからこそ、話しをスムーズに次に展開していけると言える。それは、「マー」が「後続内容の導入をスムーズにする機能」を持っているという川上(1993)の指摘を裏付けているとも言えよう。なお、「マー」の機能からは、発話の途中に用いられる「フィラー」は「話しの展開に関わる」機能を持っていることが分かった。そして、「マー」のみならず、第 3 位を占めている「ソノー」(表 22) の使い方からも同じようなことが考えられる。前述 5.1.1 では、「ソノー」の用例について考察したところ、「ソノー」は「話しを和らげる」機能を果たし、「参加者が発表者とのやり取りをスムーズに進めるために」使われているということが分かった。そこで、「ソノー」も「話しの展開に関わる」機能を持っていることが指摘できるだろう。

続いて、発話中の「エート」についてである。まず、例 23 の「エート」の使用例を見てみよう。

エート

例 23、(男性 J3:①-36、①-38)

J3:マー、ソノー、マー、一番何が聞きたかったのは、その数字がばーと並んでるのを、せっかくだから、見ている人たちも、これがこれぐらいだったら、これぐらいのことなんだろうっていうことを補っていただきたいなあって思った感じです。例えば、コノー、1.07 この四角い平均が 1.070 というのと、し、エート、四角かったもの、2.116、平均、同じ世代を比較した場合、どちらが使用しているか。

J2:アー、それは言えないんです。

J3:アノー、じゃなくて、エート、数字的に。

例 23 に現れる「エート」は両方とも話す内容を考えるための「時間稼ぎ」の機能を果たしていると言えよう。最初の「エート」は、四角いの平均が 1.070 と言っていた後に、それと比較できるもう一つも項目を探している途中に使われているため、「時間稼ぎ」の機能を果たしているものだと考えられる。そして、2 番目の「エート」は、J3 が J2 の言ったことを否定し、「自分の聞きたいことをこれだと」伝えようとした時に、「その内容」を考えている時に使われている。よって、これも「時間稼ぎ」の機能を持つものだと考えた。要するに、例 23 からは発話中の「エート」は次に言うことを考える時に使われ、「時間稼ぎ」の機能を持っているということが窺える。そして、もし言うことを考えている時に、「エート」のようなフィラーが使われなかったら、その間は沈黙になってしまうということが考えられる。話している途中に「沈黙」になってしまうと、他の人が話し出すおそれもあるので、その場合は自分の話しを進められなくなる。そのため発話中のフィラーは「話しを次にスムーズに進めるための機能」を持っていると考える。換言すれば、やはり発言中の「エート」の用例からも「フィラー」は「話しの展開に関わる」機能を持っていることが窺える。さらに、例 23 の「エート」は「次に話す内容を考える時」に使われるものということで、「内容検索」の機能を持つものであると考えられる。さらに、前述の発話中の「アノー」の用例である例 21 からは、「アノー」は「形式検索」の時に使われている。その結果は、先行研究の 2.3.1 に挙げている田窪・金水（1997）の指摘結果と合致している。

最後に、発話中の「エー」についてである。「エー」の用例を概観したところ、言いよどんでいる時に、「エー」が使われる傾向にあると感じた。その場合も、言いよどみによる沈黙を回避するために用いられているものだと考えられるのではないだろうか。下の例 24、例 25 は「エー」の実際の使用例として挙げる。

エー

例 24、(男性 J1:②-18)

J3:そうですね。アノー、一番最初って言いませんでしたっけ、ゼミ発表、アノー、後期、方言。まずちょっと話者の本調査にしても、予備調査にしても、この場合だと予備調査の、アノー、協力者というか、情報ですね（はい）、それを一節のやっぱりはじめのところに、J4 さんが聞いてもらったような、エー、実際 4 人の人、なんですかね。70 代から 40 代まで、マー、その出身地とか、これ、ぜん、エー、ぜん、エート、桜井っていうところでしたっけ。

エー

例 25、(男性 J4:②-54)

J4:これは、そうですね、自然的に出来て、人為的に作ったものじゃないんで、これは、もう、こぼつ使わないんですよ。（そうですね）、[笑い]、アノー、こぼつ使わないんで、かといって、蜂の巣とか、ありの巣とか、エー、なんだっけ、そこら辺はもう使わないんで、誰に聞いても使わないって言うんやけど、使わないんですけど、その使わないっていうのははっきりさせる理由をですね、エー、ありの巣、なんかあったっけ、エート、エート、ウン、あとはね、蜘蛛の巣とか、ありの巣とか、虎穴とか、虎穴はそんなに見当たらないと思うんですけど、マー、こぼつ使わないんで、その確認にあります。あと、ついでに、そうですね。そういう感じです。

以上の発話中のフィラーに関する考察をまとめると、「発話中」に使われているフィラーは「話しの展開」に深く関わっているフィラーであると言えよう。また、具体的な機能に関しては、「注意喚起」、「時間稼ぎ」、「和らげ」、「言いよどみの表し」等のものが確認できた。また、前述の 5.1.1 の「発話頭」のフィラーと比較してみると、「発話頭」のフィラーは「発話権」との関係が深いのに対して、「発話中」のフィラーは「話しの展開」と密接に関連しているということが明確になった。なお、上記の結果は、先行研究の 2.1.3.3 の中島(2008)による指摘と合致しているということも分かった。

では、ここからは「発話末」の「フィラー」について考える。まず、使用例を見てみよう。

ウン

例 26、(男性 J1:③-36、アンダーラインを引いてあるもの)

J5:そうですね。文末詞じゃない言葉の方がいいですか。

J1:文末詞はやっぱり、アノー、完全によとかねとかやとか、ウン、まとか、ウン。

ウン、ウン

例 27、(男性 J1:③-36、アンダーラインを引いてあるもの)

J1:マーそうですね、ウン《沈黙 8 秒》

J1 : ウン、ということですね、アノー、ここで言われたら、もうちょっと確認したいんですけど、そういえば、なんかこうだんだんちらっと聞いたような、聞いた記憶が読みかえりましたけど、ウン、かつての京都では、だから、シラビーム的な時期があったってことですね。長い時代、ウン。《沈黙 32 秒》

ナンカ

例 28、(男性 J1:③-36)

J5:はい、はい、ひょっとしたらということなんですけど、あおくさいって言われると、味の方は私が想像しちゃって、例えば青汁みたいなやつを飲んで、わー、あおくさいわ感じって言っちゃんですけど、そういう味覚の方っていうのはないんですかね。このここに書いてるまだ若いっていうのはたぶんなのかな（そうなんですね）、ナンカ。

J5:それに関しては、どうなのでしょうね。どうなのでしょうね。[笑い]普段全然使わないんで。

例 26 の「ウン」と例 27 の「ウン」と「ウン」は「発話の終了を意味する機能」を持っていると言えるだろう。そして、例 27 の「ウン」が使われている場合は、自分があまり確信のないことを言った後、発話を終了する時だと考えられる。つまり、「ウン」は、「自分が確信していること」、「ウン」が「自分があまり確信していないこと」を言った後に使われるという二語の違いが例 26 と例 27 から窺える。そして、例 28 の「ナンカ」は言いよどんでいる時に、話者交替したため、発話が強制的に終了しているがゆえに、「ナンカ」が発話末に使用されると考えられる。それは、「発話末」の「言いよどみ」の機能を果たしていると言えよう。そのような場合は日常生活ではよくあると考えられるが、今回のゼミナールの発言では用例がごくわずかし確認されなかった。それは、ゼミナールでは司会者がいて、発表者以外の人举手して、司会者が「どうぞ」と声をかけてくれてから言い出すのがほとんどであるため、話しの途中で終わるものが少ない結果が確認されたものと考えられる。

5.2.2 フィラーの出現位置による分類結果の考察のまとめ（日本語母語話者の場合）

日本語母語話者の「発話頭」、「発話中」、「発話末」のフィラーについて考察した結果をまとめると、以下の表 28 の通りになる。

表 28 フィラーの出現位置による分類の結果の考察のまとめ（日本語母語話者の場合）

出現位置	機能	中島(2008)と同じ結果が出ており、中島(2008)の指摘を裏付けるものとなっていると言えよう。
発話頭	談話進行を管理する機能：具体的に挙げると、「話者の心的態度の表出」(アー)、「注意喚起」(アノー)、「発話権の維持」(エート)等の機能を持つ。	
発話中	発話展開に関する機能：具体的に挙げると、「時間稼ぎ」(アノー、エート)、「和らげ」(マー)、「言いよどみ」(エー)等の機能を持つ。	
発話末	発話終了、言いよどみなどの機能を持つ。	

5.2.3 フィラーの出現位置による分類結果の考察（中国人日本語学習者の場合）

中国人日本語学習者の場合は、「発話頭」と「発話中」しかフィラーが確認できなかった。まず、表 26 の「発話頭」と「発話中」の上位 5 位までのフィラーを照らし合わせたところ、「発話頭」においては「アー」(35.21%)、「アッ」(14.08%)と「ウーン」(5.63%)が、「発話中」においては「アノー」(23.64%)、「コノー」(20.54%)と「ソノー」(10.85%)が多用されていることが分かった。そして、表 27 の型別の結果を確認したところ、「発話頭」は「ア系」(53.52%)と「ンー型」(5.63%)、「発話中」は「ソノ系」(11.24%)と「エ系」(3.88%)が多く使われていた。

次に、中国人日本語学習者と日本語母語話者とにおいて、それぞれ「発話頭」と「発話中」の上位 5 位の種類別のフィラーを比較したところ、中国人日本語学習者は日本語母語話者より「ナンカ」を多用していることが分かった。表 26 を見ると、中国人日本語学習者の場合は、「ナンカ」は「発話頭」でも「発話中」でも上位 5 位に入っているのに対して、日本語母語話者の場合は両方で確認されないという結果になっている。では、実際の中国人日本語学習者による「ナンカ」の使用を見てみよう。

ナンカ

例 29、(女性 C5:⑩-48)

C5: 中国人の留学生、ナンカ、意見とか、私、なんだろう、語学に対する感覚、じ、en、一応中国母国なんですけど、やっぱり一人、たまには研究室の人にも聞いたりするんですけど、ナンカ、ぜひ意見。[沈黙 11 秒]

ナンカ

例 30、(女性 C5:⑩-60、60 番の発話がとても長いため、一部引用)

C5: [前略] この前 [人名] さんに言われました、エレベータ、方言調査から帰る時に、エレベーターの中で、先輩に向かって、ナンカ、ナンカ、私に質問っていうか、ナンカ、コメント欲しかったみたい、で、先輩、「你说」(中国語) なになに、あなたはどう思いますか、みたいな感じで、今思いついたのが、一応これこれ、こっちだと質問する、こっちだと自分から自分の意見、これだと相手の意見を求める、これだと情報、情報なんですけど、情報を伝える、情報を伝える時。

例 29 では、最初の「ナンカ」は「意見とか」の前に、2 番目の「ナンカ」は「ぜひ意見」の前に用いられている。二つとも、「特定の意見」に限定せずに言う機能を持つものであると考えられる。この場合の「ナンカ」は物事を不特定化することにより、発言を「和らげる」機能を果たしているのではないかと考えた。

例 30 では、「なんか私に質問っていうか」の使い方で、「ナンカ」を用いて曖昧に言うようにしていることが察せられる。そして、「なんかコメント欲しかったみたい」の場合においては、もし「なんか」を使わずにすると、「コメントがほしかったみたい」という断定の表現になるため、「ナンカ」は話をぼかす^⑨働きを持っているのではないかと考えた。

では、なぜ中国人日本語学習者に「ナンカ」を多用する結果が確認されたのだろうか。それについて、筆者自身の今までの日本語を勉強する経験も振り返って考えた結果、中国人日本語学習者は日本語母語話者よりボキャブラリーが少ないということが要因の一つとして考えられるのではないかと考えた。というのは、日本語で何かを言う時にそれと 100% 合致する言葉が思いつかない、あるいは分からない場合は、とりあえずそれと近い言葉で表現するということがよくあったからである。その場合、筆者自身がよく「ナンカ」を使い、ぼかして言うようにしていたように思われる。そのため、中国人日本語学習者は日本語母語話者よりボキャブラリーが少ないことが、「ナンカ」を多用する一つの要因であると考えられる。さらには、中国語の母語による干渉があったということも要因の一つとして考えられよう。即ち、前節の 4.1.2.3 でも述べた通り、「ナンカ」に対応するフィラーは中国語にも存在しているため、中国人日本語学習者が中国語の「ナンカ」(中国語では「什麼(シェンマ)」と言う)の使い方に影響され(母語の干渉)、日本語の「ナンカ」を多用していたということである。

そして、なぜ日本語母語話者はあまり「ナンカ」を使わなかったのだろうか。ゼミナー

^⑨ ここで言う「ぼかす」とは、「物事を不特定化すること」を指す。婉曲的に物事を言うために、曖昧な表現を使う場合とは異なる。

ルの場合は、ややフォーマルの状況であるため、もしかしたら「ナンカ」はフォーマルな場では使いにくく、くだけた状況の場合に使用されやすいということと関わっているのかもしれない。それで、日本語母語話者は「ナンカ」の使用を控えていたのではないと考えた。

続いて、中国人日本語母語話者の使っている「ア系」のフィラーについて考えたい。表 27 から分かるように、「発話頭」において、日本人母語話者も中国人日本語学習者も「ア系」が最も使われている。しかし、筆者が録音データを文字化する際にも疑問に思ったのが、中国人日本語学習者が使っている「ア系」のフィラーは日本語のフィラーであるかどうかということである。というのは、前述の 4.1 の中国語のフィラーを示した表 5 に掲載されているように、中国語のフィラーにも日本語の「ア」と同じ発音のフィラー「a(啊)」がある。中国語の場合は声調^⑩があるが、日本語の驚きの「アッ」と中国語のフィラーの「a(啊)」で「驚き」を表すものとは発音が全く同じであるため、判断できない。その場合は、本来中国人日本語学習者が、日本語で話している時に現れるものは日本語であると見なしてもよいと思われるが、中国人日本語学習者が確実に中国語のフィラーを使用していることが確認できたため（例 29 に現れている「en」が中国語のフィラーである。前述 4.1 参照）、日本語と同じ発音の「ア系」についても戸惑いを感じた。今回は、ひとまず日本語のフィラーに分類したが、今後はその点についてより詳しく考察したく考えている。

5.2.4 出現位置による分類のまとめ

ここまでの日本語母語話者と中国人日本語学習者の出現位置による分類・考察の結果をまとめると、以下の表 29 の通りである。（次のページに続く）

^⑩ 中国語は「声調言語」であり、同じ音節符号でも 4 つの異なる声調が存在する。たとえば、「ma」という音節は、一声の場合は「妈」と書き、「母」の意味である。二声の場合は「麻」と書き、「あさ」の意味である。三声の場合は「马」と書き、「馬」の意味である。四声の場合は「骂」と書き、「ののしる」の意味である。

表 29 出現位置による分類のまとめ

日本語母語話者			中国人日本語学習者
出現位置	機能	中島(2008)と同じ結果が出ており、中島(2008)の結果を裏付けるものとなっていると言えよう。	①「発話頭」と「発話中」にしかフィラーが確認できなかった。 ②「発話頭」でも「発話中」でも、「ナンカ」が多用されている。それは、「ナンカ」が物事を不特定化して言うための「ぼかし」という機能を持っていると関わっており、中国人日本語学習者は日本語母語話者よりボキャブラリーが少ないことが原因であると考えられる。
発話頭	談話進行を管理する機能：具体的に挙げると、「話者の心的態度の表出」(アー)、「注意喚起」(アノー)、「発話権の維持」(エート)等の機能を持つ		
発話中	発話展開に関する機能：具体的に挙げると、「時間稼ぎ」(アノー、エート)、「和らげ」(マー)、「言いよどみ」(エー)等の機能を持つ		
発話末	発話終了、言いよどみなどの機能を持つ		

5.3 本章のまとめ

本章では、「役割」と「出現位置」という二つの視点からフィラーの機能について考察した。日本語母語話者の使用するフィラーを中心に考察した結果、フィラーは「役割」と「出現位置」によって機能が変わってくるということが明らかになった。なお、中国人日本語学習者の多用しているフィラーに関しては、母語である中国語にもそれに対応する言葉があるということから、中国人日本語学習者の多用しているフィラーは母語干渉によるところもあるものと考えられる。そして、中国人に多用しているフィラーの機能について考察したところ、物事を不特定化して言うための「ぼかし」機能もあるということが確認された。

第六章 「アノー」と「エート」について

本章では、「アノー」と「エート」に焦点を当てて、二語の違いについて考察する。筆者自身は今まで七年間日本語を勉強してきたが、未だに「アノー」と「エート」の使い分けがはっきり分かっていない。実際周りの日本語学習者からの「アノー」と「エート」の二語を使い分けるのが難しいという声もよく耳にする。そこで、日本語教育に少しでも貢献できることを願いながら、日本語学習者のために、「アノー」と「エート」の二語の違いを説明することを試みる。

具体的な方法としては、第四章で明らかに「アノー」と「エート」に関する以下の2点について、実際の用例を参考しにしながら考察する。

- ①原稿説明時においても、質疑応答時においても、出現率において、日本語母語話者の男性より女性の方が「エート」を多く使う。(前述 4.1.1.3 と 4.1.2.4)
- ②日本語母語話者も中国人日本語学習者も、原稿説明時は「エート型」、質疑応答時は「アノ系」の方が多用される。(表 21)

6.1 「エート」の使用の性差について

前述の 4.1.1.3 と 4.1.2.4 の結果から、「エート」において、日本語母語話者の男性より女性の方に多く使われているということが分かった。表 9 と表 16 共に出現率を確認したところ、男性は「エート」をあまり使わない代わりに、「エー」(エ系)と「マー」(マー型)を多用しているという傾向が見られた。今回男性の人数も少ないということで、その結果が個人差によるところが大きいのか、あるいは「エート」の機能と関わっているのか、男女の実際の使用例を参考に考えていく。

エート

例 31、(女性 J6、原稿説明時)

J6: サ行五段活用の音便形にも、非音便形との対比においての文体的な価値の表現は、他の、エート、業が間違っていて、エート、エート、アノー、行くっていう、カ行、ガ行とかの行にしといてください。[発表原稿を 17 秒読む]

エート

例 32、(女性 J11、③-117、質疑応答時)

J11: はい、ちょっと気になるところがあったんですけど、表のところ、表、アッ、資料 5 と 6 で、資料 5 の、エート、58 歳の女性のレタスにはまるがついてあるんですけど、ソノ一、6 の方がついてなくて、どっちが正しいですか。

エート

例 33、(男性 J3、②-192)

J3: そう、例えば、後もう一つそう、それでひっかかて、使う使わないのこの二択って結構難しいところがいっぱいあって、例えば、エート、僕がしてはるって使いますかって言われたら、使わないって言うけれども、してはるっていうのは知ってるし、たぶんそういう場合で使えるんだらうなって思うけど、使わないっていう場合は使う？

例 31 は原稿説明時の女性による用例である。原稿説明時は男性の用例がなかったため、女性の用例と比較することができない。例 32 と例 33 は質疑応答時における、女性と男性のそれぞれの使用例である。例 32 では資料 5 の中で J 11 が自分の気になるところを探すための「時間稼ぎ」と考えられ、例 33 では J3 が「使う使わないの二択が難しい」と思った具体例を考えるために「時間稼ぎ」の機能として「エート」が使用されていると思われる。よって、例 32 と例 33 からは「エート」の男女における機能の違いが見られなかった。また、分析資料の他の「エート」の用例を概観したところ、性別による違いが感じられなかった。今回は男性の参加者の人数は女性より少ないということに関わっているかもしれない。実際の録音資料では、女性は各回とも 10 人以上いたが、男性は 3 人か 4 人しかいなかった。実際の各録音資料の男性の参加者人数およびその内訳をまとめると、以下の表 30 の通りになる。

表 30 各録音資料の男女の参加者人数

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
男性	人数	4	4	3	4	4	3	3	3	3	3
	内訳	J1、 J2、 J3、 J4	J1、 J2、 J3、 J4	J1、 J14、 C3、	J1、 J2、 J3、 J4	J1、 J14、 J18 C3	J1、 J14、 C3	J1、 J14、 C3	J1、 J14、 C3	J1、 J14、 C3	J1、 J14、 C3

表 30 から分かるように、実際の男性の日本語母語話者参加者が「J1」、「J2」、「J3」、「J4」、「J14」である。それに、「J2」、「J3」、「J4」は三回しか参加していたなかった上、J14は発話数は合計 45 しかないため、男性フィラーの中で J1 の使用例が占めている割合が多いのだろう。そのため、たまたま J1 が「エート」をあまり使用しなかったため、男性全体の「エート」の使用例が少ないという結果になったのではないかと考えた。

6.2 原稿説明時の「エート型」と質疑応答時の「アノ系」について

6.2.1 原稿説明時の「エート型」について

まず、原稿説明時の「エート型」の用例を概観すると、大きくに以下の七つの場合に分けられる。各場合の用例を用い、「アノー」に置き換えられるかどうかについて考察する。

(一) 数字または英語の表記の前

エート

例 34、(女性 J6、録音番号④、原稿説明時)

J6:それが「他動性」をもっていることを形態面で保証しているのは、エト、①から⑦に共通する、動詞の語幹末に現れる s の働きであるとまとめることができると考えています。

仮名と漢字で書かれたレジュメの文章の中に急に数字を目にしたら、一瞬躊躇するだろう。その場合は、「エト」を用いて、その間を埋めようとしている。また、この場合は「アノー」と置き換えられないと思った。

(二) 難しい読み方の前

エート

例 35、(女性 J5、録音番号③、原稿説明時)

J5:熊野街道、伊勢街道の二つが通っていますが、エート、女鬼峠、エー、さん、さん、みせず、うんと、三瀬の渡しなどの難所が多く、宿泊する旅人は少なかったそうです。

発表原稿：

熊野街道、伊勢街道の二つが通っているが、女鬼峠、三瀬の渡しなどの難所が多く、宿泊する旅人は少なかったという。

例 35 では、「女鬼峠」という言葉の読み方に戸惑いっしまい、その間を埋めるために「エート」を使用していると考えられる。その場合は、「アノー」と置き換えにくいものと判断される。

(三) 誤植などのミス伝える時

エート

例 36、(女性 J6、録音番号④、原稿説明時)

J6: サ行五段活用の音便形にも、非音便形との対比においての文体的な価値の表現は、他の、エート、業が間違っていて、エート、エート、アノー、行くっていう、カ行、ガ行とかの行にしといてください。[発表原稿を 17 秒読む]

例 36 では「業」の字が間違っていることに気付き、それを説明している時に「エート」が使用されている。その場合は「アノー」と置き換えることができるのではないかと思った。実際同じ録音番号④の録音データ内で、誤植について説明する前に「アノ」が使われている例があったため、「誤植などのミス伝える」前には「アノー」と「エート」の両方が使用できると思われる。その「アノ」の例は以下の例 37 の通りである。

アノ

例 37、(女性 J6、録音番号④、原稿説明時)

J6: ハ行、ハ行、ハ行動詞がイ音便を起こすとカ行動詞との音便形動詞の衝突、音便形動詞、音便形同士は、アノ、違う字でした。

(四) 段落またはページの変わり目

エート

例 38、(女性 J5、録音番号③、原稿説明時)

J5: 行政区分では大台町は三重、エー、三重県北中部とされていますが、天気予報、警報、注意報の発表区分では南部になっています。[発表レジュメ本文上の段落変わる]、エート、産業はお茶としいたけの栽培を主としており、[原稿 17 秒読む]

発表原稿：

(前略) 行政区分では大台町は三重北中部とされているが、、天気予報、警報、注意報の発表区分は南部になっている。

産業はお茶としいたけの栽培を主としており (省略)

例 38 のような「段落またページが変わる」時に現れている「エート」は、段落とページが次に行くことにより生じる間を埋めるために用いられていると考えられる。また、この場合は、「アノー」に置き換えられないと考えられる。

(五) 独り言の前

エート

例 39、(女性 J5、録音番号③、原稿説明時)

J5: エー、さらに 58 歳に絞ってみてみると、エート、これなんと読むだろう、はなつぼみ、ぶろこりーやもやしに関して、[原稿 29 秒読む]

この場合は、「(一) 難しい読み方の前」の状況と似ているが、こちら「なんと読むだろう」という独り言の前とはやはりすこし違っているようである。例 35 では「難しい読み方」ではあるが、すこし時間を掛けて考えれば読める程度のものである。一方、例 39 では、J5 が読み方についてまったく検討がつかない状況であると感じられる。そのため、この場合の「エート」は「難しいと感じた時」の一種の心的態度の表出だと考えられるのではないかと考えた。そして、この場合は、「アノー」と置き換えられないと考えられる。

(六) 息継ぎの間を埋める場合

エート

例 40、(女性 C5、録音番号⑥、原稿説明時)

C5: 文科系の講義に似ている他方、エート、質疑応答の時間は質問のやり取りをしているがゆえに、エート、理科系の講義の形式に近いということが考えられるでしょう。

発表原稿

文科系の講義に似ている他方、質疑応答の時間は質問のやり取りをしているがゆえに、理科系の講義の形式に近いということが考えられるだろう。

例 40 では、長い文章を読む時に、息継ぎをしながら、前後の意味を確認するために「エート」が使用されていると考えられる。「エート」は「息継ぎの間を埋める」ために使用されるものだと考えた。この場合は「アノー」に置き換え不可能だと考えられる。

(七) 発表原稿に書いてないことを言う時に

エート

例 41、(女性 J5、録音番号③、原稿説明時)

J5: エート、共通しているところは、調理法については、どの野菜に対しても、エート、その「はなさき」という言葉は使えないっていう事ですが、調理前のみ「はなさき」が使えます。では、本文に戻って読んでいきます。

表 41 では、J5 がアンケートの結果をまとめてある表を見ながら説明している時の言葉で

ある。最初の「エート」は表を見た途端に、話す情報を探すための時間稼ぎのものである。2番目の「エート」も言葉を整理するための時間稼ぎであると考えられる。また、その場合は二つの「エート」は「アノー」に置き換えることこそできるが、少し異なるニュアンスが生まれてくるのではないだろうか。実際、例41の「エート」を「アノー」に変えてみると、以下のようになる。

アノー、共通しているところは、調理法については、どの野菜に対しても、アノー、その「はなさき」っていう言葉は使えないっていう事ですが、調理前のみ「はなさき」が使えます。では、本文に戻って読んでいきます。

上記の「アノー」が使われている文においては、「アノー」が「注意喚起」の機能を果たしているようである。最初の「アノー」は聞き手に注意を「共通しているところ」に向けてほしいということをアピールするために用いられている。そして、2番目の「アノー」は、「調理法で『はなさき』という言葉が使えないのに、調理前なら使えるよ」ということを聞き手の注意を引いて、聞き手にしっかり伝えるために使われているようである。よって、同じ文章でも、「エート」が用いられると考えながら話しているということになるのに対して、「アノー」を用いると、聞き手に注意して聞いてほしいことをアピールしていることになる。それは「アノー」と「エート」の機能の違いによるものだろうと考えられる。

ここまでの「原稿説明時」における「エート」の七つの使用環境についての考察をまとめると、以下の表31の通りである。

表31 「原稿説明時」における「エート」の代表的な七つの使用環境

使用環境	「アノー」に置き換えられるか
(一) 数字または英語の表記の前	不可
(二) 難しい読み方の前	不可
(三) 誤植などのミス伝える時	可
(四) 段落またはページの変わり目	不可
(五) 独り言の前	不可
(六) 息継ぎの間を埋める場合	不可
(七) 発表原稿に書いてないことを言う時に	可（異なるニュアンスが生じる）

6.2.2 質疑応答時の「アノ系」について

次に、質疑応答時の「アノ系」の用例についてである。用例を概観すると、大きく以下の五つの場合に分けられる。それぞれの用例を確認しつつ、「エート」に置き換えられるかど

うかについて考察する。

(一) 質問する時に用いられる

アノー

例 42、(男性 J1、録音番号④-45)

J1: (前略) 促音便化多いですね、ウン。《沈黙 5 秒》

J1: アノー、や、柳田さんって室町時代でしたっけ、そのタイトルの。

例 42 では、J1 は沈黙を破り、質問をする時に「アノー」が使用されている。その場合は、聞き手の「注意を喚起する」機能を果たしていると考えられるが、「エート」に置きかえられないと思われる。

(二)、言い直しの時

アノー

例 42、(男性 J1、録音番号④-15、アンダーラインが引いてあるところ)

J1: でている、出ているところは 9、10、11、のところだけ。実際は、アノー、実際はあれですね、アノー、考察のところで、こう本文の中にこう持ってきて、エー、で、ちょっとすぐ分かるように、コー、アノ、太打ちにするとか、下線を引いたりするとかですね。ぱっと目に付くような形で、後ろに出す時も、ポイントのところは、マー、コー、すぐに分かるように、最終的にはですね、はい。そうすると、考察しやすくなるかもしれないですね。《沈黙 9 秒》

例 42 では、J1 が「実際は」のところを言い直したところに「アノー」が使用されている。例 42 では文脈から J1 が「用例のポイントのところになんか印をつけた方がいい」というアドバイスをする場合に現れているため、「和らげ」の機能を果たしていると考えられる。例 42 では、「エート」に置き換えることはできるが、「エート」に置き換えると、すこし違うニュアンスが生じるのではないかと考えた。実際、例 42 で言い直しているの「アノー」を「エート」に置き換えると、以下のようになる。

でている、出ているところは 9、10、11、のところだけ。実際は、エート、実際はあれですね、アノー、考察のところで、こう本文の中にこう持ってきて、エー、で、ちょっとすぐ分かるように、コー、アノ、太打ちにするとか、下線を引いたりするとかですね。

「エート」に置き換わると、「実際は」の次に言う言葉がまだ思いつかず、その話す内容を考えるための「時間を稼ぐ」機能になると考えた。

(三)、自分の意見・考えを述べる前に

アノー

例 43、(男性 J3、録音番号①-6、アンダーラインが引いてあるところ)

J3: 発表ありがとうございました。アノー、質問っていうか、まずはもうこの、マー、文章をそのまま、卒論に使っていきますか。

J2: アッ、違います。これは。

J3: 全く使わないんですか。

J2: いや全くじゃないですけど。

J3: アノー、(はい)、誤字脱字とか言った方がいいかなと思って、(はい)、ナンカ、エート、2の研究手順の、2の1語彙リストの作成の部分で、(はい)、エート、3行目の親密は親密度ではなくて、親密でいいですか、これは。文字音声単語の。

例 43 では、J3 が「もしその文章をそのまま論文に使うのでしたら、誤字脱字を言った方がいい」という自分の考えを述べる前に、「アノー」が使用されている。その場合は、「和らげ」の機能を果たしていると考えられる。なお、「エート」に置き換えられないと考えられる。

(四)、例を挙げる前に

アノー

例 44、(男性 J1、録音番号③-38、アンダーラインが引いてあるところ)

J1: いや、がん、がんは文末詞なんですけど、てきないは、これは、アノー、マー、例えば、ない、ないは助動詞ですよ。て、て、て、持てきない、きない、マー、これ通常まとめて文末詞とは考えられるんですね、がん、がんとかね。アノー、いこうにとかのにとか。マー、これも文末詞、終助詞、マー、例えば終助詞、助詞なんで、ウン、ないとか助動詞とか、マー、助動詞も、ウン。食べてきないとか食べていきなさいみたいな感じ。

例 44 の最初の「アノー」は「『ない』を助動詞の例」として挙げる時に使用され、2 番目の「アノー」は「『いこうに』の『に』を文末詞」の例」として挙げる時に使用されている。その際は、「注意喚起」の機能を果たしているものだと考えられる。「エート」に置き換えても文として成立するが、ニュアンスが生じると考えた。実際置き換えると、以下の通りになる。

いや、がん、がんは文末詞なんですけど、てきないは、これは、エート、マー、例えば、ない、ないは助動詞ですよ。て、て、て、持てきない、きない、マー、これ通常まとめて文末詞とは考えられるんですね、がん、がんとかね。エート、いこうとかの何とか。マー、これも文末詞、終助詞、マー、例えば終助詞、助詞なんで、ウン、ないとか助動詞とか、マー、助動詞も、ウン。食べてきないとか食べていきなさいみたいな感じ

上記の「エート」に置き換えられた文では、急に例を思いつかないという意味合いが含まれていると考えられる。その際は、「エート」は前出の（二）と同様に「時間稼ぎ」の機能を果たしているのだろう。

（五）、適切な表現を検索する時

アノー

例 45、（女性 C5、録音番号⑨-49、アンダーラインが引いてあるところ）

C5: 確かに、確かに私も悩むところでした。結構分類のところで、注意と忠告が曖昧になってます。そう、しかもそれは全部私が主観でやったもので、アノー、なんて言うの、そこをどうしたらいいかなっていうのを考えたりして、アノー、私の考えてる注意と忠告ですよ。注意の方を、アノー、なんだっけ、結構つよ、なんか強い、ちょっと警告じゃないんですけど、なんか、ちょっと圧がつよ、ちょっとだけ強い、アノー、忠告よりは強いと思って、普通の優しい忠告みたいのが忠告として、注意だとこれしていけないっていうのが注意だと考えてたんです。こうした方がいいよみたいのがとか、マー、忠告。こういうふうにみたいに考えたんです。

例 45 では、「アノー」は「なんて言うの」、「なんだっけ」の表現の前に使用され、言いたいことがすでに頭にあるが、適切な表現を検索する時に使用されると考えられる。その場合は「エート」に置き換えられるが、異なるニュアンスが生じるようである。実際、「エート」に置き換えると、以下の通りになる。

（前略）そう、しかもそれは全部私が主観でやったもので、エート、なんて言うの、そこをどうしたらいいかなっていうのを考えたりして、アノー、私の考えてる注意と忠告ですよ。注意の方を、エート、なんだっけ、結構つよ、なんか強い、ちょっと警告じゃないんですけど、なんか、ちょっと圧がつよ、ちょっとだけ強い（省略）

「エート」に置き換えると、次に何を言おうか話す内容をまだ明確に思いついてない状況にあると読み取れるため、「アノー」の場合の「言う内容がすでに頭にある」という状況と異なる。

以上の「質疑応答時」における「アノー」の五つの使用環境についての考察をまとめると、以下の表 32 の通りである。

表 32 「質疑応答時」における「アノー」の代表的な五つの使用環境

使用環境	「エート」に置き換えられるか
(一) 質問する時に用いられる	不可
(二) 言い直しの時	可（異なるニュアンスが生じる）
(三) 自分の意見・考えを述べる前に	不可
(四) 例を挙げる前に	可（異なるニュアンスが生じる）
(五) 適切な表現を検索する時	可（異なるニュアンスが生じる）

6.2.3 「原稿説明時」の「エート」と「質疑応答時」の「アノー」に関する考察のまとめ
 まず、表 31 の「エート」の七つの使用環境の中にある、「エート」しか使用できない場合と、表 32 の「アノー」の五つの使用環境の中にある、「アノー」しか使用できない場合を抽出し、表 33 にまとめる。それぞれどのような特徴があるか考察する。

表 33 「アノー」しか使用できない場合と「エート」しか使用できない場合の比較

「アノー」しか使用できない場合	「エート」しか使用できない場合
・ 質問する時に用いられる	・ 数字または英語の表記の前
・ 自分の意見・考えを述べる前に	・ 難しい読み方の前
	・ 段落またはページの変わり目
	・ 独り言の前
	・ 息継ぎの間を埋める場合

表 33 からは、「アノー」が使用される環境は、「質問する」や「自分の意見・考えを述べる」など、誰かに向かって発言しているということが想像できる。一方、「エート」は「独り言の前」でも使用できるため、誰かに向かって発信しているのではなく、話し手の内言的態度を表出しているものであると考えられる。「アノー」は「エート」より「対人的な機能」が強いということが窺える。小出（2006）では、「アノー」は指示詞の「あの」から「対人的な機能」を引き受けたと述べおり、今回の調査で得られた結果はその指摘と一致している。さらに、「アノー」と「エート」を比較した結果、「エート」は「対人的な機能が比較的弱い」ということを新たに発見できた。そして、「エート」にしか使用できない場合

の中に、「難しい読み方の前」という状況があることから、「難しいと感じる時」に「エート」が使用される傾向があると言えよう。高木・森田（2015）では、『『ええと』を産出することにより、今自分に当てられたその質問に応答するには、ある難しさを伴うが、それでも、応答の産出に最大限に務めるという主張を受け手に示すことができる。そのような機能は「あの（-）が持っていない」と述べている。その結果は、高木・森田（2015）では、質問に対する反応の開始部分に現れる「エート」に焦点を当てて考察して得たものであるが、本研究での「原稿説明時」の談話においても一致した結果が確認されたと言えよう。さらに、「エート」は「段落またはページの変わり目」、「息継ぎの間を埋める場合」に現れる結果も確認できたため、「エート」は「沈黙の間を埋める」機能も持っているものだと考えられるだろう。

次に、「アノー」と「エート」の互いに置き換えられるが、ニュアンスが生じる状況について考察する。表 31 と表 32 の置き換えられる使用環境をまとめて、以下の表 34 に示す。

表 34 「アノー」と「エート」が互いに置き換えられる使用環境

「アノー」		「エート」	
使用環境	「エート」に置き換えられた場合のニュアンス	使用環境	「アノー」に置き換えられた場合のニュアンス
・言い直しの時	次の言葉をまだ考え中	・誤植などのミスを伝える時	注意して聞いてほしい
・例を挙げる前に	例をまだ考え中	・発表原稿に書いてないことを言う時に	注意して聞いてほしい
・適切な表現を検索する時	次に話す内容を検索中		

表 34 から見ると、「アノー」の適切な表現を検索する時の場合において、「エート」に置き換えると、「話す内容を検索中」という意味合いが生まれる。田窪・金水（1997）で述べられている、「アノー」は「形式検索」、「エート」は「内容検索」をする時に用いられるという指摘をより実証的に裏付けた。さらに、「アノー」を「エート」に置き換えると、「まだ考え中」の意味が生まれ、「エート」を「アノー」に置き換えると、「注意して聞いてほしい」という意味が生まれることから、「エート」は「時間稼ぎ」の機能の方が、「アノー」は「注意喚起」の機能の方が強いと考えられるだろう。その点に関して、前述した「アノ

ー」は「エート」より対人的機能が強いという指摘と一致している。

ここまでをまとめると、今回の「アノー」と「エート」の機能における考察を通じて、「アノー」と「エート」との間に、以下の a、b、c のような違いが存在することが確認できた。

a「アノー」は「エート」より「対人的機能」が強い。「エート」は独り言の時にも使用できるが、「アノー」は独り言の時には使いにくく、聞き手がいる状況にしか使用できない。

b「アノー」は「形式検索」の時に使用されやすい一方、「エート」は「内容検索」の時に使用されやすい。即ち、「すでに頭にあることを言う時」には「アノー」を、「まだ思いついてないことを言う時」には「エート」を使用する。

c「エート」は難しさを感じた場合、その主張を受け手に示す機能を持っている。「アノー」にはその機能を持っていない。

今回の調査において、「アノー」と「エート」のそれぞれの出現環境を比較することを通じて、「アノー」は「エート」より対人的機能が強く、独り言では使いにくいということが量的な結果^⑩をもってより実証的に示すことができた。なお、本研究で確認された上記 a、b、c の結果は、いずれもすでに先行研究でも指摘されていることであり、本研究がそれらを実証的に裏付ける結果となった。

^⑩ 管見の限り、「アノー」は「質疑応答時」に多く、「エート」は「原稿説明時」に多い。

終章 研究の成果と今後の課題

本研究の成果としては以下の三点を挙げられる。

まず一点目は、従来のフィラー研究の対象とされてこなかったゼミナールというややフォーマルな談話形式におけるフィラーの使用実態について考察したことである。本稿では、ゼミナールの談話を、発表者による発表原稿を説明する時の「原稿説明時」と、発表者と参加者が質疑応答する時の「質疑応答時」に分けて考察を行った。「原稿説明時」と「質疑応答時」との二つの談話スタイルに使用されるフィラーを、「男女における使用差」および「日本語母語話者と中国人日本語学習者における使用差」という二つの視点から、量的な面から分析した。結果として、主に以下の三点が確認できた。

- ① 日本語母語話者も中国人日本語学習者も、そして男女問わず、「原稿説明時」は「エート型」を、「質疑応答時」は「アノー系」を多用している。
- ② 性差において、原稿説明時の場合は、日本語母語話者も中国人日本語学習者も、男性は「エ系」を、女性は「エート型」を多用している。質疑応答時の場合は、日本語母語話者の男性は「マー型」、「ハイ型」、「エ系」を、女性は「エート型」、「ア系」、「ナンカ型」を多用している。
- ③ 中国人日本語学習者と日本語母語話者の使用しているフィラーを比較したところ、中国人日本語学習者は日本語母語話者より、「フィラーの使用頻度が低い」、「使用するフィラーの種類が少ない」という二つの特徴が見られた。さらに、日本語母語話者は「マー型」のフィラーを、中国人日本語学習者は「エート型」、「コノ・ソノ・アノ系」と「ナンカ型」を多用しているという傾向も見られた。なお、中国人日本語学習者に多用されている「エート型」、「コノ系」、「ソノ・アノ系」と「ナンカ型」のフィラーは中国語にもそれらに対応するフィラーが存在するということが確認された。つまり、中国人日本語学習者のフィラー使用の背景には、母語の干渉を受けている点を指摘できる。

二点目はゼミナールの発話におけるフィラーの機能を、「役割」と「出現位置」との二つの視点から考察したことである。なお、この場合においても、日本語母語話者と中国人日本語学習者に分けて、それぞれの結果を分析した。結果として、フィラーは「役割」と「出現位置」によって機能が変わってくるということが確認できた。なお、中国人日本語学習者には、言葉や文を「ぼかす」機能を持つフィラーを多用している傾向が見られた。

三点目は「アノー」と「エート」の違いに関しては、二語のそれぞれの使用環境について考察し比較した結果、「アノー」は「エート」より対人的機能が強く、独り言では使いにくいということを量的な結果に基づいて実証的に示すことができた。

今後の課題として、まず同じ型のフィラーのバリエーションについての考察を深めるこ

とを挙げられる。例えば、「エート型」には「エト」、「エット」、「エトー」、「エート」、「エートネ」とのバリエーションがあり、それぞれのバリエーションによる機能の違いについて考察する必要がある。また、本研究の男女差についての考察においては、以下の二点を今後の課題として挙げられる。一点目は、男女の人数がアンバランスな点である。二点目は、質疑応答時においてのみであるが、ゼミの指導者である J1 のフィラー使用数と立場の異なる学生の男性のフィラー使用数とを合計し、考察した点である。女性の参加者は、原稿説明時、質疑応答時共に全員学生であったため、男性の参加者も全員学生で統一したほうがより適切に比較できるのではないかと考えたが、今回は男性の参加者の人数が女性より少なく、J1 の使用するフィラー数を除外すると、学生の男性のフィラー使用数が極めて少なかったため、指導教員 J1 のフィラー使用数も加えて考察せざるを得なかった。今後は、分析対象としての男女の人数のバランスを考慮し、男女差についてより深く考察したく考えている。

謝辞

本論文執筆にあたり、余健先生にはきめ細かなご指導を賜り、心から感謝申し上げます。また、三重大学教育学部日本語学ゼミナールの参加者の方々は録音のご協力を快くいただいたことに、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

参考引用文献

- 石川創 (2009) 「あいづちとの比較によるフィラーの機能分析」『早稲田日本語研究』(2010)
早稲田大学日本語学会
- 上田有希子 (2004) 「話しことばの位相—会話におけるフィラーの研究—」『東京女子大学
日本文学 101』43 号-5
- 梅林博人 (1993) 「言いよどみ語と留学生への日本語指導」『千葉大学留学生センター紀要』
- 川上恭子 (1993) 談話における「まあ」の用法と機能 (一) —応答型用法の分類『園田国
文』14 園田学園女子短期大学国文学会
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』くろしお出版
- 桑原武夫 (1952) 「エーということ」『言語生活』第 8 号
- 小出慶一 (1983) 「言いよどみ」水谷修編『話しことばの表現』(講座日本語の表現 3) 筑摩
書房
- 小出慶一 (2006) 「フィラー『このー』『そのー』『あのー』について—その由来、機能、
相互関係」『埼玉大学紀要教養学部 42(2)』埼玉大学教養学部
- 小出慶一 (2007) 「フィラー化の様相—『まあ』の場合—」『埼玉大学紀要教養学部 42-2』43
号-5
- 小出慶一 (2009) 「現代日本語の意味・用法の広がりに関する記述的研究—多機能化、フィ
ラー、フィラー化」『日本アジア研究』第 6 号
- 黄佳瑩 (2004) 「日本人中国語学習者のフィラー使用の考察—遠隔接触場面を中心に—」
森泰吉郎記念研究振興基金報告書 2004 年度
- 国立国語研究所 (1955) 『談話語の実態』国立国語研究所報告 8 秀英出版
- 国立国語研究所 (1960) 『話し言葉の文型 (1) —対話資料による研究—』国立国語研究所
報告 18 秀英出版
- 国立国語研究所 (1963) 『話し言葉の文型 (2) —独話資料による研究—』国立国語研究所
報告 23 秀英出版
- 小林美恵子 (1996) 「高校生の断定回避表現—「話し合い」の談話を中心に—」『ことば』第
17 号 現代日本語研究会
- 小林美恵子 (2011) 「授業談話データベースによる実態調査—フィラーの様相—」『ことば：
女性による研究誌』第 32 号 現代日本語研究会
- 呉秦芳 (2006) 「『フィラー』形式に見る日本人母語話者の会話管理—『日本語話し言葉コー
パス (CSJ)』の『対談場面分析を通して—』日本語言語学会ニダバ 35 43 号
-5
- ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろし
お出版
- 塩沢孝子 (1997) 「日本語の Hesitation に関する—考察」F.C. パン編『社会言語学シリーズ
No. 2 言葉の諸相』文化評論出版社
- 高木智世・森田笑 (2015) 「『ええと』によって開始される応答」社会言語学第 18 巻第 1 号
- 高村めぐみ (2012) 「日本語学習者のインタビューでの発話におけるポーズとフィラーの特
徴」『比較文学研究』日本比較文学学会

- 田中敏 (1993) 「休止の意味論」『月刊言語』22-8 大修館書店
- 田中敏 (1995) 『スピーチの言語心理学モデル—音声の生産と意味処理の関係の実証的検討』
風間書房
- 中島悦子 (2008) 「自然談話に現れるフィラー—自然談話録音資料に基づいて」Asia Japan
journal 国士舘大学アジア・日本研究センター
- 奈倉俊江 (1997) “Hesitations(Discourse Markers) in Japanese”『世界の日本語教育』
7
- 西坂仰 (1999) 「会話分析の練習—相互行為の資源としての言いよどみ」『会話分析への招
待』世界思想社
- 野村美穂子 (1996) 「大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語—『フィラー』
に注目して」『教育研究所紀要第5号』文教大学附属教育研究所
- 松浦和美 (1996) 「日本語の談話における filler に関する研究」中国四国教育学会教育学
研究紀要第42巻第2部
- 宮永愛子・大浜るい子 (2011) 「道教え談話におけるフィラーの働き—『あの』に注目して
—」『日本語教育』(149)日本語教育学会
- 山根智恵 (1997b) 「話しことばにおけるフィラー—留守番電話と電話の会話資料をもとに
—」『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
- 山下暁美 (1990) 「話しことばにおけるいわゆる無意味語」『講座日本語教育』第25冊分
- 李麗燕 (2000) 『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究』くろしお出版
- 渡辺美知子他 (2006) 「音声聴取り時のフィラーの働き—『エート』による後続句の複雑さ
予測—」『日本音響学会誌』62-5 43号-5
- Levinson, S. C (1983) Pragmatics. Cambridge: Cambridge University Press (安井稔・奥田
夏子訳 1990 『英語語用論』研究社)

添付資料 1：各種類のフィラーの使用例

各種類のフィラーの使用例を 2 例ずつ列挙した。しかし、一例しかないものは一例のみを載せる。

一、「ア」

その一：(⑤-191)

J13: いや、言わないです。

J1: ア、それ言えないんですか。

その二：(③-31)

J1: どう、どういう使い方するんですか。

J5: ア、でも、持てきないとか。

二、「アッ」

その一：(③-13)

J5: 会話の中では、ウーント、マー、動詞かな、このキャベツはもうはなさきやなあって。

J11: アッ、もうそのままです。

その二：(⑥-27)

C2: ならないんですか。

J1: ならないんです。

C2: アッ、今計算してみます。

三、「アー」

その一：(⑥-10)

C2: アッ、たぶんそれはあの一が、なんて言う、絶対が聞き手への働きのないフィラーではなくて、その場合が聞き手への働きのない、その場合は聞き手への働き場合がある。

J10: アー、シチュエーションによって違うってこと。

その二：(④-2)

J1: エト、談話資料の、せっかくなので、アノー、マー、今回焦点は、アー、イ音便、サ行イ音便化ということで、ソノー、出ている、例のところ、マー、後ろの方に出ているんですけど、ちょっと、主なところの紹介というか、していただけたらと思います。

四、「アー」

その一：(⑩-79)

J1: マー、5 例しかない、[笑い]、ちょっとあまりにも例が少なすぎて、ちょっと他のマー、例えば、マー、b も 9 例ですけど、コノー、(はいはいはい)、聞いてくださいていうのが、もちろん、聞いてください、日本語としても自然な感じがしますが、アノー、例えば、我跟你口、あなたにいいです、ちょっと言いたいん、ちょっとあなたにいいたいんですけど、そんな感じですかね。

C5: エー、ネットで、ネットで。

その二：(⑩-87)

J1: アノー、出発段階はいいんですけど、焦点は絞った方がいいですよ、ウン、やっぱたくさん出ている、例えば c、ウーン、ウーン、知っているなんか、日本語でもよくある表現だし、ウン、で、告口你はね、漢字で見てもあなたを告訴します、漢字から見ても、つ、強い、意味がね。

C5: 普通の時も使えるし、強い意味の、例えばけんとか、言っとくけどみたいな。

五、「エッ」

その一：(⑩-79)

J15: 蟹江はたぶん凄く使うと思います。友達はほとんどがね。

J1: エッ、J10 さんは。

J10: 私は使わないんですけど、祖母は分らないです。あんまり話さないの。

その二：(⑩-87)

J1: エッ、レタス？表 1 の？

J5: 表、アッ、資料 6 の方に、のはなさきの 10 番のレタスにまるがついてないんですけど、まるをしてほしいです。

六、「エー」

その一：(④-1)

J2: ありがとうございます。エー、では、まず、エー、J6 さんの発表の途中でもあったんですけど、エー、言葉の訂正だったり、語の意味についての疑問など、ありましたら、ある方いらっしゃいますか。《沈黙 20 秒》

その二：(⑩-79)

J1: マー、5 例しかない、[笑い]、ちょっとあまりにも例が少なすぎて、ちょっと他のマー、例えば、マー、b も 9 例ですけど、コノー、(はいはいはい)、聞いてくださいっていうのが、もちろん、聞いてください、日本語としても自然な感じがしますが、アノー、例えば、我跟你口、あなたにいいます、ちょっと言いたいん、ちょっとあなたにいいたいんですけど、そんな感じですかね。

C5: エー、ネットで、ネットで。

七、「オー」

その一：(⑤-164)

J1: オー、喜ぶやわって言いますか。

J5: 喜ぶやわ、オー。

その二：(⑦-265)

J1: 今のところは、日本人のネイティブの人、日本のネイティブの人を対象に、メインに。

C3: オー、はい。

八、「コノ」

その一：(④-153)

J3: はい、はい、マーせっかくなんで、さ、サ行のイ音便のことを、コノ、よ、4 ページの有対他動詞、の分類が分らないです。これって、具体的な動詞って挙げられてるんですか、資料では。

その二：(④-180)

J1: NHK のデータも、コノー、ね、コノ、ここの近所ということで、そこでしゃべる時にはまったく出て来なかったってことは、やっぱり、そういう、アノー、文体、文体じゃないんですけど、やっぱり、ソノー、改まってね、NHK の録音、録音ですって言うと、これ完全な自然な会話、そこの違いでね。マー文体、ネ、J5 さんも文体、いわゆる文体っていう語かなり幅広い。《沈黙 15 秒》

九、「コノー」

その一：(④-180)

J1:NHK のデータも、コノー、ね、コノ、ここの近所ということで、そこでしゃべる時にはまったく出て来なかったってことは、やっぱり、そういう、アノー、文体、文体じゃないんですけど、やっぱり、ソノー、改まってね、NHK の録音、録音ですって言うと、これ完全な自然な会話、そこの違いでね。文体のちょっと、せんしんせいとか、マー、ちょっと、マーこの辺解釈もナンカ、ウン。マー文体、ネ、J5 さんも文体、いわゆる文体っていう語かなり幅広い。《沈黙 15 秒》

その二：(④-9)

J1:アノー、マー、アノー、実際、卒論の中では、アノー、マー、今先行研究もあるので、マー、コノー、談話調査だけ、これは、エッ、今のところ、全体でしたっけ。

十、「ソノ」

その一：(④-44)

J1:ちょっと、ウン、確かに、その辺がちょっと、音声資料がないんで、この書き言葉上で見るしかないっていうのはちょっとつらいところもあるんですけど、マー、一つ本来的にいうと、ソノ、マー、明らかに、東日本の東京方言下町の言葉なんかにくと、促音便化が多いんで、ウーン、もって置いてねみたい、ウン、促音便化多いですね、ウン。《沈黙 5 秒》

その二：(④-86)

J1:のすごく、アノー、ば、たくさん出てる場合は、ソノ、エート、A 君もそうでしたけど、アノー、積み重ね、ここの地域の、アノー、ケーススタディーとして、そのかわり、こう、アノー、かなり深く、一人に焦点を当てて、もう、ウン、ひとも、エー、一文字も落とさないぐらい、全体的な形、ハイ。もしアクセント、音声、音声的なアクセントが行けるとかね、ソノー、マーイ音便はありましたけど、出てますよね、促音も。一人に焦点を当てたら、こう深い考察ですよ。それもケーススタディーとしてあり得ると思います。《沈黙 8 秒》

十一、「ソノー」

その一：(①-28)

J3: はい、内容についてで、(はい)、今回の、調査結果の場合、10代20代と、40代50代の、マー、比較、(そうです、はい)、なると思うんですけど、エート、ソノー、有意差が出たという場合は、ソノー、使ってる使っていないっていう有意差ですよ。

その二：(①-31)

J2: はい、ソノー、エー、難しい、簡単に、例えば、7ページ見てもらいますかね。(はい)、で、ソノー、いろいろ標準誤差とかがあって、ただの平均値の数値の差だけではないんですよ、有意差が出る出ないっていうのは、エー、ちょっと複雑なんですけど、エー、基本は、マー、平均差、平均値による差ですね、すみません、何言ってるか分からないですよ。[笑い]

十二、「ソノー」

その一：(④-96)

J6: けど、これは、アノー、今からとるからしゃべって取ったわけじゃないんで、無言の期間もあるし、っていうふうで、ソノー、アノ、なん、なんだろう、ちゃんとしたやつじゃないんですけど。

十三、「アノ」

その一：(④-96)

J6: けど、これは、アノー、今からとるからしゃべって取ったわけじゃないんで、無言の期間もあるし、っていうふうで、ソノー、アノ、なん、なんだろう、ちゃんとしたやつじゃないんですけど。

その二：(④-94)

J6: はい、のせてないところもある。けど、これは、アノー、今からとるからしゃべって取ったわけじゃないんで、無言の期間もあるし、っていうふうで、ソノー、アノ、なん、なんだろう、ちゃんとしたやつじゃないんですけど。

十四、「アノー」

その一：(③-2)

J14: エート（どうぞ）、発表お疲れ様でした。エトー、1点をはなさきの考察の方で、結球葉菜類ですか（はい）って書いてありますが、これ結球性葉菜類じゃないんですか。アノー、アンケート表5のアンケートのッ署名は非結球性葉菜類になっているんですけど、その下は葉菜類になってるので、エト、性かあった方がいいのかなかった方がいいのかちょっと気になります。考察の方では、非結球性、性があったりなかったりするんで、すごい細かいことで申し訳ないですけど。

その二：(①-32)

J2: はい、ソノー、エー、難しい、簡単に、例えば、7ページ見てもらいますかね。（はい）、で、ソノー、いろいろ標準誤差とかがあって、ただの平均値の数値の差だけではないんですよ、有意差が出る出ないっていうのは、エー、ちょっと複雑なんですけど、エー、基本は、マー、平均差、平均値による差ですね、すみません、何言ってるか分からないですよ。[笑い]

J3: アノー、エート、僕がお尋ねしたいのは、その平均値っていうのは、<たぶん>[>]

十五、「アノー」

その一：(⑩-79)

J1: マー、5例しかない、[笑い]、ちょっとあまりにも例が少なすぎて、ちょっと他のマー、例えば、マー、bも9例ですけど、コノー、（はいはいはい）、聞いてくださいっていうのが、もちろん、聞いてください、日本語としても自然な感じがしますが、アノー、例えば、我跟你口、あなたにいいです、ちょっと言いたいん、ちょっとあなたにいいたいんですけど、そんな感じですかね。

その二：(⑩-87)

J1: アノー、出発段階はいいんですけど、焦点は絞った方がいいですよ、ウン、やっぱりたくさん出ている、例えばc、ウーン、ウーン、知っているなんか、日本語でもよくある表現だし、ウン、で、告口你はね、漢字で見てもあなたを告訴します、漢字から見ても、つ、強い、意味がね。

十六、「アノネ」

その一：(⑧-233)

J1:ちょっと怪しいけど、あの人こう歩いてて、撮影しているから、小学生とかにね、お疲れ様とか言われて、お疲れ様は目上の人に言えないんだぞって、で、その後ちょっとネットで話題になってたみたいんですけど、もしかしたら地域によっては。お疲れ様は言いますよね、日本語の感覚として、どっちでも。ご苦労様はは、ご苦労様はね、基本的に目下の人に見たいんだよね。言ったらだめって言うか、マー、宅急便とか、商売関係だったら、アノー、ご苦労様も、客と、もてなす側だったら使えます。マー、ちょっと対象する、アノネ、アノー、先週の、アノー、基本的に違うので、共通する場合も、違う場合も、共通する用語としてね、マー、一つとして、接頭辞というのがありましたけど、4ページね、それと同じように、ひょう、表現ね、時間があれば、文型としての、マー、マー、辛苦了と共通しているとのことで。[沈黙 24 秒]

十七、「アノデスネ」

その一：(⑥-171)

J1:これもしよかったら、アノデスネ、たんこ、あのなのか、あの一なのか。

十八、「ユー」

その一：(④-15)

J1:でている、出ているところは9、10、11（はい、そうです）、のところだけ。実際は、アノー、実際はあれですよ、アノー、考察のところで、こう本文の中にこう持ってきて、エー、で、ちょっとすぐに分かるように、ユー、アノ、太打ちにするとか、下線を引いたりするとかですね。ぱっと目に付くような形で、後ろに出す時も、ポイントのところは、マー、ユー、すぐに分かるように、最終的にはですね、はい。そうすると、考察しやすくなるかもしれないですね。《沈黙 9 秒》

その二：(④-78)

J6:あの人それが言っていて、もともと、ユー、音便化は、労力軽減現象みたいなこと言っとて、それだったらなおさらどうして戻ったのかなと思って調べて、一回その時代があったんなら、なんで逆に今度言わなくなってたかなっていうので、調べました。ありがとうございます。

十九、「ソー」

その一：(④-120)

J2: 個人情報あれですよ。

J6: ソー、だから、話の内容をしばった方がいいかな、本当は、すごい、愚痴とかも出てきて。[笑い出した]

その二：(④-122)

J2: じい、じいちゃんが。

J6: ソー、なので、ちょっと、対象を、対象者がちょっと悪いかなとおもうんですけど。

二十、「エト」

その一：(④-2)

J1: エト、談話資料の、せっかくなので、アノー、マー、今回焦点は、アー、イ音便、サ行イ音便化ということで、ソノー、出ている、例のところ、マー、後ろの方に出ているんですけど、ちょっと、主なところの紹介というか、していただけたらと思います。

その二：(③-2)

J14: エート（どうぞ）、発表お疲れ様でした。エトー、1点をはなさきの考察の方で、結球葉菜類ですか（はい）って書いてありますが、これ結球性葉菜類じゃないんですか。アノー、アンケート表5のアンケートのツ署名は非結球性葉菜類になっているんですけど、その下は葉菜類になっているので、エト、性かあった方がいいのかなかった方がいいのかちょっと気になります。考察の方では、非結球性、性があったりなかったりするんで、すごい細かいことで申し訳ないですけど。

二十一、「エット」

その一：(④-5)

J6: アー、エット、最初の方は全然なくて、エート、9ページ、ソノー、カギ括弧がついているところの、あの辺からなんですけど、壊した、エー、あっ、エー、資料の9ページなんですけど、9ページの壊した。で、エー、Aの40、オオノガウチヲコワイタモン、っていうのが、「壊した」のイ音便形「こわいた」がそこに出てます。《沈黙5秒》

その二：(④-51)

J3: 発表お疲れ様でした。エツト、一つはちょっと引用部分なんですけど、言葉がわからないところ、ごめんなさい、このままの方がよかったかもしれないですけど、2ページの、ト、言わせてと言わしての比較の際に、ニュアンスの問題で、書記言語的になっていうのは分かるんですけど、高等言語的なニュアンスっていうのは、それは。

二十二、「エト一」

その一：(①-101)

J3: エト一、例えば、例えば、マー、ピンクいが、ピンク以外言うだろうと実際に思っていて、で、実際に言うっていう結果が出たとして、それがいいじゃないんですか。(はい)、それで、言わない、絶対若い方が言うだろうと思ったのに、<老年層の方が>[>]

その二：(③-2)

J14: エート (どうぞ)、発表お疲れ様でした。エト一、1点をはなさきの考察の方で、結球葉菜類ですか(はい)って書いてありますが、これ結球性葉菜類じゃないんですか。アノー、アンケート表5のアンケートのツ署名は非結球性葉菜類になっているんですけど、その下は葉菜類になってるので、エト、性かあった方がいいのかなかった方がいいのかちょっと気になります。考察の方では、非結球性、性があったりなかったりするんで、すごい細かいことで申し訳ないですけど。

二十三、「エート」

その一：(①-6)

J3: アノー、(はい)、誤字脱字とか言った方がいいかなと思って、(はい)、ナンカ、エート、2の研究手順の、2の1語彙リストの作成の部分で、(はい)、エート、3行目の親密は親密度ではなくて、親密でいいですか、これは。文字音声単語の。

その二：(①-8)

J3: はい、分かりました。その後の括弧の部分はエントリー数はのところで語ってなしでもいいですか、88569。

J2: エート、これもそのまま引用した形なんで。

二十四、「エートネ」

その一：(①-90)

J1: うん、アノー、まずちょっと全体、エート、マー、最初にちょっと部分部分によりますけど、その全体っていうのは、この全項目の全世代のなかで、エー、例えば、次の、黄いですね。11、12、13ページの、で、エー、ペアごとに関係ほとんど出てると思うんですけど、で、それで、抱括検定の多変量検定、だから、抱括検定のF検定、いろんな種類のF検定、有意確率見てもらおうと0.015なんで、この以下ですね。で、この場合は、アノー、シダック法、事前検定の一種のシダック法でもたくさん見られるし、エー、全体の抱括検定のF検定でもこの有意差は認められる。っていうことになります。エートネ、アノー、だから、単純に平均値、ちょっと僕も全部、全部数学的なものに、全部説明できないんですけど、マー、そこを、今何時でしたっけ。

二十五、「マー」

その一：(①-2)

J3: 発表ありがとうございました。アノー、質問っていうか、まずはもうこの、マー、文章をそのまま、卒論に使っていきますか。

その二：(①-31)

J2: はい、ソノー、エー、難しい、簡単に、例えば、7ページ見てもらいますかね。(はい)、で、ソノー、いろいろ標準語差とかがあって、ただの平均値の数値の差だけではないんですよ、有意差が出る出ないっていうのは、エー、ちょっと複雑なんですけど、エー、基本は、マー、平均差、平均値による差ですね、すみません、何言ってるか分からないですよ。[笑い]

二十六、「ト」

その一：(②-22)

J2: (前略) ソノー、調査項目というか、ソノー、どういうふうに予備調査されたのかなということと、ソノー、項目があるんじゃないんですか。例えば、ソノー、エー、ま、面談での調査だと思うんですけど、例えば、家がこぼちます。こぼつ、こぼちますか、ってこと？っていう項目があるんですか。家だったり、マンションだったり(うん)、それどんな感じとったのと、後40代の使用の範囲が限定的だったというところでもう少し、どんな感じで見られたのかを御聞きしたいです。

J4: ト、一つ目、調査項目。

その二：(⑧-5)

J11: 発表ありがとうございました。上、ちょっと、確認みたいになっちゃうんですけど、1 ページ目のまる 1 番、敬語全体的な比較の 3 行目、中国語にはそれに対応できる「表敬語」、「表謙語」があるがって書いてあるんですけど、それって、コノー、敬語全体のことなんですか。

二十七、「トー」

その一：(④-20)

J2: ほかにある方、いらっしゃいますか。じゃ、はい、いいですか。

J6: はい。

J2: トー、3 ページの下だけなんですけど、シラビーム言語後期っていうのは、なんですか。シラビーム方言とかちょっと聞いたことあるなと思ったんですけど、ソノー、これについて、なんかありますか。

その二：(⑥-8)

J10: アー、トー、ちょっと関連して聞くんですけど、最後の方で聞き手のにとって意味のあるし、しつ、7 ページにある聞き手に対する働きかけのあるフィラーについてってところなんですけど、(はい)、聞き手への働きのあるフィラーと聞き手への働きの無いフィラーで、えーと、あの一、どっちもえーともあの一も聞き手への働きの無いフィラーとして扱われてるんですけど、(はい)、これは、えーと、えーとだと働きの無いのが分かるんですか、あの一あのおはさっき聞き手への働きのあるってさっきになっていたんと思うんですけど、それはどうなってるんですか。

二十八、「ウント」

その一：(④-59)

J6: 例えば、ウント、[名字]先生と相談した時にも、エート、話ししてたんですけど、否定の時に、私は、例えば 2 ページの A8、マークルマガナケナマードッコモカイモノ二モイケラヘンモンナアってあるんですけど、私は、行けないだったら、いけんとか、マー、行かないだったら、いかんとか使うんですけど、で、A、ここの A は、エット、イケラヘンって言ってるから、そういうのに着目するとか、ウーン、マー、でも、ウーン。《沈黙 8 秒》

その二：(④-151)

J6: うんうんしか言えないです。[みんな笑い出した]

J4: やっぱ、笑われて、ウント。

二十九、「ウント」

その一：(②-40)

J3: ソノー、例えば、ウント、エート、その仮説があって、アンケートで、こう明らかにしていくと思うんですけど、ソノー、親密性は高く、アッ、その一つ一つの項目の言う言わないで、見てるじゃないんですか。その設定が。さっきがけっこう親密性っていうのが、エート、あるから、もしかしたら、マー、東京スカイツリーを入れた、入れることで、親密じゃないものと親密のものを区別ができるっていうことだったと思うんですけど、たとえば、コノー、平ら、四角い、平らとか、四角いっていうの、その形状とか、あと、神仏、マー、神仏かどうかたぶん分かるんじゃないんですか、ソノー、関わってるの、ソノー、それ以外の変数をそろえるのはなんか、むずかしいなっていうふうに。

その二：(②-103)

J3: エト、さっきの、自然、自然と人口の対比で挙げた例で、蜂の巣とありの巣と、ウント、蜂の巣、ありの巣。

三十、「ウン」

その一：(③-56)

J1: アー、アノー、なんでしたっけ、キャベツとかの球形を大台町では作ってない。

J5: ウン、たぶん大台町も作ってないし、宮川も作ってない。

その二：(③-140)

J14: おじいちゃんのじんのどういうもんですか。

J1: ウン、僕が最初に長野の方で、おじいちゃんがそうじゃんとか。

三十一、「ウン」

その一：(①-48)

J1: だから、ウン、だから、そのはちょっと、ほら、普通使うとしたら、数値が大きいかな。

その二：(④-40)

J1: マーそうですね、ウン 《沈黙 8 秒》

三十二、「ハイ」

その一：(④-86)

J1: ウン、マー、アノー、なんで、ソノー、60 分、マーい、一名でも、ものすごく、アノー、ば、たくさん出てる場合は、ソノ、エート、A 君もそうでしたけど、アノー、積み重ね、ここの地域の、アノー、ケーススタディーとして、そのかわり、こう、アノー、かなり深く、一人に焦点を当てて、もう、ウン、ひとも、エー、一文字も落とさないぐらい、全体的な形、ハイ。もしアクセント、音声、音声的なアクセントが行けるとかね、ソノー、マーイ音便はありましたけど、出てますよね、促音も。一人に焦点を当てたら、こう深い考察ですよね。それもケーススタディーとしてあり得ると思います。《沈黙 8 秒》

三十三、「ナンカ」

その一：(①-6)

J3: アノー、(はい)、誤字脱字とか言った方がいいかなと思って、(はい)、ナンカ、エート、2 の研究手順の、2 の 1 語彙リストの作成の部分で、(はい)、エート、3 行目の親密は親密度ではなくて、親密でいいですか、これは。文字音声単語の。

その二：(⑤-126)

J1: マー、そういう可能性もある。ナンカ、他方言、伊勢とか、明らかい他方言の人に、同級生でも、いきなりやっぱり座る、座るやとか。

三十四、「ネ」

その一：(⑥-232)

J1: しゃしゃ、社会になると、やっぱ社会になると、そういう、ネ、データとか地図とかですけど、そういう視覚とかのね、国語だと、文字、文字がメインで、だからそういう教材の違いがあるかもしれない。

三十五、「ネー」

その一：(⑥-175)

J1: それも、たくさん聞いて、ネー、C 2 さんの一貫した基準に従うしかないんですよね。

その二：(⑥-195)

J1: マー、おおよそどうだろう、3段階ですよ、ちょっと伸ばしてる段階と大きく伸ばしてる、ネー、長くかなり伸ばしてる、ウン、確かに、等時的に捉えるのがちょっと難しいかもね、この3分類で分けて違いが出れば、また考察の材料になるかもしれないですね。

添付資料 2：総発話数の内訳

表 I：総発話数の内訳

表 I：総発話数の内訳

録音番号 発話者	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	合計
J1	40	53	80	63	83	75	81	105	61	64	705
J2	49	8									57
J3	35	50									85
J4	5	127		5							137
J5		7	84		18		29			6	144
J6			67								67
J7		11	10		13	7	4		4	1	50
J8			1		2	4		9			16
J9		9		6					5		20
J10		4	13		3	5					25
J11		6	14	6	7	8					41
J12		17	10	19	15	10	8	9	3	9	100
J13			4	22	86						112
J14			18		13	5		9			45
J15			3		9						12
J16			3			21		1	9		34
J17			2		7						9
J18					25						25
C1						1					1
C2			17		11	105	38	55		6	232
C3							73	86	9	5	173
C4							8				8
C5			2		2	4	13	39	69	81	210
合計	129	292	261	188	294	245	254	313	160	172	2308

添付資料 3：役割によるフィラーの使用実態

- ・表Ⅱ 役割によるフィラーの使用実態
- ・表Ⅲ 役割によるフィラーの使用実態（型別）

表Ⅱ 役割によるフィラーの使用実態

型	フィラー	発表者1	発表者2	参加者1	参加者2	参加者3	合計
母音型	ア	2	5	7	2		16
	アッ	11	13	27	17		68
	アー		23	51	43	5	122
	アーー				1		1
	エッ		1	5			6
	エー	28	7	70	15	3	123
	オー	3		1	2	1	7
コソア型	コノ			2	2		4
	コノー	4	48	44	18	8	122
	ソノ			3		1	4
	ソノー	18	20	70	57	8	173
	ソノーー	1					1
	アノ	3	1	8	3		15
	アノー	23	55	355	52	18	503
	アノーー			2			2
	アノネ			1			1
	アノーデスネ		1				1
型ソコ	コー	1		16			17
	ソー	2					2
エート型	エト	4		3	15	1	23
	エット	5			10		15
	エトー		2	3	21	5	31
	エート	17	41	30	35	10	133
	エートネ			1			1
マー型	マー	65	9	336	28	1	439
ン型	ト	1			1		2
	トー		1	1	4		6
	ウント	2			2		4
	ウーント	1			1		2
	ウーン	8	5	12	7	1	33
型ハイ	ウン	6		114	2		122
	ハイ			1			1
ナンカ型	ナンカ	4	22	16	25	10	77
型ネ	ネ			10			10
	ネー			2			2
合計①		209	254	1191	363	72	2089
総発話数		409	414	705	570	210	2308
一発話のフィラー数		0.51	0.61	1.69	0.64	0.34	0.91

注：①発表者 1（日本語母語話者）、発表者 2(中国人日本語学習者)、参加者 1(先生：J1 のみを扱う) 参加者 2(発表者以外の日本語を母語とする学生)、参加者 3（発表者以外の中国人日本語学習者）

②以下の「表Ⅲ、役割によるフィラーの使用実態（型別）」の中の情報も表Ⅱと同じ意味をしている。

表Ⅲ 役割によるフィラーの使用実態（型別）

型	役割 フィラー	発表者 1	発表者 2	参加者 1	参加者 2	参加者 3	合計
母音型	ア系	13	41	85	63	5	207
	エ系	28	8	75	15	3	129
	オ系	3		1	2	1	7
コソア型	コノ系	4	48	46	20	8	126
	ソノ系	19	20	73	57	9	178
	アノ系	26	57	366	55	18	522
コーソー型	コー系	1		16			17
	ソー系	2					2
エート型		26	43	37	81	16	203
マー型		65	9	336	28	1	439
ナー型		12	6	13	15	1	47
ハイ型		6		115	2		123
ナンカ型		4	22	16	25	10	77
ネー型				12			12
合計		209	254	1191	363	72	2089
総発話数		409	414	705	570	210	2308
一発話のフィラー数		0.51	0.61	1.69	0.64	0.34	0.91

添付資料 4：出現位置による分類

- ・表Ⅳ 出現位置による分類
- ・表Ⅴ 出現位置によるフィラー分類（型別）

表Ⅳ 出現位置による分類

型	フィラー	発話頭			発話中			発話末			その他	合計④
		日	中	合計①	日	中	合計②	日	中	合計③		
母音型	ア	5	3	8	6	2	8					16
	アッ	24	10	34	31	3	34					68
	アー	81	25	106	11	3	14				2	122
	アーー	1		1								1
	エッ	4		4	1	1	2					6
	エー	7	1	8	106	9	115					123
	オー	2	1	3	4	0	4					7
コソア型	コノ				4	0	4					4
	コノー	1	3	4	65	53	118					122
	ソノ				3	1	4					4
	ソノー	9		9	135	28	163				1	173
	ソノーー				1	0	1					1
	アノ				14	1	15					15
	アノー	35	12	47	395	61	456					503
	アノーー	1		1	1	0	1					2
	アノネ				1	0	1					1
	アノードスネ				0	1	1					1
ソー型	コー				17	0	17					17
	ソー	2		2								2
エート型	エト	5		5	17	1	18					23
	エット	4		4	11	0	11					15
	エトー	4		4	20	7	27					31
	エート	6	6	12	76	45	121					133
	エートネ				1	0	1					1
型マ	マー	42	2	44	387	8	395					439
ン型	ト	2		2								2
	トー	2		2	3	1	4					6
	ウント				3	0	3	1		1		4
	ウンント				2	0	2					2
	ウンン	3	4	7	20	2	22	2		2	2	33
型ハイ	ウン	15		15	102		102	3		3	2	122
	ハイ				1		1					1
ナ型カ	ナンカ	4	4	8	37	31	68	1		1		77
型ネ	ネ				10		10					10
	ネー				2		2					2
合計⑤		259	71	330	1487	258	1745	7	0	7	7	2089

注：① 表の中の「日」は「日本語母語話者の場合」を、「中」は「中国人日本語学習者の場合」を表す。

② 合計①— 発話頭における日本語母語話者と中国人日本語学習者の数の合計

③ 合計②— 発話中における日本語母語話者と中国人日本語学習者の数の合計

④ 合計③— 発話末における日本語母語話者と中国人日本語学習者の数の合計

⑤ 合計④— 各フィラー(またはフィラーの各型)の発話頭、発話中、発話末、その他の合計

⑥ 合計⑤— 日本語母語話者または中国人日本語学習者の発話頭、発話中、発話末のフィラーの合計

⑦ 表Ⅴも同じ規則に従う。

表Ⅴ 出現位置によるフィラー分類 (型別)

		発話頭			発話中			発話末			その他	合計④
		日	中	合計①	日	中	合計②	日	中	合計③		
母音型	ア系	111	38	149	48	8	56				2	207
	エ系	11	1	12	107	10	117					129
	オ系	2	1	3	4		4					7
コソア型	コノ系	1	3	4	69	53	122					126
	ソノ系	9		9	139	29	168				1	178
	アノ系	36	12	48	411	63	474					522
コーソー型	コー系				17		17					17
	ソー系	2		2								2
エート型		19	6	25	125	53	178					203
マー型		42	2	44	387	8	395					439
ンー型		7	4	11	28	3	31	3		3	2	47
ハイ型		15		15	103		103	3		3	2	123
ナンカ型		4	4	8	37	31	68	1		1		77
ネー型					12		12					12
合計⑤												2089